B

盟



No. 694

三月号

西尾 栞 喜寿·金婚 句碑建立五周年記念川柳大会

日 時 昭和60年9月29日(日) 午前10時開場 会 場 新阪急ホテル2階 紫の間 大阪市北区芝田1丁目1-35 TEL 06 (372) 5101

□初	辞	日本川柳協会理	即長	秦島	茶六日	E
□おはな	:	柳 塔 社	顧問。	 東野	大八日	E
□ 題と選	選者 (各是	重2 句 ◎欠席投句拝	辞)			
	L 12 3	ン」	八木	千代	選	
	「紀	杯」	橘高	蔗 厘	選	
	25	気」	寺 尾	俊平	選	
	思い	111	小松原	爽介	選	
	LYN	説」	渡辺	蓮 夫	選	
	先	祖」	去来川	巨城	選	
	「太	場」	礒野	いさむ	選	
事前投句	「情	熱」	西尾	栞))	選	

事前投句はハガキに2句・締切=8月31日 (宛先) 〒581 八尼市八尼木2-135 西尾 栞

□ 会 費 5,000円 (祝宴共)

主催 川 柳 塔 社

酒禅一味

西 尾 栞

早速入会した。二ヶ月に一回の例会と、 は根拠のない俗説で、昔は桃の節句(三月) は冷やである。冷やは身体に悪いというの 佳の言葉があてはまる。この会の酒の賞味 等が出されるので、洵に優雅にして風味絶 銘柄だと東北の特産品を、四国産の司牡丹、 り揃えて、冷酒で賞味する。 は鹿児島までの銘酒(地酒)を十種類ばか も開催された。例会では、 見の会、花見の会、酒倉見学等の臨時の会 いう名の会が出来た。日本酒の好きな僕は だから「お燗」という言葉が生れたのであ 十月から二月までは、 から重陽の節句(九月)までは冷やで飲み、 土佐鶴などというと、ドロメ、鰹のたたき 一年程前に「いい日本酒を味わう会」 あたためて飲んだ。 北は青森から南 あては東北の ٤

酒の銘柄は色々あって、現在全国で三、ろうか。というのがある。春酒は日本酒だと新酒、というのがある。春酒は日本酒だと新酒、

一、菊、梅、桜、牡丹等、花の名をつけると思われる。酒の銘柄にはおろかな名前がなく、日本民族にふさわしく、いかにもがなく、日本民族にふさわしく、いかにもがなく、日本民族にふさわしく、いかにもの銘柄を出しているので、数千の銘柄がある。一社でいくつか

一、土地の山河の名をかりたもの一、雪、露、泉等、自然現象のもの一、雪、露、泉等、自然現象のものたもの

等の傾向がある。

花や自然現象や地名などは、四季の移り花や自然現象や地名などは、四季の移りを愛し、その風土を大切にした日本人の自然感の現われであり、鶴亀などは、その長寿に造る人も飲む人も共にあやかりたの長寿に造る人も飲む人も共にあやかりたものは、その郷土愛の現われであをかりたものは、その郷土愛の現われであをかりたものは、その郷土愛の現われであるう。つまり日本酒の銘柄には、四季の移り名などつけることの多い諸外国の酒銘とは

愈々酒なくて何の己れが桜かなの春三月

唐代の詩人岑参の詩に

花は玉香を撲ちて

「旅に出たら、そ

「旅に出たら、その土地のお酒を」とい「旅に出たら、その土地のお酒を」といれるものとの出合い」が、その土地の風知を眺めながら、人情にひたりながら、お物を眺めながら、人情にひたりながら、お物を眺めながら、その郷土料理を肴にその土地のお酒を飲めば、旅情と言い、情緒といい、歌に句に遊ぶものの最高のものない。歌に句に遊ぶものの最高のもの

「未知」という字をあてた。見知らぬ道を「未知」という字をあてた。見知らぬ道を喜びこそ、まさに酒を嗜む旅人の最上の生涯の喜びであろう。僕には来る二月十四日涯の喜びであろう。僕には来る二月十四日

曽て万葉人は「道」という言葉に「美知

エリートの末路はたんと知っているあかあかと燃ゆる炉の色旅の色旅やよし地酒につづく囲炉裏酒

李白一斗杜甫一斗の酒の詩義理を欠くのが風邪の予防とか



川柳塔 三月号 目次 題字・中島生々庵/表紙・直原玉青

西

尾

栞

: 1

酒禅一味

川柳塔 息子との旅 ■川柳太平記 (82) 自選集 (同人吟) 川柳の群像 前田雀郎 東 //\ 西 尾 出 野 大 智 栞 八 : 選 子 : 4 : 32 2 30

秀句鑑賞

水煙抄 同人吟 水煙抄

上方前句付集の雄編「明石人丸大明神三万句集」

(6) :

[A]

達

義

:

34

紫香 寿

> 40 36

安 黒

藤 JII

美

子 選 雄

:

39

西

Ш

幸

:

59

誹風柳多留廿六篇研究(十九丁)·······

息子との旅

// 出 智 子

四、五枚と決められ、ついそこまでというよ だが、息子の点検で防寒用の半コートと肌着 だけにバッグにあれもこれもと詰め込んだの 立ったように「母さん、北海道へ連れて行っ うなスラックス姿で旅立った。 は思いがけないことであった。寒い所という たことのない、まして息子と一緒なんて私に てやろう。」と言い出した。二泊以上の旅をし 連休(四月二十九日から三日まで)に、思い 長男が大学を出て、就職してから初めての

楽しんでいるような気楽さであった。 点だけは説明してくれるので、私は一人旅を 少ない息子とはあまりお喋りはしないが、 り、また、宿泊もその都度、交渉して決める という具合で至極気ままな旅である。 レンタカーを利用したり、タクシーに乗った 並び、それは見事な出迎えをうけた。 には眼を疑うばかりの大きな蕗の薹が一面に 走路を滑るように走っている。滑走路の両側 旅慣れた息子との旅は行き当りバッタリの さっきまで大阪に居たのに、 もう千歳の滑 口数の

「いりいり	前向きに行く太陽を友として私の句	瞼	座右の句		編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	各地柳壇(佳句地10選/田形美緒選)	本社二月句会	柳界展望	初步教室	「大 胆」		「	山頭火とポーと啄木(2)	60年新年おめでとう会	愛染帖
À	崎			A	薫風				本	園	槇	堀	草	板	橘
	Щ	正			鬼				田	園山多賀子選	田	端	XIJ	尾	高
36	美			0	・鬼遊・史好…				恵二	賀マ	英詩	三男	堕	岳	薫風
C	子	朗		1	史好				朗	選	選	選	駄	人	選
A	7			*	- 120	i	i	•	;	:	:	÷	÷	÷	:
6)	85	73	69	67	64	63	62	62	66	60	56

風景が一変して観光どころか、雪の恐ろしさ風景が一変して観光どころか、雪の恐ろしされて、神秘とさえ感じられた。 摩周湖では、いて、神秘とさえ感じられた。 摩周湖では、水で、神秘とさえ感じられた。 摩周湖では、水の間に寒さにもめげず咲いていると、水網走で降りて暫く雑木林を歩いていると、水網走で降りて暫く雑木林を歩いていると、水網走で降りて暫くない。 それが網は五月という寒さで、札幌の街

をまざまざと見せつけられた。

ボテルの外へ出ると澄み切った空を背景に 穏やかな山の白い稜線が、くっきりと切りと られ、時折、一条の夕陽を浴びて金色に輝く 山々が遠く横たわっていたのが網膜に残って いる。北海道のどの風景も印象は強烈であっ た。冬の名残りを留めている北海道へ息子と 旅をしたこと、そして、再び見ることはない だろうこの雄大な冬景色をかみしめながら暫 くの間、寒さを忘れて二人で佇んでいた。 それから十年の歳月を経た今日もなお、私 の得難い宝として胸の奥深く仕舞い込んでい の得難い宝として胸の奥深く仕舞い込んでい の得難い宝として胸の奥深く仕舞い込んでい の得難い宝として胸の奥深く仕舞い込んでい

たいものと願っている。

た息子の子供達と雛祭りを一緒に過してやり

三月は女性の月といわれる。せめて旅をし

うな感動はもう無かった。



尾 市 内 海 幸 生

1)

切ろう

朝 0

布団をたたむとき

しかと踏み手抜きは知らぬ牛の四 つる陽 無神論者では居れ X 肢

タンス出 た晴 着が予報聞 Vi てい る

大ニュース七十五日の間がもてぬ 前なら悪口言う 越の寒梅当てきれず がよい

市

波多野 Ŧi.

弘前

楽庵

新曆

初

春

小 出 智 子

大阪

市

電柱

の影も三月とはなりぬ

退官はしても定規のような人

īī

士討

ちばかりしている天邪鬼

正

面

E 10

れば味

方も鼻につき

昼 魂

日中電気がつ

4 モンター ている吹雪

を売っ

た男の

ジュ

昭和ひとけた掌を合わす箸があり

漬物石が重たいなんて言 辻褄を合わ てく n る寿司 10 の折 ません

春よ来い老母の バレンタインデーが終るといつも風邪をひ 血圧下げに来い

尼日 0) 酒 11 まだ燃えるものたしかめる くにちあるだろう

牛歩には蓬萊山はまだ遠い ひとりには重 重箱の中もしきたり生きている 43 冷たい 鍵の 束

橋 0) 風によろめく朝夕よ

岸

和田田 市

高

橋

操

子

豪雪のこわさ見てから絵にならず 機械化が進む人間寝てなさい たか 43 里に生れて雪こんこ

0

尾

儿

栞 選

幸

和歌山市

凸 <

Ш

空襲で焼いてしまった雛まつりで襲で焼いてしまった雛まつりでリコ犯元善人が一人いるがジタルの時計に老いも気ぜわしいがジタルの時計に老いも気ぜわしい保険屋に何を今さら死生観松原市	八足市のから八のから八のから八の旅の幕下ろす「ありがとう」一つの旅の幕下ろす歴史講座もう旅人になっている	は生日大切なこと告げにくる おとといの夢は消そうとする日記さよならの数は忘れてしまいましょう 十三重の塔と約束してしまう 米子市 ※山神社	先端技術者今日ロボットと飲むゆとり ロボットが唄うと技術者酔うてくる 市飯の色しあわせが待っている 米子市 見通しの神に嘘などつけないな 十字架としてならギブス軽すぎる
谷	高	野	八
垣	杉	坂	木
史	鬼	な	千
好	遊	7	代
ベ 年 驕に 境 煙か 寄 ぶ ま 界 草	努 初 年 後 コカ 詣 初 遺 ツ	独竹よ黒赦椅	やカ改恋小銭 がシ装病理湯
らずを並べ還暦いじめられりの知恵にうなずく自然食りの知恵にうなずく自然食れる僧へ哀しく意見持ちれる僧へ哀しく意見持ちれる僧へ哀しくまだけに出すふところ手吸うときだけに出すふところ手	して修復夫婦の隙間風いざパチンコ屋へ向かから今年も友の急死のからのの死のがある。	独身貴族ああ男性化粧品 とく食べる男冬眠するのかも はく食べる男冬眠するのかも はく食べる男冬眠するのかも はりしごっこに疲れた定年や	を愛し次第に少数派 をしてもゴチャゴチャ荒物屋 をしてもゴチャゴチャ荒物屋 をしてもゴチャゴチャ荒物屋 をしてもゴチャゴチャ荒物屋
ずを並べ還暦いじめられ (大きだけに出すふところ手を並べ還暦いじめられ) できまれた (大き見持ち) では、 (大き見持ち) では、 (大きしたことか) では、 (大きしたことか) では、 (大きしたことか) では、 (大きしたことが) では、 (大きしたことが) では、 (大きした) では、 (大きした	て修復夫婦の隙間風ざパチンコ屋へ向から今年も友の急死の残したままで年が明残したままで年が明	の女の夢を見た 似合うきれいに泣く女 る男冬眠するのかも 後は明日も雪が降る ああ男性化粧品 倉敷市 野	を受し次第に少数派 をしてもゴチャゴチャ荒物屋 をしてもゴチャゴチャ荒物屋 をしてもゴチャゴチャ荒物屋 をしてもゴチャゴチャ荒物屋
ずを並べ還暦いじめられてを並べ還暦いじめられますを並べ還暦いじめられる僧へ哀しく意見持ちる僧へ哀しく意見持ちるの知恵にうなずく自然食の知恵にうなずく自然食	て修復夫婦の隙間風ざパチンコ屋へ向から今年も友の急死の残したままで年が明残したままで年が明	の女の夢を見た 似合うきれいに泣く女 の女の夢を見た る男冬眠するのかも 後は明日も雪が降る ああ男性化粧品 倉敷市	を愛し次第に少数派 をしてもゴチャゴチャ荒物屋 をしてもゴチャゴチャ荒物屋 をしてもゴチャゴチャ荒物屋 をしてもゴチャゴチャ荒物屋

店先で粗品と書いてはばからず風向きにもう逆らわぬ父の肩離婚話を遠い角度でみる夫婦白蟻のビラに新築驚かされ竹原市放任の果てに高校受験来る 影絵冬内緒ばなしはほどほどに 影絵冬内緒ばなしはほどほどに	に馴れて六十路の三地い服んだ薬の歩を一世見送った梅便を一世見送った梅便を一世の出来ぬ男の無精髭の出来ぬ男の無精髭の出来ぬ男の無精髭の出来ぬ男の無いない。	お豆腐の出臍は別に咎めまいま豆腐の出臍は別に咎めまいをまる五指がある年金の勘定をする五指がある大阪市雪解けを刻む目立たぬ音もある。	うちに居た牛のホルモンかも知れず振る舞いに酔うて独演して戻る 岡山県二合ほど飲むと落ち着く手のふるえ
小	恒	中	土
島	松	Щ	居
蘭	пŢ	滋	耕
幸	紅	雀	花
全自動しまった電池切れていた肚きめてしまうと道が拓けてたコシヒカリ私の過去は飢えた捕虜内堀を埋める話は孫を連れ春うららビーフステーキ厚く切る春りららビーフステーキ厚く切るがあるせめて背筋はまっすぐに寝屋川市	4話し相手が欲しくな 4話し相手が欲しくな をそっと教えている晴を へ木枯らし心地よ を 乗った 横へ木枯らし心地よ	つ角三を帯がこと もあると もなると	無念無想のパチンコ玉とならざりき 占いの本など読んでいる二月 アパートの壁よ喧嘩を小さくする
	玉	津	宮
柴			
柴田	置	守	西

優しさが欲しくて珈琲店をさがす を眠のあいだはビデオに撮ってある を眠のあいだはビデオに撮ってある もう一つの影を耕す朝の鋤 ねんごろに愛のわき芽を温めよう なんごろに愛のおき芽を温めよう	に乗れば笹舟まわり 育てが終えて女の太い 育の気分も抜けて風邪 でるま水のなさけをま	反芻の牛むかし昔を言いたがりたなくしに勝つ一念の釘を打つわたくしに勝つ一念の釘を打つとの神が聞いてくれるか五社巡りどの神が聞いてくれるか五社巡りがの神が聞いてくれるか五社巡りがの神が聞いてくれるか五社巡り	雪かきの雪で作れぬ雪達磨 を料調演歌へすこし遠く居る ・北の湖引退国際青年年 大閣の好物とかや蕗のとう ・本閣の好物とかや蕗のとう ・本閣の好物とかや蕗のとう
	林	小	浦
		谷	野
	瑞	िपा	和
	枝	Ш	子
相談をする気へ夫はもう寝息 を病でも子供寝かせる子守唄 を病でも子供寝かせる子守唄 を病でも子供寝かせる子の順や子 を表した願い事	顔ふりまいてピエロでない自信か向けば振り向かれていた晴着の寝顔見えていた日の夢か微笑	見えぬ ただそれだけですよお月様子を頼りながらも頑固崩されぬ 気付くのは佗しきものよ老いの自我気付くのは佗しきものよ老いの自我 はよし眠れば見えぬ苦も忘れ 自杖は春のぬくみが欲しいだけ	経すこしゆるめ汐どき待つとする 白鳥を数え平和だなと思う よく回る舌にも欲しい句読点 ちょっかいが好きでも無口には勝てぬ 身構える人に優しい言葉選る 明子鼻矢っ張り君は庶民的 島根県
越	ţ	堀	堀 久
村	ž	I	江家
枯梢			正 仕 朗 男
		3	men.

ほつれても夢あみなおす針を持つ ほつれても夢あみなおす針を持つ 風花へ人妻つばき緋をいだく 風花へ人妻つばき緋をいだく	番風呂へやって嫁女は主婦の会を表も齢を重ねて一周忌出雲も齢を重ねて一周忌と表も齢を重ねて一周忌と表も	マーホントーが出て仕事始め いうちに活火山にもなるつもり でした接近に身構える の暮しを牛にひかせたい の暮しを牛にひかせたい の暮しを中にひかせたい の音した接近に身構える 岡山市	称で呼ばす接近術もある かで呼ばす接近術もある なだけ残った仮面にしがみつき 関山市 関山市
松	原	時	花
原		末	田
寿	独	· —	たけ
子	仙	灯	志
をおに書こうが遺書のリハーサル 野線の死角で走る汽車ポッポ 幹線の死角で走る汽車ポッポ 幹線の死角で走る汽車ポッポ	し合う心で聞こう除夜の鐘 報曳野 猿の徳にかくれる齢となり を 関係の動きはじめて酒を注ぐ 立腐の動きはじめて酒を注ぐ 立腐の動きはじめて酒を注ぐ が しょう いっぱい かいしょう はいかい しゅう	中本ルたっぷり不倫の包生を入り、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、	別の胸にあながいしてなおながい
		44-	学
よ 子	優	光	洋々

本井 菁 居	倒産をしてから夫婦の気が揃い	宝くじ当ったような嫁が来るサンクラス心の内までかくせない	心で結ぶ絆の嫁姑	狙われる椅子もないまま定年期	七尾市が	片方の耳で聞いてる絵空ごと	道のりの真ん中へんにある旅情	みかんから優しさ貰う初春ごたつ	水滴をためて必死な冬の窓	こだわりは微塵も持たぬ自動ドア	牛の瞳へむごい言葉はなげられぬ	米子市 土	スピッツがあまり静かで気にかかり	鍵かけて虚飾の館たそがれる	トップセールスが大好きな七曲り	進行形が好きで少年あきらめぬ	石橋をたたいてから吹く父の笛	寒くとも野鳩に帰る家が無し	竹原市 本	宝くじの夢五千万の使いみち	宝くじ大安に買い夢を追う	痩せたなとスカートだけが言うてくれ	書き初めの墨の香りへかしこまり	着実に歩めと床の牛が言う	元旦に子らが揃うて満ち足りる
香 居 居 石の位置大の職・成の回り椅子 倉吉市 石の位置大める庭師の小半日 年金にボーナス欲しい十二月 年金にボーナス欲しい十二月 魚師の目に泣きたい海のを謝は忘れられ 本当に産む気へ男来なくなり 漁師の目に泣きたい海の色があり 牛の背へ椿一輪挿して帰る かっこよい懺悔でする不倖せマンションの夜景へ飽きた日の孤独 育時たぬ男の肩がたよりない 海の色があり かっこよい懺悔で始まる日記なり 東大阪市 商談はそこそこにして酒の席 終電車矢っ張り家に帰る顔 奏病みて五年目																									
世里 居居					局							沢													
ひとすじの職晩成の回り椅子 肩書を捨てたら楽にものが言え 捨てた子が残留孤児で逢いに来る 運のいい時の感謝は忘れられ 石の位置決める庭師の小半日 年金にボーナス欲しい十二月 人生に足跡残す句碑が建ち 本当に産む気へ男来なくなり 漁師の目に泣きたい海の色があり 牛の背へ椿一輪挿して帰る かっこよい懺悔でする不倖せ マンションの夜景へ飽きた日の孤独 変がけ本音吐いてた落ちこぼれ かっこよい懺悔で始まる日記なり かっこよい懺悔で始まる日記なり かっこよい懺悔で始まる日記なり をで餅やく友だちが来て楽し かっこよい懺悔で始まる日記なり 東大阪市 商談はそこそこにして酒の席 終電車矢っ張り家に帰る顔 を病みて五年目					秀							みど							菁						
をすじの職晩成の回り椅子 書を捨てたら楽にものが言え てた子が残留孤児で逢いに来る のいい時の感謝は忘れられ の位置決める庭師の小半日 金にボーナス欲しい十二月 生に足跡残す句碑が建ち 生に足跡残す句碑が建ち 生きを病院でする不倖せ ンションの夜景へ飽きたい海の色があり の背へ椿一輪挿して帰る 生きを病院でする不倖せ ンションの夜景へ飽きた日の孤独 変の大きさにだまされる 市車曳いても絵にはならぬ牛 がけ本音吐いてた落ちこぼれ 高田林市 のこよい懺悔で始まる日記なり っこよい懺悔で始まる日記なり 東大阪市 東大阪市 東大阪市					峰							里							居						
A H	病みて五年	電車矢っ張り家に帰る顔談はそこそこにして酒の	{ 	っこよい懺悔で始まる日記	で餅やく友だちが来て楽	持たぬ男の肩がたよりな	所車曳いても絵にはならぬ	恵袋の大きさにだまされ	分だけ本音吐いてた落ちこぼ	林	ンションの夜景へ飽きた日の孤	でする不倖	の背へ椿一輪挿して帰	師の目に泣きたい海の色があ	当に産む気へ男来	ープロの指が愛撫へ生きてい	木	生に足跡残す句碑が建	にボーナス欲しい十二	の位置決める庭師の小半	のいい時の感謝は忘れら	てた子が残留孤児で逢いに	書を捨てたら楽にものが言	倉吉市 奥	じの職晩成の回り椅

働

芳

仙

田

美

代

下

愛

論

谷

弘、

朗

浜田市	のは不得手挽馬として暮らす	生みの苦しみして含てられる真珠貝	うやっと浮ってってかは含てっし	もいぬ部屋で世	正直な人は居ないと手長猿	歓喜天えらい仏を思いつき	今治市	バッカスが近付いてくる春の宵	龍安寺石の運命と向かい合う	くだみ	急勾配明日へ続いて行くレール	嫁姑しつけの糸が長過ぎる	万年青の実雪の生家の窓あかり	西宮市	日向ぼこ生きてることはありがたし	逢えば逢うたで憎らしくなる昼の月	冷凍魚眠りつづける去年今年	世間知らずで山の向うを聞いている	物笑い河豚提灯にされてまで	とても素直にいたわり貰う冬日和	尼崎市	寝巻だけせめて花柄着せてやり	三十五キロ妻の素足を痛う見る	妻よ何考えて寝る雨の音	古女房いるだけでいい病みつづけ
佐							矢							奥							春				
々木							野							田							城				
小							佳							2							年				
裕							雲							つ子							代				
界市 高	馬鹿になろうバカになろうと米をとぐ	忽り、、でなっかっ曽りな…ンチョンに暮らし楫える	ロー・いしのニノへ作せ	の日ぐらしの二人へ幸せが	まだ残る若さをたたむコンパクト	岡山県 嘉	葬式明日は我が身の	寄生虫の様な人生だったかも	弱肉強食数の力で弱者生き	嫁に似たとこには触れぬ孫自慢	硝子戸の中漱石に触れる冬	大阪市 川	の手の	尿の数正の字が出	全力投球して母酸素を吸っている	室のカーテン何と無表	院のラジオ	病院の窓から拝む初日出		飴だけを与えて甘い親となり	間違っても賞めて貰えぬ役どころ	平凡に終る予想の人生譜	釘一本打たれて初老の仲間入り	言訳はしない代りに何もせぬ	重い腰上げても矢張り知恵が出ぬ
橋						数						П							部						
千万子						兆代賀						弘生							紀久子						

シクラメン雪の冷たさなど知らず 一	けのし夫は記孫婦	大阪市 江 城 修 史もう逢えぬ面影だけのちぎれ雲生きがいにしては貧しい父の詩生きがいにしては貧しい父の詩生きがいにしては貧しい父の詩というろたえよう	たつむりの背中ロー黒をつけて大物には常とやまた順番は狂された女が眠る禁猟	接間チューハイの客Bク人めく顔で夫婦の一張羅年玉少女は街へ夢買いに旦の心になって薄化粧
初雪や行き着くところ酒になる豆炭の家風に嫁も馴れてくね大ゴミ中国の言葉で祖国の富士に哭く	うほどに背筋をのばすのでせる神さま無慈悲間のくらし灯を消し灯を消し灯を消し灯を消し灯を消し灯を消し灯を消し灯を消し灯を消し灯を消	受験よAB型なら輸血して対していますを買っても貧乏していますを買っても貧乏していますを買っても貧乏していますを買っても貧乏していますを買っても貧乏しています	一呼吸すれば楽にもなる怒り お調の背広大学あきらめる 音楽にひたりロマン派の孤独 音楽にひたりロマン派の孤独	耕雨読じじくささは抜けら康の為に三反の田を守るい日はイチゴハウスへ猫も

丸

苗

手仕事の里陽だまりがすばらしい 手仕事の里陽だまりがすばらしい が金や娘結局嫁ると決め が金や娘結局嫁ると決め が金や娘結局嫁ると決め	会によりと草はむ牛を明日は売れびりと草はむ牛を明日は売んびりと草はむ牛を明日は売んびりと草はむ牛を明日は売んびりと草はむ牛を明日は売んびりと草はむ牛を明日は売んびりと草はむ牛を明日は売んびりと草はむ牛を明日は	下手の職人技で物を言う様を保証に立てて指輪はから私立も受けよ親節の減量戦はつらいもの節の減量戦はつらいもののではないから私立も受けよ親節の減量がはかられたがある。	その辺の事よ骨身の友がいる 要庭の菊身贔屓に見た香り 再会のまだ旧姓でいる歪み 再会のまだ旧姓でいる歪み 生蠣を打つしびれた指を火に翳し といるである。 といるである。 といるでは、 とのななるでは、 とのなななななななななななななななななななななななななななななななななななな
樫	越	小 斉	林
谷	智	林藤	野
寿	_	由 三十	更生
馬	水	多 十 四	光
元部下に馬鹿ていねいに断わられどこをどういやな奴また昇進しとったがら旅路は楽しいの同行二人だから旅路は楽しいの下関市がある。	裏切った方が胸はるめぐり合い 中し分ないひとだから拗ねてみる 中し分ないひとだから拗ねてみる なが弱くなったを忍耐とも見られ 気が弱くなったを忍耐とも見られ	ごが ううとをり	がかり付けて存せなど自っ がかり付けて存せなど自っ がかり付けて存せなども 無理 紙交換が来て今年も動き出 会毎年減ってゆくさだめ ま取りになるやも知れぬ雑 の中スチュワーデスから閉 の中スチュワーデスから閉
玉	增	都	児
<i>51</i> .	田	倉	島
半 休 門	次章	求	与 呂 志

単純な男食欲旺盛で 奈良市 森 田 カズエ 寺町の角を曲れば鉦の音 豪良市 森 田 カズエ 大宇宙俺に教えず俺を生み	いも無いこの拳どうの様に答えのくる笑の様に答えのくる笑のお番だ牛が教えなりを酒の出番だ牛が教え	帯に短しあれこれ言うてるうちは良し 大阪市 河 井 庸 佑 定退へ噂は噂を呼ぶ人事 大阪市 河 井 庸 佑 腹心をたてて予防の策を練る	空咳で家長の威厳示しとき 大田市 藤 田 軒太楼立場上一歩さがって顔をたて 大田市 藤 田 軒太楼	割り込んで見たが序列で進めない青春は通過で終着駅近い
本年も尻に繋がれたままでよし 都守番の母用向きへ五十点 と	(雀で血液型まで見抜かれる) いぬれば愚妻刺ある口を急と聞いた老いの言葉に重みと聞いた者のの言葉に重みと聞いれば愚妻刺ある口をき	が歴史の止機	を で で で で で で で が な 私の事や無かっ で に 渡さ れてい も 嫁に渡さ に で されてい	一流の門へ踏台高く積む 大阪市 西 森
神	忠	春	雄	林花
慶	三	日	々	村

寝なあかんもう寝なあかん二時をきく 掌にのせるとみかん温うなる 質しさは言うまい孫とむくみかん 忍の字ではじまる女の日記帖 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市	書に頼りかぼそい子に育て がようやくと言うとこで逝きがようやくと言うとこで逝きがようやくと言うとこで逝きがようやがない子に育て	マーキュリー所らなの下上合と	いか、重っでより、これなりまなければ本音が言えぬ気要の味付も過去のものとなせち前に独りチビチビ暮れせち前に独りチビチビ暮れ
神 夏 磯	川 「 「 平 一 一 田	飯田	
道	秋 実	悦	
	T A STATE		
子	女 男	郎	
なの名で私に自由にならぬ金 私の名で私に自由にならぬ金 ひこばえやロマンを秘めし城の趾 この春も愛を求める旅仕度 三ヶ日核の事など忘れさせ 人の世のさみしさ絵馬堂につめてある 大阪市	会母に煙の絶えぬ墓 はまがゆれている はまがゆれている はまがゆれている はまがゆれている はまがゆれている	に	ではますとこころの色が見 を消すとこころの色が見 を消すとこころの色が見
天	藤	安	本
正	村	藤	間
千	×	寿	満津

女

梢

避けられぬ冬ならたのしく迎えよう 与鳥を二三羽描くと冬の画布 白鳥を二三羽描くと冬の画布	馬牛に乗り替えてから平和 でライドは譲れぬ白い磁器の皿 でライドは譲れぬ白い磁器の皿 がとくる のな良い子良い子しているお年玉 のは、のでは、のでは、のでは、のでは、のでは、のでは、のでは、のでは、のでは、の	蜂先を社会へ向けて逃げておく 選暦が喜寿に励まされて行く遍路 選暦がなんのなんのと平均値 もし妻が居らなかったらを考えず もし妻が居らなかったらを考えず	思い出はかな文字のような人だった思い出はかな文字のような人だったまだがりへまた深爪をしてしまう。 大阪市 西
西	石	福植	さ西
村	垣	本 山	出
かすみ	花	英 武	楓
À	子	子 助	楽
でッサージに定年揉まれながら知る信念を通してまげぬ鶴の首 方向をきめて迷わぬ鶴のむれ 守口市 どん底に生れどん底忘れてる	過去背負いすぎて息切れしませんか割り切れぬ数は捨てよう冬の海 というでゆっくり行こう春の道 生の背でゆっくり行こう春の道 米子市	海鳴りをきいて水仙凜と咲く ひと葉ずつ落として木立眠くなる 公と葉ずつ落として木立眠くなる 絵馬を買うどんでんがえしないように 煙幕をはりはり夫へ語り出す ひと眠りしたら答が出来てくる 米子市 マンネリの風吹きぬけるアーケード	離壇へ祖母も女として坐り 高心をいたわるように花ばさみ だまされておこう今夜の夫婦箸 だまされておこう今夜の夫婦箸
サージに定年揉まれながら底に生れどん底忘れてるをきめて迷わぬ鶴のむれなきのとれどん底忘れてるない。	去背負いすぎて息切れしませんりでゆっくり行こう春の道 の背でゆっくり行こう春の道 米子	獄耳丸い話は聞きもらす ないこれで、他凜と咲く と葉ずつ落として木立眠くない 馬を買うどんでんがえしない 馬を買うどんでんがえしない と眠りしたら答が出来てくる と眠りしたら答が出来てくる	まされておこう今夜の夫婦箸 心をいたわるように花ばさみ 心をいたわるように花ばさみ い訳が夫婦の距離を遠くする
サージに定年揉まれながら知る底に生れどん底忘れてるをきめて迷わぬ鶴のむれ守口市をとめて迷わぬ鶴のむれないといいがある。	去背負いすぎて息切れしませんかり切れぬ数は捨てよう冬の海りこぶし開いた日から海が凪ぎ 米子市の背でゆっくり行こう春の道 米子市	獄耳丸い話は聞きもらす 獄耳丸い話は聞きもらす	まされておこう今夜の夫婦箸 心をいたわるように花ばさみ 心をいたわるように花ばさみ い訳が夫婦の距離を遠くする
サージに定年揉まれながら知る底に生れどん底忘れてる。 守口市 羽をきめて迷わぬ鶴のむれ 守口市 羽らきどうにか人の話聞く	去背負いすぎて息切れしませんかり切れぬ数は捨てよう冬の海りこぶし開いた日から海が凪ぎ 米子市 田 米子市 田 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	獄耳丸い話は聞きもらす獄耳丸い話は聞きもらす 獄耳丸い話は聞きもらす 獄耳丸い話は聞きもらす 獄耳丸い話は聞きもらす	まされておこう今夜の夫婦箸 心をいたわるように花ばさみ 心をいたわるように花ばさみ

田 明 春	信心を欠かさぬ寡婦の小さい旅 妻の掌の皺の深さを知った旅 嘘にうそ重ねて旅がつらくなる 脳山市 川 対切らぬ酒がお祝いごとを待つ さよならに足音だけがついてくる	でやる旅に出りて、 でもない はん かり はん はん かり はん	表肌 : 触れ たくて 素肌 : 触れ たくて 素肌 : 触れ たくて 素肌 : 触れ たくて 素肌 : 触れ たくて 島根県 小 島根県 小 高 に 原	雀
春	立而		,	
1 では、	柳	文	白明	
り居てひとりになれる時が好き しゃんと陛下おみあし踏みしめて ら笑う美しいなと思う 中に母を囲んで屠蘇の味 中に母を囲んで屠蘇の味 で神は扉を開けて待つ の祝詞は父の勇み足 なにも茶漬が旨い三杯目 も母がはなせぬ割烹着 も母がはなせぬ割烹着 しい瞳だけど闘志は秘める牛 く上って空がつかめそう ない鏡に青い鳥が住み しい瞳だけど闘志は秘める牛 く上って空がつかめそう ないう宝 トボールへ年金トコトコ朝を出る トボールへ年金トコトコ朝を出る トボールへ年金トコトコ朝を出る 中を抱く棘の痛みは承知して や母の深さへ逢いに行く	子	平	汀 舂	:
	ートボールへ年金トコトコ朝を出る の手の子の手の愛に身をまかす の手の子の手の愛に身をまかす の手の子の手の愛に身をまかす の手の子の手の愛に身をまかす の手の子の手の愛に身をまかす	オそれが取得という宝 オぞれが取得という宝 オぞれが取得という宝 オぞれが取得という宝 オぞれが取得という宝	中に母を囲んで屠蘇の味中に母を囲んで屠政の味の祝詞は父の勇み足の鈴ならいさんで買いましょうりの鈴ならいさんで買いましょうりの鈴ならいさんで買いましょうりの鈴ならいさんで買いましょうりの鈴ならいさんで買いましょう	ら笑う美しいなと思う しゃんと陛下おみあし踏みしめて り居てひとりになれる時が好き

子

風

西华

良

更え水に流した恋の彩	定年を好きこ延ばして派手な服一寸待って登記は親の名にしましょ	影武者を泳がせている安堵	傷癒えて逢いたくなった姉妹鳥	庭の木が女の便りを持っている	京都市	一歩ふみ出せば心にあるゆとり	若松に素直な心教えられ	空しいと思えば神も背を向ける	クラシック聞いて女が謀反する	愛し合い夫婦にうそのない暮し	大阪市	足ぶみをしてても春はもうそこに	在宅と見たは電気の消し忘れ	別べつな事しゃべってる腹と口	素性など聞くなと浮き雲山をこえ	わからない顔と恋とは別らしい	大阪市	お正月に雛人形のコマーシャル	おみくじが大吉だった安堵感	ご機嫌な陛下を皆がお見送り	ご柔和なお顔で陛下相撲見た	一月の五日はわびし肖二の忌	芦屋市
藤					Щ						黒						藤						竹
田					本						田						田						中
泰					規						真						頂						綾
子					不風						砂						留子						珠
遅くても早い帰宅も怪しまれおとなしくしてますへそくりしたいから	マニ市未前うと事見	ゆっくりと地球も廻れ丑の年	煩悩の生身を嗤う影法師	冷やかしに鯛焼買うた嬉しい日	枯葉にも離合集散する定め		和歌山市 若 宮 武 雄	人間が好きな日嫌いな日の暦	自問自答しながら女派手を着る	菊作る菊が答えてくれるから	主導権犬に持たせた足の幅	税務署の封筒に罪が無い	和歌山市 垂 井 千寿子	欲がまだあるから欲にだまされる	馬鹿笑いしてる涙を見てしまい	脇役でいいから妻と子の寝顔	逆転をまだ信じてる靴をはく	実力があるから意見まだ言わず	鳥取市 森 田 熊 生	尻馬にうっかり乗った曲り角	恵まれてもったいなくも拒食症	焦点を絞ると裏が見えてくる	貝がらの中は京紅母の青春

貝になる利巧な術は知っている おものである利巧な術は知っている おものである おものである おものである おものである おものである おものである おものである おもので おもので おもので おもので おもので おもので おもので おもので	ウイットあふれしらがの講義 町田市 竹 内	でラックコーヒー男はいつも醒めている後指刺されてる背が寒いさむい後指刺されてる背が寒いさむい後をでこそ賓頭盧と逢う菊と逢うない。 ゆき でしょっとこでなければ敵にされまっせ かまっとこでなければ敵にされまっせ かまっと ひょうしょう かんしょう かんしょう かんしょう かんしょう かんしょう かんしょう かんしょう かんしょう はいかい かんしょう はいかい かんしょう はいかい かんしょう かんしょう はいかい しゅう はいかい かんしょう はいかい かんしょう はいかい かんしょう はいかん しゅう はいかん かんしょう はいかん しゅう はいかん かんしょう はいかん しゅう はいかん かんしょう はいかん しゅう はいかん しゅう はいかん かんしょう はいかん しゅう はい	くなりたし男はんこってまに出るオオカミに 下鉄に出るオオカミに 下鉄に出るオオカミに 下鉄に出るオオカミに できたが本音目醒 をなったか本音目醒
吐	紫	菩	独
来	绮	句	歩
中国の旅 (二句) 手作りのレンガ農家の窓哀し きもの展着物の似合う顔がない をもの展着物の似合う顔がない ない雑煮箸	年毎に舅に似て来て夫老いぬ 高知県 赤東衛に舅に似て来て夫老いぬ 連休で丁度よかった父の風邪 連休で丁度よかった父の風邪	て牛扱い馴れた優しいの凧も上って年新たの爪も上って年新たるとま話のでをもくる	品師の指を離れ をの鐘聞いて目 を がし話に雑木林 の強は荷札
][]	崎	下
は つ	菊	シ	みったった。
		マ 子	

嘘包む大風呂敷を貸してやる 出雲市 坂 垣 夢 酔 間一髪いのち指った傷を見せ	宿題ばあちゃん作句と粘ての宿でドラマの筆を見いま乳離れをした口まででドラマの筆をまるでに主婦すずなりのでなった。	味と言え雪の登山で親泣かせ初め地震のお見舞いおことわ正月娘や孫去んでほっとする賽銭百円だけでは福呉れず	連れになる誰かさんきったいといいて笑うた手をしれらないて笑うた手をしれられるでなだめる胃の酷がながめる胃の酷いといいといいないといいないといいないといいないといいないといいないといいな	地図騎馬民族か血がおど播いてみて貝割れの誠実時がくればすんなり地に見ているとよく飛ぶ竹と
忘られぬ人です逢うてはなりませぬ吼える海腕を拱くほかはなし人前で劣等感に苛まれ	は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、	本不足市民はそんな顔でなし、水不足市民はそんな顔でなし、水不足市民はそんな顔でなし、	質新年おや差出人が金を貰うとゆっくりがとこらえいが、	やかましい妻危険物にして出そう 農休と貼れば余計に人が来る で代の三月守衛までかわり

短悩が邪魔して娘手放せず 岸和田市 古意欲だけ万々歳の老いの新春 人生の余白彩る友がふえ 憧れのノラにもなれず老いてゆく 情れのノラにもなれず老いてゆく すれた日の嘆き コーヒーを重ねて絆深くする	合うも合わぬも背 の身を誘惑された くじで吉兆あてた の手許くるわす皺	別の試練が教えてり角きれいな虹にほどの事をなせしるうちに頭痛	
口野	崎	原	Ш
<i>t</i>	富	鈴	清
	志		
度で	子	江	泉
マニキュアの似合わない手の気ばたらもう少し甘えていたい回復期 魁の梅一輪が遭う寒い風 手づくりの心を貰う暖かさ 母の居間暇が嫌いなお針箱 大阪市 猿にさえ劣る道具をもたぬ時 電話して心に襞の残る夜	安の業負うて流れる雛の割を押すまん中に梅干しご先祖様の知恵まん中に梅干しご先祖様の知恵を持って下車する白い里	炭の穴から過去が燃えあれてを暦見ている気にして表の仏頂面もそれでが香を誘う風あり坂下る	新聞を見るとしゃっくりすぐ止まる 新聞を見るとしゃっくりすぐ止まる 新聞を見るとしゃっくりすぐ止まる
大野武	田 形 美	野 か ず 子	長谷川春

五十九年最後の夕日にビルは燃え	色物を奨めりゃ黒がはやりです	ガラに老人へ席をゆず	羽曳野市 佐 野	捻子をまく私に似てる古時計	青春のレコード回す実家帰り	空っぽの頭の隅に欲が住み	ひらひらと舞って紀南の雪きえる	ゲートボール肩書き消えたから愉快	和歌山県 天 満	タイミングはずしてお茶を渋くする	親切なバスに出逢った老いの脚	戎さんすんで槌音高くなる	手袋をはめて落した乗車券	ポケツ無い作業服に今朝の冷え	大阪市 北	山寺の和尚が好きなモダンジャズ	生意気なナースはちょっとええ女	コップ酒舌鼓打つ元華族	ちゃんちゃんこ着た上役は叱らない	漱石忌我輩たった千円か	浜田市 中 川	元日の血圧日記に書いておく	思わざり主治医がガンになる報せ	せめてもの夢福笹に吊る小判
			白						프						勝						幸			
			水						三千代						美						-			
西宮市	おしゃべりの快感へ酔う女の眼去りし年の手帖当分持ち歩き	カメラ孫に背丈老妻抜	一年の計明日考えようとそに酔い	まだ吞むの紅白見つつ妻が言う	岡山市	だれからも好かれて出世の枠の外	保証印たった一度の悔いを押し	質問へ親が知らないから叱り	切り出せぬ話もじもじもじのもじ	割り切った心が抜け穴一つ持ち	新宮市	正直が過ぎても人を傷つける	神様の処方に誰もさからえず	霜柱いのちの脆さ想うなり	それなりの顔にも売れているミンク	正月が過ぎ新札の軽さかな	西宮市	出勤の夫の背拝む曲り角	羽根のばし亡夫にゆっくり掌を合せ	三ヶ日すんで一人の留守も良い	色々な丑がお目見得年賀状	一族の要となって屠蘇機嫌	姫路市	早十年妻と二人だけの屠蘇
草					井						Ш						杉						松	
XIJ					上						上						浦						浦	
堕					柳五						渓						婦美子						輝	

僕の娘奪った男と酒を酌む	ひな祭り家にも一人いた娘	豊中市田	豆腐を崩すときサディストなのさ	妻でいるその難しさ波の音	信念の牛反芻を崩さない	手の平を見ると易者は眠くなる	剣とコーラン女心に抱き合わせ	鳥取県森	テレビドラマ好きな女房と別に寝る	たよりないけど愛すべき笑顔	嫁入った娘だんだん欲が出て	映画見てではサヨナラという見合い	故郷を語る老婆は瞑想す	豊中市上	アフリカを寝物語にしてならぬ	生と死は斯くあり水面鷺一羽	命ある胸の円みのユリカモメ	坂の街こころ傾くばかりなり	古都の雪悲運の皇子の観世音	近江八幡市 前	哲学の径を歩いた善と悪	死ぬときは死ぬがよろしと良寛さん	輪廻転生それでも僕は僕一代	子供生み続けてゆくかこの家系	落差ある夫婦に差だけの渦が出来
		中						Щ						田						Щ					
		正						盛						登志実						千賀子					
		坊						桜						実						子					
試着室魔法の鏡置いてある	元旦に続く夕日が落ちてゆく	子に甘え夫に甘え風邪の床	独り寝がつくづく怖い震度四	大阪市	平凡が好きな女で掃除ずき	つきつめれば他人ばかりが住む実家	先々のことを子供が言うてくれ	これ以上望むでないぞ初詣	みんないい顔している祝膳	大阪市	遺品皆宝に見えてくる不思議	クレーン車が好きで工事場へ行きたがい	元旦を遺骨と祝う雑煮餅	存在を無視されていた子の悪戯	元旦へおせち持参で娘が帰り	高槻市	パンとぶどう酒生活のたがを締め直す	手土産のわさびがいやに効いてくる	掘ごたつ七つ道具は手の位置に	強くなれやさしくなれと野水仙	托鉢の僧と目が合い目をそらす	西宮市	りんご一つむいて一人をもてあまし	年金がちょっぴりアップかすみ草	三月十日まだ覚えてる六十路
				柳						鈴		ŋ				竹						藤			
				原						木						内						村			
				静						節						花代						宏			

子

香

子

空手唾 思考 冬の 仲 牛仔点 ラ 脱 减 女 縫 立私本 I 笑 ٤ 線 量 間 をとば 棚 0 読 小 0 4 10 負えぬ 八い今年 を企 を ゼ は みに好 説 を直 瞳 0) 0) 城 E 0 意識を燃やしてくれるうどんすき 0 D 花言 をい 程よく保ってい 夢 よろこび春 不安にアングル変えてみる D げをみん 高 Ħ ン かい to がはでか 老 6待 次 L 0 1 んだのは 47 と書 色本 は俺 て自 て本屋 の妻に 3 葉を口 とも容易くあけわたす 話 眼 白を晴 度あることだと泣 と牡 をサンルームのア い乳 な下 0 かれ 1 0 画 字の 像修 度はすす か 角 4 にせぬことだ おんなか の彩を着る できて 着とし が無 座 6 房 歳 るアン 、る夫婦 太さ の恩返 て着る晴着 0 整 帰るまで は イデ 60 す 翔 ケ 17 る 走 寝屋川 才 L 1 n 13 吹 唐 唐 ロギ た D 津市 取 H 津 エ 市 市 県 市 中 稲 西 久 部 111 保 葉 原 景 久 几 鱦 IF. 子. 敏 郎 葉 空振 1 玉 降 親 柏手を打 真 転告 凪 神 男 親 抜 桜 鈍 起 込き差 4 る を読 職 と子 3 面 白 0 官 0 0 板をチャ ナメ 夢 目さが n 子 が出 H に合わして式の日を決 0 雪 てよし 0 チ と知っ なっ 角 子 0 連 男 箸に小さな 4 0 う L む 柩はゆるりゆるり去に の夢春 休仏 に 海も女も恐 が利 坂 0 + ントライ 0 スキンシッ 異 てネクタ 和 妻と子ぶ に軍 間真 一つ取 ンスに 寝 名をとっ て曽孫に 尚 包 ても かぬ ス 滅 43 てよし は 声 を逃 靴 面 は 1 0 不覚 目な顔 脱皮す 刑事 さま 1 雪 柄 15 な 0 ル -を締 プとなる洗 会える旅 6 音もなく 0 炬 别 0 が 13 た 14 落ち の名 す 弘 靴 n 下り 深 燵 0 を履 でい 保 暖 持 るくら 闖 6 8 こぼれ 入者 か ち かい 直 証 和 # す ED 唐 唐 歌 唐 n 車 津 津 Ш 津 市 市 市 市 が 3 堀 H 浜 浜 本 本 端 虹 美 汀 男

とんとんと運ぶ話に嘘がある 北風をもう恐れない松の枝 出雲市 地風をもう恐れない松の枝 出雲市	が居に振り るより引 値	でま先が背伸びの無理を知っている 嘘のない笑顔へ働く慾が湧く をせな女で紅がよく似合う	大婦 くり出雲	先客は婦人ばかりの露天風呂ケーキ食べる妻から謀叛窺えずひと幕はあなたのために空けて置く
石	吉	ЛІ Р	園 園	
倉	岡	村	兰 山	_
芙 佐 子	2	映	き 三 で 子	
看も褪せる色も褪せゆく逆えぬ おやとりで孫と夢中になるも新春あやとりで孫と夢中になるも新春 あやとりで孫と夢中になるも新春 あやとりで孫と夢中になるも新春	ーなど問わぬ夫婦の箸の音 ニーターそんなに威張ることはないまたシナリオどおりこなす気で 島根県 松	本当の事が聞きたい影法師 島根県 松 大意地すこしゆるめてからは日々達者 意地すこしゆるめてからは日々達者 意地すこしゆるめてからは日々達者	(こ) 唇点のは、(こ) 唇点の型に父母おわす(た) と思い違いの白い指が白い椿の花盗む	かぬ病と知る隣 出雲市 落
Щ	本	本	森	合
民	文	はる	孝	正
子	子	4	華	江

飲む時は敵にはあらず社の同期会いたくて五百羅漢の前に立ち来客の噂話の台所来をのではの台所を表して、	会生とや前向き少し加減して 群衆について行けないピエロです 通勤の自転車清めて〆飾り である。 である。 である。 である。 である。 である。 である。 である。	県	る場	いくさ場のアルバム私の青春がある年金で小さな予算暮れの妻 年金で小さな予算暮れの妻 島根県 木	人の手のとどかぬとこへ木守柿
呂	尾	野	本	村	
鵜	春	侑	輝	は	
汀	江	. IE	水	じめ	
に ・ラックの牛の目に合う今日のうつ ・ラックの牛の目に合う今日のうつ 無理強いの枠ははずそう子の育ち 無理をする穴は大きくなるばかり	からのことは知らずに風ように亡父のコートが掛なあしたへ夜の鏡拭く	山に挑む若者の訃に胸いたけて勝つ熟年主婦に老い無家の訃あちこち届く松の内	いの渦中の子供もう和なり祈願したのは出しでざあます夫人	ボーナスの使途へへそくり足してやり ひと言が多い姑の隙間風 ひと言が多い姑の隙間風	西宮市 津
原	藤	Щ	Ш	П	山
葉	春	美	<u>+</u>	Ų,	冬
香	子	美 智 子	千 世 子	わる	子

筆洗う心静かに除夜の鐘 岸和田市 芳 地 狸 村館食の暮しに釘える人想う	引な客が見抜いている弱気やかな暮しを願う雑煮餅しい日記初心に返るペン	マイカーからバイク余生は自転車で焼薯屋の笛に痩せたい女の眼嫌いだが身寄せる猫は蹴られない乗いだが身寄せる猫は蹴られない	考えて牛は一歩をふみしめる横地雅風すの禱り演歌がひとをひきつける**子市 政 岡 日枝子	路市 丁坪 サワ	
ありがたい事に孫からお年玉元旦の床で白菊冴えかえり	り酒春には春のいくさありの中の一人になって陽を浴びる人の睫毛に虹のかかるとき	松飾り外せば背骨ゆるむ音鳥取県 新 家 まさる森の奥別居の嫁のうわさ聞く 鳥取県 新 家 まさる 身嗜みちょっとお洒落も添えてみる	昭和史も波乱激動六十年 鳥取県 金 川 満 春 出り角ここのおでん屋にある人気 鳥取県 金 川 満 春 本 第築の誤算雪崩が軒を折り	件簿の裏のペーソス忘れらたよたと俺に似ている冬のランプを楯やカップが嘲笑	れ着には母の願いが 仙を生けて人恋うひ

老いさール	七変化男の職場に女居る ユニホーム着れば男もその気なり ユニホーム着れば男もその気なり 岡山県 行 吉 照 路	病息災ということありと娘をるのをせかして後で気にかかもしてやらぬに窓へ雀来る	か认りを	義理の子へ歩を合わせ逢う為に途中下車愚痴言わぬ妻重荷岡山県 直 原 七面山	
物忘れして歳という隠れみの。 で口市 野 呂 右 近瀬しいが職業欄は空白で 守口市 野 呂 右 近	四季ともに富士は遠望美しい見合では手ごろの乳房だが偽物 見合では手ごろの乳房だが偽物 親子の碁文句言わぬと打ち始め 唐津市 木 塚 素 石	すっています。	おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお	なと儲けする夢捨てぬ四帖半 なと儲けする夢捨てぬ四帖半 を読みの伝言聞いてる留守番電話 は 当 は しましき 指輪など無縁の指の深いした	老い執着生きて独り舞い

一本だけ残してつららおとす朝 一本だけ残してつららおとす朝 日本 に 名 亭孫ら合格されど年金額が減り 羽咋市 三 宅 ろ 亭	表現の自由が過ぎて子は溺れこうなれば寝た切り介護ロボットに停年になって今度は医者通いゆっくりで時には走ろう牛の年	でしゃばりが母校の寄付を持って来る手袋をはめた握手が気に入らず 目前の定退へ迷う青写真	の薪の句見たり里けのあさましさ知い。	藤通	倉吉市 野 中 御 前
洗濯機今日の気分でよく廻り 大温機今日の気分でよく廻り 子定表ぎっしり埋めて十二月 子定表ぎっしり埋めて十二月 アチ袋選るたのしさもあり十二月	髪型を変えて言いたい事がある善人の柏手が揃う初詣を決めてる七回忌	新風呂は椿眺めて湯にひたる 寒波来て雪国しのぶかぶら寿司 寒波来で雪国しのぶかぶら寿司	葉星	瀬市大山と	西条市 片 上 明 水

碧空に双手を挙げた冬木立明日散るも手加減しない花の色節税と言う竹槍を使うだけ	1		男意地煎じつめれば他愛無し	冗談を解せぬ孤独の背が寒し	三ヶ日家風の折目受け継いで	大阪市 北 山 悟	退院のゴールを前に自重する	絶対安静磔の刑今受ける	あつかまし余命幾何聞いて見る	入院に孫子が揃う十五人	病中記	大阪市 坂 本 仙吉	三三九度これで子離れ親離れ	亡母の齢になってやっぱり母の癖	戦友に似た羅漢あり香供う	ロボットに保険ができて人なみに	大阪市 吐 田 公	聞きたくもないの昔のいい話	初風呂へああこの先は神任せ	足元の土をならして春の色	チビ筆がなじんでなかなか捨て切れぬ	大阪府 坂 口 公
バレンタイン二十一面相と勝負する行く歳も来る年さえもうとましい三日目はラジオ体操寝間できき		母親を無茶に使うな俺の嫁	十円が身のほど知らぬ神頼み	吾もまた撞きそこないの鐘の音	かっさいがとんと嫌いな牛の声	郎 大阪市	牛ならば牛の歩みを忘れまい	しまい風呂私が私に戻る時	春はよしお国訛りの旅日記	紅一つつければ女の顔ができ	大阪市	郎 それなりに故事が生きてる京の社寺	比良の峰車窓にかかる冬の虹	七かまど燃え古刹の冬の景揃う	落葉時雨に落葉の主張聞いている	大阪市	一 肩書が抜けた手製の賀状来る	年頭に当りさしたる気負いなし	公僕に落ちこぼれなど許されぬ	功罪は半ば孫つきの温泉巡り	大阪市	子 年寄りが居て柿の皮吊ってある
	Щ					Щ					鍛					町					板	
	片					根					原					田					東	
	紀					いつ					千					達					倫	
	雄					つを					里					子					子	

お 若い日を言うばあちゃ 冷汗を拭 まつすぐ 前 かとい + F べくわ くろ うお粗末な笑顔です 明 き土 たくしを持て余 H 0 道 塊 が昏れて行く か んへくしゃ な 平 和 みする

金 井

新し

V

手に

騙

される販売機

音痴を歌う気にさせ

3

外は 雀二

春 羽

ふたりでうまい

コ

1

・ヒ飲

む

Vi

ね雑草

春

を告げ

7

Vi

る

小さな庭を春にする

もう春 H

なだ肌着

一枚脱ぎました

モー 力

ニングサー

ビス憩いとする女

タカ

ナ

語

売

2

てる本

屋

がわから

力 楽しさが

D

0

ないのをさがしている平和

場

没

食 子

4

出たくて春を模索す

文 秋

H

本

語

Ŧ. 翁

水

粉

大根をとろとろ

母

味

に

煮る

アフリカにすまぬ

ビだけ観

ていて炬燵

肩

が 械買

凝

が痩 0)

せる機が

7

笑うとき笑わぬ人で許せない

一男ら南アフリカより五年ぶり帰国 が喋れる孫へホッとする

黒

JII

紫

香

積 遠木 山 木まだ続ける気らし胸 0 n 雪 足 0 に郷 小 0 速さ 径 愁誘 はずむ 兜ぬぐ b n 万 を張 步

r)

冬と春もつれながらに二月過ぎ

Ŧī.

欲

にまた老人ボケ

0

楯になり

掘りこたつ書

斎は れべ

春を呼

3:

睡 づ

魔 かい n

年

十寄りは一

不慣

.7

ドは寝

6

髪型をどう変えたとて損

な顔

本 H

惠 朗

-30 -

月 原

宵

明

>><\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	548548545585485485485	FRUSFRUSFRUSFRUSFRUSFRUSFRUSFRUSFRUSFRUS	ลงสงสงสงสงสงสงสงส
まだ抜かぬ抜いたら呆ける俺の灰汁 点切ってひたすら登って来た峠 風切ってひたすら登って来た峠 風切ってひたすら登って来た峠	好感と言えど男女は恋となる すいけど貯金しに出る楽しさよ 薄いけど貯金しに出る楽しさよ を年や箸より重い物はなし	民謡は貧乏の歌哀しけれ 「でくきはシベリアからの寒気団 では、できばらが、リアからの寒気団 では、カリアからの寒気団 では、カリアからの寒気団	正 一 で で で で で の で に もない小さな見栄に包まれる で に もない小さな見栄に包まれる で に もない小さな見栄に包まれる で に もない小さな見栄に包まれる で に もない小さな見栄に包まれる で に もない小さな見栄に包まれる
村	· 矢	藤	本
太茂	+	. 甲	水
津	良	吉	客
男だけ遺してどこで声を張る ・ 長女SI歳急死 (四句) ・ 長女SI歳急死 (四句) ・ 大田本魔界の手にふれて ・ 動いた五体魔界の手にふれて ・ 動いた五体魔界の手にふれて ・ 本世の峠で遭ったつむじ風	回路はありませとだけは物足らみたい雪を踏むが足られたい雪を踏む	世十日目決心をせぬままに の順です上座にすわらされ の順です上座にすわらされ の順でがし風邪などひいと	幸運でない好運を拾う気よ難に似た孫の移り気腹を立て里程標素通りをする旅をして里程標素通りをする旅をして
	尼	*	山 長
	緑	沢	内 野
	之	暁	静 文
	助	明	水庫

川柳太平記 Ш 柳 の 前 (82) 群像 H 雀 東 郎 野 大八八

講演している。以下はその抄録。 『蒼々亭と俳諧亭』と題し約一時間にわたり『蒼々亭と俳諧亭』と題し約一時間にわたりで品川陣居が、前田雀郎、川上三太郎の前で昭和10年4月11日開かれた「川柳研究の夕」

を即氏のお宅には阪井久良伎先生筆の。俳 董亭、の扁額がある。(略)この間も花恋坊 の出版記念会の講演で、雀郎氏はその中でし がしば、芭蕉様、と言われていた。はじめは が異の感を抱いていたが、次第に成程 "芭蕉 が異の感を抱いていたが、次第に成程 "芭蕉 様、とはもっともだと思った。 一春もや・にがきもの置く舌の上 雀 郎 このにがきものとは、例えばふきのとうの ほろにがさの快さを言っておられる。雀郎氏 ほろにがさの快さを言っておられる。

> びみである。例えば柳俳一如の意味を のこちら側に立つことを願った」

御両人の面目躍如たるものがある。
「君は川柳とは何んであるかを研究しろ。「君は川柳とは如何にすべきかを考えるから」と川柳を昨日と今日に分担して、二人で今日と川柳を昨日と今日に分担して、二人で今日と川柳を実践しようと話し合ったそうだが、

錬達の士でないと小主観に囚われてその表現 あの博学だった芥川竜之介が好んで、やま と振りの口ずさみをモノしたように、元来理 と振りの口ずさみをモノしたように、元来理 と振りの口ずさみをモノしたように、元来理 と振りの口がさみをモノしたように、元来理 と振りの口がさみをモノしたように、元来理 と振りの口がさみをモノしたように、元来理 と振りの口がさみをモノしたように、元来理 と振りの口がさみをモノしたように、元来理

が内容に融化していないのを常とする。

一おもしろや一枚脱げば春の風 雀 郎 一おもしろや一枚脱げば春の風 雀 郎 な 見もあらじ、ただ臨終の夕までの修業と知る 見もあらじ、ただ臨終の夕までの修業と知るでし、

者となり、文芸欄に「古俳諧について」を連大正7年久良伎門に転じ二年後、都新聞選

永遠に拓けていくのだと、花恋坊の記念句会

みと身に引き添うている。そこに川柳の道が

雀郎氏にとっては嘆きも、

欲びも共にしみじ

ければ生活を味わうと申したらよろしかろう

雀郎氏は生活を楽しむ―楽しむといって悪

昭和11年三月「せんりゅう」を創刊。翌年短詩型関係者から注目と期待をあつめた。載し、文筆活動を開始。選句も都ぶりと称し

「川柳探求」(有光書房)を発刊。同34年山形で調修は昭和29年「せんりゅう」誌を復活、戦後は昭和29年「せんりゅう」誌を復活、戦後は昭和29年「せんりゅう」誌を復活、下の地様は昭和29年「せんりゅう」
「川柳探求」(有光書房)を発刊。同34年山形では、100円の

の寺に眠る。俳諧亭源阿川柳居士。 ―お二人の笑顔に笑顔おのずから 雀 郎

他ならぬ。

言わずと知れた俳諧の大地を志向したものに五月の天地諷詠のみのものではない。それはわれればこの句を筆にしたが、これは単なる

県豊山に皇太子御成婚記念の第二句碑

後からの書信の一つに雀郎観がある。 世がいるところから笛我と風交をあたためたが知するところから笛我と風交をあたためたが 知するところから笛我と風交をあたためたが はからの書信の一つに雀郎観がある。

R誌です。雀郎の都ぶりは右の通りの俳諧の句を実践するのが川柳にありとするのが雀郎の主張で「せんりゅう」誌はいわばそのP「川柳と俳諧の命脈は、要するに俳諧の平

につないで考えたのは、私が早いかと思って

「わが社(丹若会)の主張は、

川柳を俳

はもはや文学に価せぬはずだ」
なべきものを忘れて、単に手段としてある言語が知新のこころから成り立っている。訴え

このような文面のほか、笛我はよく雀郎語このような文面のほか、笛我はよく雀郎語さかんに恵贈してくれた。笛我も今は鬼籍に入って世にないが、彼からの書信から雀郎その人を得るところは多い。それらと文献から一五月かなものみな天を志す 雀 郎 これは雀郎の代表的持句の一つで、よく乞これは雀郎の代表的持句の一つで、よく乞これは雀郎の代表的持句の一つで、よく乞

も雀郎の愛執おくあたわざる俳諧の想いを一六月となるや木綿の肌ざわり 雀 郎

「国文学解釈と鑑賞」(昭和33年特集・川柳「国文学解釈と鑑賞」(昭和33年特集・川柳をの批判。は全国有力誌十七社の代表の主張を列記したものだが、この中で筆者が最も注を列記したものだが、この中で筆者が最も注

ち川卯こついてよ、川卯が卯多留の乍品をの主張―というより実践であります。 でまり作ころざすところもそこにあります。 つまり俳 おります。 従って私のいまの川柳においてこおります。 従って私のいまの川柳においてこ

古川柳については、川柳が柳多留の作品を 古川柳については、川柳が柳多留の作品を の前句附を出て新しい彼の俳諧を生みました にちがいありません。そこから彼は収月点 たにちがいありません。そこから彼は収月点 たにちがいありません。そこから彼は収月点 たんちがいありません。そこから彼は収月点 か前句附を出て新しい彼の俳諧を生みました しれもそうありたいと願っています。

柳を忘れて川柳の本質をみきわめることにあが強すぎる。我々の今の急務は、いわゆる川が強すぎる。我々の今の急務は、いわゆる川

─帰去来の文を柳にとぢん哉 雀 郎 その信念ですべてを燃焼した作家であった。 が「ただ臨終の夕までの修業」をモットーに 要するに俳諧亭雀郎は、鬼貫の言ではない

★次回は「前田伍健」

- 33 -

誹 風 柳多留 廿六篇研究(+六十)

石 田 晋 南 得 小 野 真

Œ 範 石 田 成

木 鈴 木

黄

佳

大

屋

六 郎 光 甫

多 H

故 尚 田

313 敷ぞめハほうり込れたよふに見へ

うことで、 チにもなるという。三蒲団は大きなものとい 石田晋=積夜具の敷初、その高さは四五セン

仕立屋を一軒埋める三蒲団

傍二・8

であり、 ほふり込れたやうに寝る三ッふとん

敷そめの夜具天井へもふちっと

南=賛。新しい三ッ布団によろり身を沈め、 抛り込まれたようであるという意である。 である。この句も同想で、まるで蒲団部屋に

> 気もよわよわと鼻下長の寄贈者の貌 三ッぶとんほうりこまれやうに寝る

態をいったもの。 の説のとおり、布団にふうわり身を沈めた状 石田成=賛。 ほうり込まれたようは、南さん 四八 . 20

多田一赞

寝心がようありんすといふが礼

其高さ三尺余あるを敷

12 23

髭を撫てる丸山の三会目

石田晋―丸山は長崎の遊里。 吉原の三会目な

五四 4

1

岡田―賛

そこら中つめくされる三会目

b

どなら、髭を撫でられることにもなろう。 ともなるが、外国人、髭のあるオランダ人な 丸山へはまって髭で蠅を追ひ 42

丸山へ義理がわるひとひげをそり

拾八 : 20

唐

人も同じく髭が濃いとされています。 南 = 賛。髭を撫でるのは西洋人に限らず、

本多=賛だが、髭から客は唐人。 八木―①遊女がきげんを取る。②客が得意な 丸山でするほうずりハ音が有り 両方にとれる。どちらかといえば①。

五八 39

ていた。

■八木説の①でしょう。

多田―どっちとも

山へは行けず、遊女の方から出島の蘭館に通 岡田=俗に「毛唐」という。なお外国人は丸

315 珠数袋娵のけいはくはじめ也

との意。嫁が姑とうまくやっていこうとして 石田晋=「けいはく」はおせじや追従するこ たというのである。 まず手始めに姑の参詣用の珠数袋を作って見

多田 一 賛

岡田―同

316 鵜が行と鷹が又来る間のわるさ

次々と邪魔者があらわれて、機会が摑めない 石田晋一どうも判然としない 多田―「逢引」と断定して、どこかで逢って もどかしい状態が想像されますが……。 が「鵜の目」が去ると「鷹の目」が現われる。 います。時、場所、人物の限定は出来ません **―診「鵜の目鷹の目」を踏まえた句かと思**

なかった」と不運をかこっているのだと取っ 具合がわるいし「こんなに人がいる所と思わ

な琴の音の意。礎賛

いたら次々に「鵜の目鷹の目」で見られて、

デートがうまく運ばないのでしょう。 岡田―多田説も一解。とにかく邪魔が入って

317 遊芸を孔明一度用に立テ

散させたという意。 櫓の上で琴を弾じて退散させた故事。 すなわち、孔明が琴の計略をもって、 石田晋―諸葛亮孔明、司馬懿の十五万の兵を 先生ハやぐらで琴を弾ている 孔明が指三本ハ百万騎 敵を退 宝九・仁 四三:26

岡田―同 多田一賛

318 孔明ハ松も通ハぬ琴を弾き

を通さないとの意ではないでしょうか。 南一賛。 石田晋―孔明の故事は前出。「松も通ハぬ琴」 の琴に入る。雅趣など全く感じられない不穏 松風の吹き通えば、琴の音色殊の外にすぐれ **本多**―「松風夜の琴に入る」といい、夜峯の は、計略の琴の音だから趣きのない琴の音と て聞えると言う。「松も通ハぬ」は、松風夜 いう意味ではないか 松風に吹ちらされる司馬が勢 「松も通はぬ」の通はぬは仲達の軍 五六・7

> ない。 多田─本多氏説賛。風流心から弾いたのでは

岡田―同

319 鹿に鞍置ても指のさし人なし

アラザレバ、馬ニ非ズトハ見ケレ共、 7) と同じく、ここでは趙高。太平記では次 威勢ニ恐テ馬也ト申サスハ無リケリ。 ク召集テ、鹿・馬ノ間ヲ問給フ。人皆盲者ニ のように記す。「二世則百司千官公卿大臣悉 石田晋

一「鹿に鞍趙高および春日さま」

(三五・ 鹿をどうくくくとひくばからしさ 趙高ガ

秦の代に鹿のいななくとんだ事 10

装させても誰もあざけりそしる者はいないの すなわち、趙高の威勢におそれて、鹿に馬 四四 · 3

る馬に鞍を置くので、いわば、鹿に鞍を置け 小野―鹿に馬装させるのではなく、鹿と称す などといっても誰もとがめぬとの事ではない でしょうか。

多田—同右。 「鹿に鞍」のままでよいと考えます。 大屋―礎稿どおり、

鹿を献じたのですから、

岡田

上方前句付集の雄編

『明石人丸大明神三万句集』

(六)

311 達 義 雄

(5) 瓦竹堂李坡点の前句

だろうか。 的な文句として上方にもあったのではない えられている。だが、この様なことは俚諺 房を湯に遣り亭王酒で待ち」というのが伝 江戸庶民の安楽境を句としたものに、「女

に附けられた句に、 それは、「雨のほろくくく」という前句

り亭王酒で待ち」のようなことが前提とな とあり、この句の裏には「女房を湯に遣 ○湯上りを待ちし旦那の酒きげん(下二○

> り、「墨絵に遊ぶ」という趣向や表現に妙味 もので、雑俳の前句附には珍らしい句であ がら色々な空想に耽っていることを詠んだ が認められる。 って、眼の遣り場もなく、袖の墨絵を見な っているからである。 というのがあり、雨天の時、駕の中にあ 同じ前句に附けられた面白い句に、 ○我袖の墨絵に遊ぶ竹輿の内 (下一三)

この様に言簡にして面白い語としては前

のような場合に用いられた「直訴」なども に「腹を立残す」というのがあったが、次

(前句)

その類であろう。

〔前句〕 くる (\とたばこのけぶり

俳諧高点附句以上のものが見られる。 ず前句を一括して掲げ、それ等に附けられ 鑑賞を妨げるようにも感じられるので、先 た短句を別に前句の頭文字で示してみると 表現法が必要であった。李坡点の短句には 尤も、これは短句であるから特に簡潔な 一々前句と一緒に掲げることは、反って ・火鉢へ書いて見せる直訴(下一三)

クル くるく、とかだこのけぶりくるく、と カー ばらく、としぐればらく、それはその さいく、としぐればらく、それはその ならく、としぐればらく、それはその ならく、とただこのけぶりくるく、と

(附句)

キラ

いつちよい子を留める寺子屋(下一〇)

是 借り着の袖に覚えなき文 (上一三) キラ 灰吹ばかり鳴って密談 (下一六) イソ 合点した顔鏡ふたする (下一九) イソ 合点した顔鏡ふたする (下一九) 夫 逃げ込む所有って我意いふ(下一三) ハラ 舟に泣く子にによっと浮く海女(下 セ) クル 禿を寝さす親の命日 (下二一) これ等によって、鑑賞の場合には、前句 これ等によって、鑑賞の場合には、前句

〔前句〕天下大平へ、鑑賞の場合には、前これ等によって、鑑賞の場合には、前について見るに、

右の最後の句は、意味の上から附句とは談合が済んでさらりと障下明け(下 九)「前句」 はんにほにほに / ト 前ほど浮世の義理に櫛を入れ(下 九)がけがねも義理にかけたる柴の庵(上三)かけがねも義理にかけたる柴の庵(上三)

ていたかどうかは疑問である。 もかし、前句の万事落着したような感じ もかし、前句の万事落着したような感じ を受け取って、附句として具象化したと、 を受け取って、この様なことが行なわれ がいたかどうかは疑問である。

⑥ 性癖の観察

自然にせよ人事にせよ、元来の在りのまするとかいうものは考えられない。

を催すこともある。 対比され、譬えられることによって可笑感ものであろう。中には、その物が他の物に

○壁ぬるやうに座頭うろたへ (上を催すこともある。

○幕しぼるやうに娘の上三三里(下

「三里」は三里の灸で、膝頭の下で外側の少しくぼんだ所に灸を据えることであるが、上三里はそのやや上部に灸を据えるため、娘は湯文字を「幕を絞るように」たくめ、娘は湯文字を「幕を絞るよう。これらは本人にしては大真面目なのであるう。これらは本人にしては大真面目なのであるが、第三者から見ると、滑稽と感じられるのであるであるが、第三々に担てるのは美しさを欲する強い願望の現われであるが、ベカコは珍妙な顔の極とも言われよう。然るに厚化粧してベカコをやめて、もとの厚化粧してベカコをやめて、もとの厚化粧に復したのベカコをやめて、もとの厚化粧に復したのベカコをやめて、もとの厚化粧に復したのであるが、そのであるが、そのであるとは、その矛盾も甚だしい。それでもならばまだしもであろうが、そのベカコのならばまだしもであろうが、そのベカコのならばまだしまである。

○べかこした跡のついたる厚化粧

止まらないことになる。

跡が厚化粧にくっきり残っていたとなると

依然としてベカコを想起させられて笑いが

○送られて尻から這入るくぐりの戸これは実に念の入った可笑句である。

上四四

観的に之を眺めた場合には滑稽な動作であ た頃には珍らしくない仕方であったが、客 り戸を尻から這入るのは、くぐり戸のあっ 送ってくれた人に対する顧慮から、くぐ

箔を一正くへつまむように取って、ぬすく うに縄すだれを分けた点であり、 的なものを感じるのは、(1)は猿が人間のよ であろう。だが、これ等から何となく可笑 右の三句は現実をありのまま詠んだだけ (3)は蝶の

(3)つまんでは壁へぬすくる蝶の箔(下一四

っている点であろう。 (2)は将棋中の一つの談笑的の場面を傍観

(2)マアさうは成りますまいと飛車を逃げ (1)背中から猿のわけたる縄すだれ(上

六

Ŀ t

> 読むのであろう。これには多少アイロニカ 的に写した処が可笑的なのである。 ようなものではないであろう。 ルな点が見られるにしても滑稽などという 入墨の文字で、「入痣」は「いれぼくろ」と ○文字に皺よりし病後の入痣 右の「文字」というのは二の腕に入れた (下三

つづく

翠柳吟社

創立10周年記念川柳大会

岐阜県郡上郡八幡町新町 昭和60年4月28日(日) 10時開場

日

岐阜乗合バス新岐阜発→八幡 郡上農協八幡支店3階ホール

下車歩いて2分

(各題2句) 〆切正午

浜口

張

素通り 中江

初枝選 薫風選

4月27日出

大阪難波9・0→関ヶ原古戦場

会田規世児選 剛史選

丹羽 田中 麦舟選

○ 日程

大会参加旅行

頼

曽根

幸広選

西尾 名波 栞選

特別課題

事前投句 ◎事前投句〆切=3月末日 「スタート」 惜春選

投句先 1 50 42 岐阜県郡上郡八幡町常盤町 ◎投句のみ可。千五百円同封(切手可)

05756 (5) 3692 野 П 互

三千円(申込みは事前投句に併記下さい) 千五百円(軽食呈

主 催 캦 柳 吟 社

〈窓口〉

見学中食13・30→郡上八幡着16 ・00ホテル扇屋泊

4月28日(日) 会場10・30→会場出発16・00→ 扇屋発8・30→城跡見学→大会

4月29日祝 白川郷発11・00→御母衣ダム 白川郷着18・30ふじや旅館泊 (中食)→大阪難波19·00

- 会費 (連絡先) 郡上八幡ホテル扇屋 四万円(参加人数で安くなります)

05756(7)1661

薫風・紫香・岳人 白川郷平瀬温泉ふじや旅館 05769(5)2316

III 柳 塔 社

|同人吟| ―前月号から― 句

山下る木馬夫婦の息が合い

れています。 珍らしい素材を生かして夫婦の在り方を示さ 合わなければ木馬は暴走し大怪我をします。 ウマ又はキンマ)をすべらせる夫婦。呼吸が 丸太を並べた木馬路を木材を運ぶ木馬(キ 代仕男

役に立つ顔ではないが従いてゆき

うな脇役の演技が光ります。 どういたしまして。頼もしいいぶし銀のよ

吹き出しもせずに教訓垂れている

る柄かいな。と作者の呆れ顔。 ことところっとちゃうやんか。そんなん言え よう言うわほんま。 してることと言うてる。

心ひらくと笑って見える鬼の面

念彼観音力火坑変成池。 自我にとらわれな

> いことこそ立派な生き方 可も不可もない回転の軸になる

も澄んで美しく廻ります。 一方に偏らぬまっすぐな心棒ですから独楽

うまが合うと勝手に決めているのかも

句にあらわれています。 まわりの人へのこまやかな心くばりがこの

報われぬ牛のしっぽの役でよし

寿美子

がなければ牛ではありません。 の半身をガード出来るのだそうです。 いつもお世話様でございます。しっぽは牛 しっぽ 好

したりしない足。撫でるついでに一寸つねっ よく考えて用心深く駆け出したりジャンプ 一番うしろを歩くかしこい足を撫で

一枚の紙の軽さよ重たさよ

てみられては?

人を操るな。人よ紙に操られるな。 万札・卒業証書・辞令・株券・新聞。 П いわる

道行きの手を引く幸よ夫がいる

しっかり読みましょう。 て離婚してやろうと考えている人はこの一句 んだものいいなあ!退職金の半分をぶん取っ いつでも遠慮なく手をとり合っていられる

少しバカになると見つかる妥協点

安平次 弘

道

立場になって考えられる方です。

バカになれるのは人生の達人です。相手の

17 ミもとり上げるようですね。 ボケ防ぐ本買ったまま日々多忙 大多数の良識よりPRの派手な方をマスコ 一握りの市民市民の会つくる

そ若さを保つ秘訣です。 この方にこの本は不必要でした。

御多忙こ 柳五郎

た!無視された! いたのに誰もあげようかと言ってくれなかっ 私はいらないからねと言ってやるつもりで 意地はったつもり誰にも気づかれず

宗旨変えましたと気になる事をいう

き教に変られてはたいへん。油断できない! ライバルと出会い鰯を買いそこね かたぶつ教だと思ってつき合ったのにうわ

平田実

男

素うどんを底まで吸って達者なり

馬

○印はて何の日ぞ十二月 音痴でありません編曲しています 鶴

丸

今にして姑の塩壺深かりし 泥水に深夜の月が美しい 野 原

鵜

iT

独

仙

城 年 代

独 大阪 市 清 水 康 惠

さだか

では てみ

Vi

あ

0 0)

時見たは愛

が中

せん

オ

1)

オンを

井 寺

市

赤

木

和

子

在

なる神に

翼

を借

りに

行く

電ふ妻女北

た

L 指

聞

いた坂 冷

の上

0

0)

先が

たそう

だ夫婦

るの

里 声 絵

0

士.

一に残っ かに

ていたぬ

くみ

卓

笑わ

n

いる家計簿

ょ

和

歌

Ш

市

後

藤

IF. 子

走

3

下いわ

情レ昨春

イエロ

1

今日の

H

今日

逆

転

などは

な 触

10 n

鏡 7

は

1

ル

ク風

と光

かい

WD

<

報 E

かい >

n

てるらし

1

の私を主張する

3

春 漏

たし

かめ

る福

寿

和

歌

Ш

福

井

桂

否

玉 町 ち

の情

酔

える放浪記

素うどん

x

ニュ

かい

舖 市

さんがそっ ポポ

と差出す妻楊子

の綿毛に 0

乗っ 1

た春 消えて

0

使者 新店

中

涙を捨てましょう

命

1 0)

生きぬと愚痴

が胃に溜る

大切な人をバッダ幻想の世界にある

グに 持 ち

尼崎

市

中

晴

子

そぶ月の 步夜 1

だかまり解け 早く II かなか 噂がは 0 しる裏通 て包丁軽くなる た 母 0) ひとり 1) i

いさに会 を妻 子にたくす薬売 0 て話 爪 0 種 がな

尼崎

πi

福

 \mathbb{H}

礼

子

久

忙中 うら 東 開 子も良い子も母 がまだ果せない冬苺 ぎりを許さぬ 有 り花 など活 が伸びてくる けて 0 膝が好る 11 3

Ш

黒

選

雑踏に電池の切れた顔がいる	長岡京市 木 本 如	気くばりが小さく手帳に書いてある	辛抱強い牛が哀しい顔をする	飽食のくらしに書棚貧しくて	母親を下敷きにして子が育つ	善人の名が献灯に映えている	西宮市 紀 市 郁	小さいつづら選んで悔いのない五十路	ヘッドホーンはずすとこわい耳の穴	まだ若い気でいる妻のレオタード	灰皿へ本音ポロリと置いて行き	無人駅ホームに小さい雪だるま	唐津市 米 倉 彩	牛づれの嫁でつつがない暮し	単身赴任熱湯注げば出来る食	右向いたままで人生味気ない	或る日ふと後ろの正面見えてくる	串の柿茶うけに和む三ヶ日	熊本県 大 川 幸	あととりが居ます農家の干大根	故里の空へキリンは首伸ばす	真剣に余白を埋める色選ぶ	家具売り場から出て冷たい風にあう	部屋の灯をみんな灯してみる独り	ガスアープ E 作
	洲						栄						女						子						子
ウインクで素直なお茶が運ばれる	掃除機の掃除が出来た定休日	両方の意見を聞いて旗下ろす	寝屋川市 平 松 かすみ	流し目へハッと身を引く葱坊主	蹴散らせば己へ跳ねる石もあり	蝶番きしみピノキオ老いを知る	じゅげむじゅげむと言うてるうちに暮れなずむ	合鍵へ心のドアが他愛ない	名古屋市 藤 井 高 子	ちぐはぐなおしゃれ見つめるシャンデリア	万歩計これも三日で放っとかれ	稚気いとしおとこ一匹飼いごろし	初詣小はぜの固い足袋で出る	嫁ぐ娘のため大きめの破魔矢撰る	富山市 舟 渡 杏 花	輪の中をぬける魔力を貯える	やみくもに翔んで見せたい千羽鶴	母親像だんだん薄れ浅き春	日暮れ坂馳けているのは私だけ	行間に満たせぬ想い土の唄	八尾市 高 杉 千 歩	父の独楽無駄に廻って十二月	駅前の一筋街の夕時雨	裏切った仲間に逢うた釜ヶ崎	座り直して茶室に雪の鷹ヶ峰

関数を孫と拾って海凪ぎる 関数を孫と拾って海凪ぎる 関数を孫と拾って海凪ぎる 関数を孫と拾って海凪ぎる	風花と呼ぶ幸せなゆとりもち 歯でラシが今朝もふるえた霜柱 歯ブラシが今朝もふるえた霜柱 扇でラシが今朝もふるえた霜柱	日本は豊かな国ぞコマーシャル 寄せ書へ母も小さく名を連ね 娘は二十歳ただそれだけで華やかで 娘は二十歳ただそれだけで華やかで	悪くない話揉み手が打診する 再打ちに怖い工作仕組まれる 耳打ちに怖い工作仕組まれる エカー と作りましたな子沢山 を売子 といる といいです かい という はい という はい という はい という という という という という という という という という とい	赤札の衣装で足りる妻になり 好きですと神経痛に住みつかれ
ЛЦ	平	野	野	玉
芳	狂	宵	昭	歌
子	虎	草	代	子
引平 叱綿言孫九の逝 れ針訳人	六 断 臆 漫本 ち 病 画	春 ま な と っ ど こ で	病退深 黄室院呼 水	赤国い会
の拍手の渦に幕おりずか拍手の渦に幕おりずか用手か出手か出市井上とか田市中上か出手上か出手上か出手上か出手か出か出か出か出か出 <t< td=""><td>本木あたりで拾うトップ記事本木あたりで拾うトップ記事に動いて布走るとが摑めない。</td><td>春はもうそこへ来ている猫柳あと一歩渡り切れない夢の橋連なって北山杉を抜ける風どこでどう縺れて伸びた豆の蔓</td><td>の片隅にあの片隅にある</td><td>実の</td></t<>	本木あたりで拾うトップ記事本木あたりで拾うトップ記事に動いて布走るとが摑めない。	春はもうそこへ来ている猫柳あと一歩渡り切れない夢の橋連なって北山杉を抜ける風どこでどう縺れて伸びた豆の蔓	の片隅にあの片隅にある	実の
拍手の渦に幕おりず拍手の渦に幕おりず	たりで拾うトップ記事用に動いて布走る おりで拾うトップ記事	うそこへ来ている猫柳 歩渡り切れない夢の橋 どう縺れて伸びた豆の蔓	の片隅にある姑の杖 の片隅にある姑の杖 の片隅にある姑の杖 の片隅にある姑の杖 高槻市 笠	実を食べてひよ鳥思案顔 豊中市 満の議員はみんな握手好き

不祥事が続いて警官の友思う見栄ですか罪を犯さすマイホーム桃の花活けて三月の顔になる	竹原市	善人がある日突然爪を研ぐ	さよならは次の出合の切符です	コーヒ皿ほんとに話好きである	見栄少し見せて女が髪を染め	今治市 昭	草蔭の祠にひそとどかざり	豊作田ねぎらう様に雪ぶとん	風花にまず天満宮へ初詣で(孫受験)	初春の客雀も揃って来てくれる	滋賀県	友の声聞いて弱気を立て直す	墓参り序でに梅見播州路	娘が去んで宅急便が後を追う	屋根の上猫陽だまりをよく選び	吹田市	おけら火を都大路に振る寒さ	薄氷動くものなし亀の池	普段着の妻と炬燵の三ヶ日	樟脳が包う晴着で初詣	八尾市	姑の炊く雑煮祝えるお正月	目と同じ使いわけする咳一つ
	石					野					安					茂					鷲		
	原					村					田					見					見		
	淑					京					志					よ志							
	子					子					津					子					章		
気まぐれの風に乗っては噂揺れ人生の幕にサタンは影を消す野仏をそっとさわってみたくなり	傷心の肩に百キロ程の石	竹原市 信 本	シャッターを押せば絵になる娘の晴着	風の巷であらぬ噂が手を叩く	一病へ結び直した夫婦綱	病葉に胸を衝かれた闘病記	羽曳野市 吉 川	空しさにくず籠の紙音を出す	藪かげに耐えた椿に陽があたり	嶋育ち風の誘いに染まぬ花	連絡船孤島に春を積んでくる	米子市 祝 部	水子地蔵誤算であった子に詫びる	裏がえす枕に夢をたくす夜	心ややほぐれて月とする対話	蘭の香に酔えばよい夢見るような	米子市 茂 理	まっ青な空にかくしごとできず	声量が小さく正論反故にされ	グラタンがぶつぶつ言ってよい焦げめ	磨きたてのガラスへ冬の蠅が這い	和歌山市 森	春そこに桜の蕾がウズウズと
		博					寿					寿美					高					敏	
		子					美					子子					代					子	

守に「いる市	市場篭持つにも女化粧する ・	年玉をはずむ夫へ少し妬く お年玉の子算を立てた孫が来る 小春日和人恋しくて町へ出る 一位父の名の賀状も混じる喪の正月 世級の名の賀状も混じる喪の正月 世界市 樫	表やさしくて他の男と逢ってみる 生きて来た地獄の服は脱ぎ捨てる 幼子の才気覗いて父の汗 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	手鏡の裏に棲んでた夜叉の面パソコンで恋のパズルが解けますかパソコンで恋のパズルが解けますか年年へのんびり出来ぬ妻で居る年年へのんびり出来ぬ妻で居る
城	Ш Ш	谷	原	原
君	克 半	郁	汲	みさ
子	子仙	子	香	子
きたくも無い身の上へ茶のと割り切るすべが板にで来たうつをそのまま	戦争を知らぬ世代で口が肥え来席が火の吐く様なものを言い捨てた筈酔えば出て来る里の唄捨てた筈酔えば出て来る里の唄っている。	⇒場喧嘩悪い皿からぶっつけるの型屋敷今は割れない皿があるのは割れない皿があるのである。	我の強い女が着てる緋の鎧れが強い女が着てる緋の鎧のあがる日の虚心を生きてる音がする	川柳の種が落ちてる安定所 孫ふたり泊めて不眠の夜が明ける 孫の種が落ちてる安定所 大阪市
桜	浅	八	Щ	上
#	野	木	田	田
千	房	芳	保	柳
秀	子	水	蔵	景乡

吉 永 伊三郎 とりのあった。それは他の 市 永 伊三郎 数れの寄跡信じた石ぼとけ 内緒話が性に合わない九官鳥 終着の駅に夫婦の湖がある 終着の駅に夫婦の湖がある を対よ来だ習い切れない事ばかり がないを信じて昨日のプラン練る 生き抜いた証しに青い空がある 生き抜いた証しに青い空がある 生き抜いた証しに青い空がある 生き抜いた証しに青い空がある 生き抜いた証しに青い空がある 生き抜いた証しに青い空がある なすて来た余韻を抱いて毛糸編む 妻の客台所にもついて行き 山里の暮しの軒に柿すだれ たこ焼の垂れを気にして初晴着 たこ焼の垂れを気にして初晴着
伊三郎 世三郎 七草におじや好んで一人居し 七草におじや好んで一人居し 内緒話が性に合わない九官鳥 終着の駅に夫婦の湖がある 奔放に生きた女の厚化粧 を
三郎 世界の多へみぞれは酢の酢 と
は 世界の多へみぞれは画の画 と 中におじや好んで一人居し と 中 日過ぎて献立又悩み を 一 大田 一 と で で 日 の 下 と で 子 日過ぎて献立又悩み を 一 大田 一 と で 日 の 下 日
を信じて昨日のプラン練るを信じてである。
岸 森 灘 福 鈴
本 脇 尾 田 木
豊 和 民 あ良
平 や 次 子 子 在

ました	風入れてピアノ一息ついている冬木立の向うの春を信じようと樹なお火の粉を防ぐ役果す	金のくらしの中の薄金の花の匂の中で年を	げもじゃの男は細い声を談を軽くあしらうアイシーちこんで妻にやさしい言	間よまっすぐ歩け蟹が車ベル早く鳴ってとハ看取る妻に感謝の手を	ļ	玉砂利を孫の歩幅で初詣
	中	井	崎	本	7	*
	隆	玲	君	_	j	Ċ
	=	子	子	郎	i	Ľ
久 日 溜 り 振	三冬ぜヶ景い	時電 蓑刻線虫	酔 何 乳っか 房	父 若 決	夫三責まかめる	ら表
版りのデートで夫婦若がえり へ日だまりへといく話 いわが子に手を振りにらまれる	日退屈してる貧乏症色街には街の彩がありたくに慣れてしまった手の奢り	む音が段々攻めてくる大阪市のこんなにいたかと裸の木	ているふりして乗った口車言いたそうに蜜柑剝いてくれ握ってはなさない小さな掌	〈の唄調子はずれが愛嬌で鳥取県行草をはむ牛の目いとやさし (断を迫ると逃げてゆく返事)	た帰らぬ夜の手内職 というに という	(暮の直ぶみは妻の导意なり 岸和田市
りのデートで夫婦若がえりへ日だまりへといく話へといく話	日退屈してる貧乏症 豊田とくに慣れてしまった手の奢!	音が段々攻めてくる大阪	ているふりして乗った口車言いたそうに蜜柑剝いてくれる	の唄調子はずれが愛嬌で 草をはむ牛の目いとやさし 断を迫ると逃げてゆく返事	らぬ夜の手内職島根の手内職島根	暮の直ぶみよ妻の导意なり 岸和田
りのデートで夫婦若がえりへ日だまりへといく話	日退屈してる貧乏症色街には街の彩がありたくに慣れてしまった手の奢り	音が段々攻めてくる大阪市武者絵の凧が空威張り	ているふりして乗った口車言いたそうに蜜柑剝いてくれる握ってはなさない小さな掌	の唄調子はずれが愛嬌で鳥取県草をはむ牛の目いとやさし断を迫ると逃げてゆく返事	らぬ夜の手内職島根県	暮の直ぶみま妻の导意なり 岸和田市
りのデートで夫婦若がえりへ日だまりへといく話	日退屈してる貧乏症 豊田市 犬色街には街の彩があり	音が段々攻めてくる 大阪市 山 二人なにいたかと裸の木	ているふりして乗った口車言いたそうに蜜柑剝いてくれる	の唄調子はずれが愛嬌で 鳥取県 土草をはむ牛の目いとやさし	らぬ夜の手内職島根県・千ちぬ夜の手内職島根県・千ちぬ夜の手内職	暮の直ぶみま妻の导意なり 岸和田市

交番に昔を尋ねるほど無沙汰制服を脱げば不満のある会社	膨んだポケツに嘘をつめて冬	角とれた石に聞きたい妥協案	此の指に止まれ母さん鬼になろ	今治市	義理ひとつ欠いて小さく寒い部屋	遍路笠風と輪廻の旅をする	エプロンを付けて落ち着き取り戻す	倉吉市	熱燗が父の安らぎかも知れぬ	線香の煙に詫びる里帰り	真っ白に乾いて女満ち足りる	兵庫県	恋多き女もやがて風化する	恋いくつ古い日記に冬眠し	紅白の餅姑として配る幸	鳥取県	飛行機雲元旦の空新鮮に	嫁の肩に甘え切ったる外科の日々	子供には子供のルールお正月	吹田市	音様に	貧しさを言うまい寄り添う人がある	裏切りの背中は追わぬあかね雲
S	石			月				淡				東				羽津				栗			
	手			原				路				浦				川				谷			
				つく				ゆり				砥				公				春			
ä	武			Ĺ				子				代				乃				子			
関の花と孫とに送られる	出荷待つ野菜に朝を急かされるお年玉待つ三人となった孫	高知県	10	けちだから他人のけちが気にかかり	解釈の相違答えが意に染まず	熊本市	郎	朱の袴履いてジーパン巫女となる	猫が病み家族の一員なるを知り	唐津市	粉雪を見上げ今宵は積るらし	小吉のみくじ待人来たらずと	一言が過ぎて寝られぬ夜を明かし	大阪市	大胆にディスコで若さとりもどし	孫達の帰った部屋で一呼吸	初夢に思いがけない人がきて	西宮市	病みあがり作業衣俺を馬鹿にする	速力のない妻の矢が避けられぬ	火曜だけ逢瀬が続く白い足袋	芦屋市	食欲も色欲もありまだ達者
布		中				黒				浜				大				飯				上	
施		内				田				本				塚				森				田	
サ		朱								ち				節				泰				佳	
チ																							

年のかさ馬耳東風に慣らされる大神楽開運ねがう寒の風	小半日話す農家の置炬燵 高槻市 芦	嫁いだ娘客で迎える新春の膳	まっつぎこれまできっした 出雲市 小達と正月漫画見て終り	のおのおと牛年の牛同じ貌牛年の初夢めんこい子牛もよう	な板の調子は妻の天気図	無雑作に空気を吸うて生きているボーナスを数える音丈きかされる	私と会うゴキブリの運のなさ	ストーブのある天国で叱られるどうしょうもない傷口をつつかれる	きざむ女の城の台所		師の笑顔吐きたい弱音寄せつけず	広辞苑引けぬ疑問が多すぎるバッグから編みさしが出る待ち時間
	田		白金		喜内		本		月		本	
	静		房		M		玉		晴		伊久	
	江		子		實		恵		彦		栄	
スス竹もかがりも燃やす小正月	ゆぎ	オーナスペー品にすむ害意意	数の子膳に	長崎県	2.,…そゝ,,- ぎまでついでに送る夜の見せる薄着で風邪を引	なる銀河豊中市	育つ子へ妻はだんだん丸くなりふる里はまだまだ遠い帰港船	気弱でも丸く生き抜く広い海	働けど働けど税持って逃げ堅苦しい挨拶抜きで酌み交わし	の隅で人間好きになる	平凡な城でいつもの笑い声自己主張過ぎて背中に風刺さる	スキップでふところぬくい宵恵美須
梁		坂		岩		小		=		戸		佐
Ш		根		崎		畑		宮		田		藤
吉		流		和		よし		Ш		種		令
子		水		子		子		久		子		子

渦の外にのがれて一人残される 西宮市 秋 元 て る 銀と子の旅をほほえむ里の駅 西宮市 秋 元 て る 無点をぼかし調停案をだし	人秘書夢ひとつ持ち嫁きおくれ しい花つけ雑草もぎとられ 岡山県 矢 野 山瓶へ無茶苦茶流が活けてあり	大阪市 稲 本 凡 子 一 大阪市 稲 本 凡 子 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一	合格は天に任せた靴をはく 鳥取市 若 林 一 止朝顔が素枯れた儘の日がつづき ホー ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	でいると皆黙る 番組日々平和 したい晴着の したい晴着の
が 過疎村に鬼瓦だけ留守番をし が間にもこたつ運んで除夜の鐘 岡山県 福 原 悦	きたいのです少女に戻れそうだ人旅なんと小さな影法師で触れてやっと笑った障害児でかれてやっと笑った障害児	区分して賀状抽選待っている でいる という という という という おおお という という という という は は事の膳母に似た顔叔母二人 という は かんしょう は は かんしょう は は ま の という は は ま の という は は ま の という は は ま の という は は は は は は は は は は は は は は は は は は は	をけたとこから滲み出る人間味 一方の話題尽きない久し振り ではないの話題尽きない久し振り 変媛県 八 塚 三五	市 大 見 三 翠

神仏も忙し過ぎる入試前酒の上本心言って嘘で逃げ	北風に洗濯バサミも必死です。交番へ五円貨幣が届いてる二ん月の風に心を開けておく	はぐなまんま金婚式となりの残に不倫を知られてる	守唄背の子へあればムにバラ色	家に自由 職でマナ	生きて行くための大安信じてる牛小屋の窓で聴いてる除夜の鐘牛小屋の窓で聴いてる除夜の鐘	父のこと褒めて貸してはくれぬ金冬の駅また来る人も来ぬ人も弘前市総入歯外して朝の顔となり	ひらがなで孫の便りは読みかえし印鑑も軽く離婚の無表情
村	ŧ	染	上鈴	池	小	Ш	
Ц	1	道	木	田	林	中	
羔	3	佳	春	寿美	妻		
Ŧ	<u>.</u>	明	枝	子	子	14	
全身で笑う児だいて春写す	木で申弋りコマノ吾)が公園というムラ愛すが公園というムラ愛す	春はいつも微熱と共に来の幕御妊娠ですと事務口	春めいて四国巡りの鈴が鳴るつや拭きの廊下小言を聞いている座りなれた頃に帰る留学生	許す日の風のささやき聞きました白足袋の似合う女にあるいくさ打ち直す綿に明治の母匂う	展歴書を書いた時から冬が来る 中年の不安が薬追い求め ・	ラムネ色終って今日のファイトわく流行にしては此の服不格好新札になじまぬままに不服言う	酒・煙草断って明日にかけてみる
兼	岩	吉		佐	さ	天	高
松	田	永		藤	えき	崎	野
·1:	=	な		美	P	只	不
宏	_			代			

お年玉サンタの役は祖母がする唐津市	募金箱僅かながらも汗の金	髪染めて女心のゆれうごき	耳もとで孫の内緒のこそばゆき	岡山県	追跡をすれば表札おんな文字	やりくりの蛇口知ってる台所	自転車を習うて実母は足まめに	和歌山市	処方箋明日の命は書いてない	美人では無いがこぼれる片笑窪	信念が染み込んでいる作業服	寝屋川市	重詰の先ずは手近なものを取り	初電話家内一同順ぐりに	初詣り古道を少し歩いてみ	守口市	赤字線尻目に山越す道路網	フルムーン夫の優しさまた見つけ	つやつやの新芽へ虫のそろい踏み	大阪市	敵からの応援が飛ぶ草野球	元旦を何事もなく妻と過ぎ	初詣でそれぞれ勝手な願いごと
相				中				玉				立				森				渡			
葉				嶋				井				床				Щ				部			
あ				千恵				豊				晴				まさ				さと			
き				子				太				風				お				美			
隣から年始代りに賀状来る幼児の絵は大胆に太陽を	岡山県	幸せの実感が湧く見栄捨てて	バスの中わがもの顔でよくしゃべる	背の孫の歌に合わせて散歩道	静岡市	医者が来る頃に腹痛ケロッとし	番付は無情付人に兄が居る	掲載写真一人置いてと書かれる身	八尾市	どん底を知らぬ輩がもの申し	嫁がせて父の孤独が絵にならぬ	小さい善心も澄んだ秋の空	兵庫県	肩肘を張った男にせまい道	空海の苦行の跡をしのぶ旅	俄雨軒に逃れて茶をよばれ	岡山県	カラオケに古稀の音痴がさそわれる	寝ておれと叱るが何もしてくれず	夢もまた切れ切れとなる風邪の熱	大阪市	騒ぐ血を押え電話の声を聞く	名園は皆殿様の所有物
	牧				渥				松				服				後				今		
	野				美				下				田				安				西		
	秀				孤				蕉				米				di S				静		
	否				舟				路路				朝				さえ				子		

盲信の女てこでも動かない人間は道化かみんな仮面つけ	八戸市 島 田 昭 治	冷たい手まだ茶目っ気の残る妻	この列にぼそぼそついてくる孤独	橿原市 西 本 保 夫	あの時に叱ってくれた師を思い	四季の無い野菜で旬の味がぬけ	高知県 山 下 登	皆揃い公園ぬけて初詣で	公園の老松雪に耐えている	高槻市 大 池 好 古	味噌漬けを焼く火加減の小言言い	粉雪に出番到来河豚の顔	大阪市 川 原 章 久	赤ん坊が笑い一家が皆笑う	三日目で日記は少し疲れかけ	山口県高崎雀声	霜の朝浅い眠りにベルが冴え	ひとり居に北風小僧の声がする	米子市 大 田 みさと	くたびれた靴だが俺によく似合い	門柱を雪ダルマにする北の国	青森県波ただお	週末はひとつ手前の駅で降り
しめ飾り車にもつけ手を合わせ	吊し柿田舎の顔で母の味	吹田市 山	コレクトコールハネムーンの娘ハワイか	毎日が日曜日とはしまらない	新宮市 山	乱暴な勘定票の女文字	プライドはみじんも持たぬビル掃除	鳥取市 武	正月を惜しむ二次会三次会	岩海苔も添えて送った里の餅	島根県	ここも又事故のあとかと野花たむけ	山畑で声の限りを出してみる	岡山県 富	良き友を持つ倖せをかみしめる	友の怪我見舞い時雨の道帰る	兵庫県 円	句が出来て丑三つ刻に灯をつける	ごく自然小さい方を先に取る	倉吉市 田	母さんの笑顔は家に春を呼ぶ	子離れは仲々出来ず母は老け	和歌山県 北
		600	から														/I						
澤		田			田			H			Ш			坂.			増			中			Ш
沢の		里			平			帆			世			志			貞			八太			凡
藤		子			和			雀			似			重			子			朗			太

カラオケで誰も君が代歌わない 河内長野市 大 西 文 次			に	懐の深い男にもつ魅力	吹田市 西 岡 豊	信号が赤赤赤に落着けり	真実をみんな見ていた熱帯魚	鳥取県 林 原 一 尚	日課のよう犬の散歩で彼と会い	ぬくぬくとコタツで世界のニュース聞く	広島市 花 田 繁 子	綱狙う肩に漲る張りと艶	ぴかぴかの赤いリンゴにふと疑惑	大阪市 大 倉 圭 介	童顔の明るさ野にある石仏	見のこした明るい夢を今年こそ	兵庫県 野々口 悠 也	飽食のつけは胃肝に廻って来	おみくじに行列できる初詣	大阪市 平 井 露 芳	戸締りをしても吹き込む隙間風	缶詰の味が冷たい独り者
夜更けし公園明るしオリオン座公園で別れた娘の赤い髪	みな言葉にちらり	れた一人相撲に意地	和歌山県 三 谷 周 三	我家での重大ニュース娘が二十	落零れ運転免許は一発で	新宮市 船 越 正	神仏が同居日本平和です	バス旅行色ガラス越し観る紅葉	新宮市 田 中 国 彰	おだやかに老いゆく背中まるくなり	娘より赤の肌着が温かく	大和郡山市 岡 田 寿美礼	捨てられる命を嘆く粗大ゴミ	日々合うてその日その日の新しく	高知市 北 川 竹 萌	社長さんこの頃バスで通い出し	今日もまた遊園地では土だんご	八尾市 椎 尾 公 子	混線して一層分らぬ聞き合わせ	七日粥ここらでガタッと食費つめ	岡山県 伏 見 すみれ	十人並ならまあまあと言うとこか

安山市 長 谷 川 司 かじかんだ掌へたこ焼きの温み置く 大阪市 喜 多 佐津平の瀬や今年のあかを皆落とし 大阪市 植 村 喜 代	中口市 長 谷 川 司 かじかんだ掌へたこ焼きの温み置く 中取りが土俵清める塩の花 中口市 長 谷 川 司 かじかんだ掌へたこ焼きの温み置く 大阪市 山 本 炉 斉 陽だまりにたんぽぽ咲いて春を呼ぶ ク							
世 繁 男 かみのけがおふろのなかでおよいでる	 本 炉 斉 	球の里行事と言えばお葬式 年に受験の重荷背負う孫 和歌水で瀬田の唐橋素足見せ 和歌	病まで似ていて庇い合う夫顔みて安心出来る孫であるの味は母が自慢の五目飯	園も薄雪足跡だけ残し 調に重機始動の初仕事	くほど絆の深さ試されるは尖るつららの肌は熱くな	ようならといってから思いり返しだけど皆出てホッとが内	く年を数えるものは愚痴ばかりの瀬や今年のあかを皆落とし大阪	春に関取り燃える新土俵取りが土俵清める塩の花守口
世 繁 男 かみのけがおふろのなかでおよいでる	 本 炉 斉 	菊 南	Ш	北	平	金植	Ш	長
川 司 かじかんだ掌へたこ焼きの温み置く	川 司 かじかんだ掌へたこ焼きの温み置く		HZs.					
一郎	南	惠						Щ
#連はいつもの時間にのれん分け	かじかんだ掌へたこ焼きの温み置く	夫			-		26.1	
かんだ掌へたこ焼きの温み置く 大阪市 喜 多 佐津まりにたんぽぽ咲いて春を呼ぶ まりにたんぽぽ咲いて春を呼ぶ まりにたんぽぽ咲いて春を呼ぶ まりにたんぽぽ咲いて春を呼ぶ まりにたんぽぽ咲いて春を呼ぶ まりにたんぽぽ咲いて春を呼ぶ と見る孫の笑顔は漫画なり に見る孫の笑顔は漫画なり ジュニアの部 藤井寺市 赤 木 奈 がいになったコアラがつかれてる 校方市 二 宮 圧 なんて大きくなるたび消えていく 月決めた目標もうやぶり がイキン天国とんでいけ を切りバイキン天国とんでいけ 豊田市 いぬ づか たけしくておおきなおかしたべたいな しくておおきなおかしたべたいな (四)がおふろのなかでおよいでる	かんだ掌へたこ焼きの温み置く おりにたんぽぽ咲いて春を呼ぶ はいつもの時間にのれん分け 大阪市 喜 多 佐津乃まりにたんぽぽ咲いて春を呼ぶ 望守に掃除だけはと淋しさが 大阪市 塩 田 新一郎 鬱少し残して初日の出 に識見のあり除夜の鐘 に識見のあり除夜の鐘 られて大きくなるたび消えていく を切りバイキン天国とんでいけ となったコアラがつかれてる を切りバイキン天国とんでいけ 豊田市 いぬづかたけと しくておおきなおかしたべたいな しくておおきなおかしたべたいな しくておおきなおかしたべたいな のけがおふろのなかでおよいでる	男 子	之	月	郎	子 代	斉	司
		でおよいでる 豊田市 いぬ づかたけ とんでいけ	正月決めた目標もうやぶり 枚方市 二 宮 正めなんて大きくなるたび消えていく 担害 長	たよれ奈	を指折りかぞえ老いは待	ビ見る孫の笑類は曼画なり 島根県 喜 島 ノに識見のあり除夜の鐘 島水県で、	の留守に掃除だけはと淋しさがだまりにたんぽぽ咲いて春を呼ぶ	を 連はいつもの時間にのれん分け じかんだ掌へたこ焼きの温み置く

橘高 . 薫風 選

過去見つめやっぱり僕は白が好き 話したき事あり母の肩をもむ ふぐり握って時の流れに置いとかれ つぎは楢山車掌の声も嗄れる 木 芳 水

藤 4 吉 好きな人できた夜から日記書く 好きな人いま妻として家守る

青森市

I

おっとりと腹を立ててる京言葉 女一人囲えるだけの大志持つ H

雲のない日和空にも心にも スランプが三年毎にやってくる

リンゴ紅玉母の位牌に香を移す

ニコニコと膝崩さずに思師かな いのちある句しかと成す気の寝たっきり

弘前市 波多野

五楽庵

仁王さん怒る笑えば首になる 太陽を無くし雪雪雪つづく

Ш

遠

_

地球儀を振れば火薬がこぼれそう

今治市 月

宵

明

帯を締めポンと叩いていざ出陣 イヤリングつけて若者自己主張

えべっさん冬将軍をおいて行き 愉しさをかくしきれないリンゴ飴

おやしろもわが家も初春へすす払い ポケットの夢を小出しにきた人生 新発田市 上鈴木

こたつでの話みかんがよく似合い 隅っこで生き続けてる傷ひとつ

もう一度怒鳴って除夜の鐘を聞く 精の付く薬は小さい声で購り 居 耕 花

村 枯 梢

俊 春

村 静 雄

泰 子

H 登志実

 \mathbb{H} 妙 子

原 秀

f

春

枝

橋本市 本 木 魚

番長も並んで待ってるタコ焼屋 常連が十円足らぬタコ焼屋 飛び越える溝はだんだん広くなる 悪友が迷路の出口知っている

唐津市

Ш

П

高

明

盃も茶碗もまるい夢を抱く 聞き違いしても幸せだけを聞く

尼崎市

城

武庫坊

ローぱい風船ガムで無視をする エリートは決して指切りなどしない

島根県

堀

江

Œ

朗

訥々と破れ軍手にある意見 開幕の怖さ舞台に立つ限り

IF.

敏

悠久の大義に生きて忘れられ 言が百の谺となるも恋 米子市 八 久 松 保 木 F

蕉

代

これくらいの鞭なら受ける竹人形 落ち椿髪に飾ってヒミコかな 野 佳 T

和歌山市 西 Ш

幸

新しい暦もきっとある踏絵

裏を川流れて不幸続く家 H 中

叶

£ 照 7

後悔のいくばくもなく渦となり 西宮市 奥 H みつ子

応援団いま青春の渦の中 島根県 岩 和

鍬で千石田打ちお正月

富田林市 美 代

みんな冬受話器の重さだけ残り

早朝の紙飛行機は陽に向かい 母がお世話になっていますと言うている 近江八幡市 前 出 111 智 千賀子 子

女系家族で一人気を吐く男びな 景

子

響き合う人に男女の別はなし 條井寺市 木 和 子

瑞 枝

米子市

句読点無口になって老いはじめ	自言市 淡路 ゆり子	つか来る	豊中市 田 中 正 坊	新紙幣肩幅少し狭くなり	唐津市 浜 本 久仁於	0	唐津市 相 葉 あ き		西宮市 朝 山 千世子	ŋ	島根果木村はじめ	居るところ確かめあって孫の守り	唐津市 米 倉 彩 女	組へ聞き耳立てる縁の猫	唐津市 浜 本 義 美	お年玉髭のない札喜ばれ	和泉市 岡 井 やすお		鳥取市武田帆雀	牛歩よし心みたして生きるなら	岡山県山本玉恵	かけ足で行かねばならぬ不況牛	岡山県 小 林 妻 子	嘶いて亡父と引き裂く冬の馬	米子市 林 荒 介	牛になって歩いてみるか好きな道	茨木市 井 上 盛 雄		伊丹市 樫 谷 寿 馬	名画にも少し以ている亡父の皺
宝塚市飯西	牛が荷を引っぱっていた優しい瞳	宝塚市 丸 山	さよならが真直ぐ響く冬木立	島根県 松 本	自慢にもならず邪魔にもなりません	寝屋川市 平 松	年金に効能書はいらぬなり	高知県 山 下	開けゴマ鏡一枚あったきり	米子市 政 岡	人並の嘘では大臣には成れぬ	倉吉市 奥 谷	大年の包丁磨いで城閉じる	鳥取県 福 田	国民は許していぬに立候補	寝屋川市 堀 江	正面に丹精こめた松を置く	羽曳野市 田 中	天命は素直に受けて白椿	米子市 野 坂	お互いの過去は言わない披露宴	大阪市 兼 松	神の意に逆うてみる愉しさよ	島根県 小 砂	守りから攻めに変った妻謀反	西宮市 松 本	ガラス窓雪舞う内も外も絵で	岡山市 川 端	夜毎夜毎に妻の尻尾が長くなる	和歌山市 神 平
ミサオ		よし津		文子		かすみ		登舟		日枝子		弘朗		あや子		光子		隆二		なみ		宏安		白 汀		郎		柳子		狂虎
妥協せぬ音で掃除機唸り出し	和泉市 西 岡	神々も住みやすかれと注連をはり	弘前市 真喜内	ゆっくりと確かに歩こう牛の年	高知市 北 川	人肌で紙人形の髪が伸び	岡山県 清 水	雨が雪にかわって佗助燃えてくる	和歌山市 浦 野		魔児島市 吉 永	何もかも笑顔に変えて行く女	和歌山市 坂 部	古稀近し心構えのあれこれと	岸和田市 古 野	除夜の鐘心に期するもの多く	寝屋川市 岸 野	夕焼の湾借景となるホテル	指宿市 渡 辺		岸和田市 芳 地	平均寿命越した余生でご奉公	西宮市 山 片	喪正月猫がのぞきにきてくれる	高知県 曽我部	極楽行きの切符が落ちていませんか	今治市 月 原	右病みてひだりの足のやさしさや	吹田市 栗 谷	振袖と並ぶ母さんふだん着で
	洛毗		talas		竹曲		悠貴女		和マ		ない		紀久子		ひ		あやめ		伊津志		狸		紀		440		つく		春っ	
	酔		實		萌		女		子		お		1.		で		8)		10		村		雄	(6)	裕		L		子	

				E	也求しおこっている人間の者悪	Į.	奇	羽曳野市 天
		喜代	村	植	河内長野市			文机は女ごころを知っている
	午前11時5分から				点滴の一滴一滴に祈り	春子	藤	尼崎市 伊
2一放送	発表 3月24日(日)ラジオ第一放送	今日子	本	松	富田林市			病む個室よぎる影絵も冬の色
134 保	大阪が送居 されてから場。保			<	リハビリへ春待つ老姉の足重く	代仕男	家	平田市 久
AN FK	お有外 大阪市東区黒場町3一4	弧舟	美		静岡県			生家とて今は遠慮の要る戸棚
I	こえゴモズニョッカー			皺	髪染めてなおさら目立つ顔の皺	芳子	瀬	高槻市 河
	(ハガキに三句以内)	八太朗	中	H	倉吉市			肺八分腐れた胸に灯をともし
	締切 3月10日				幾度か夢物語書いたペン	堕駄	ΧIJ	西宮市 草
薫風	課題「ラジオ」選者橘高葉	博子	本	信	竹原市			雑踏を抜けて主張が軽くなる
	,				接戦の末が八百長くさい幕	如州	本	長岡京市 木
	NHK川柳募集	忠三	本.	松			ンドラマ	一つ屋根にふたりきれいに住むドラマ
					代替りお布施の額もちと変り	千万子	橋	堺市 高
		宏安	松	兼	大阪市			湯煙りに浮いてる妻との自伝劇
に3句	橘高薫風宛(ハガキに3句				幼顔残し口ひげ成人式	司	長谷川	守口市 巨
15	投句先 一50豊中市中桜塚三丁目13―15	恵美子		南	山市			曖昧な空母でもめた港町
	*				小春日に産毛が光る孫の顔	兼治郎	西	大阪市 中
	拗ねている声を電話のベルが変え	章久	原	Щ				虹にのる希望を抱いて発車する
一芳子	島根県 堀 江				助太刀の刀が先に折れて飛び	凡子	本	大阪市 稲
		明水	上	片	西条市			背信の窓美しい流れ星
冬子	西宮市 津 山				青森に甲吉師居り陽が昇る	悠泉	Ш	東子市 小
	大根煮の美味さの解る齢となり	_	雲	津	東大阪市			憎しみを捨てると肩の力抜け
半	岡山県 池 田			旅	好きなこと言うて笑うて和む旅	よ志子	見	吹田市 茂
	老い一人しみじみ飲んで物思う	进足	岡		吹田市			片意地なわたしを宥めているわたし
春日	倉敷市 藤 井				冬の川枯れた初老の腰となり	寿美	Щ	羽曳野市 吉
	北風がそろりとビリの背を押す	裕	木	佐々木	浜田市			雪の中牛もサイロも春を待つ
いやえ	鳥取県さえき				神妙に鈴を振ってる土佐の牛	田鶴	戸	米子市 青
	鏡には笑顔で立ち止ってしまう	菊野	Щ	赤	高知県			遠い娘のふつふつ恋し椿咲く
優	羽曳野市 中 村			とつ	舞台には立てずともよい道ひとつ	年代	城	尼崎市 春
	好意だけ戴きますと返す意地	寿子	原	松	和歌山市		. 0	よくもまあ傘寿明るく屠蘇重ね
Fi =	本語上下 三 名			p	另オナンレー も気にたる石田言	かせ	1	J 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11



達筆でくるから憎い果し状

んでいるのが見えてくる。 達筆もいくさに勝つためのたいせつな武器 一字一字が、優越感に充ちた顔を上げて挑 \mathbb{H} 子

逢うてきたかるい疲れをハンガーに

さめやらぬ余韻のなかで、揺れているハン

い、はかないものをいとおしむこころ。 ガーのなんとしあわせそうな……。 かるい疲れを、いつまでもあたためていた 男性には詠めない句だとおもう。

ホステスの下手な冗談聞いている

の「居酒屋」を思い出した。 てはいない。何故かふっと、マリア・シェル 焦燥を煽る下手な冗談を、聞いているが聴い 不味そうに飲んでいるうしろ姿。無気力と

どんじりの味方がくれる傷ぐすり

してくれるひとが、味方の中の本当の味方。 いが、傷ついたとき黙って傷ぐすりを差し出 いつも控えめで、どんじりに居て目立たな

かくれんぼピエロは森へ行ったまま

のか。森にはアバンチュールがいっぱい。 想像が果てしなく拡がる一枚の動画。 迷ってしまったのか、帰りたくなくなった どちらかが嘘を言ってる平和論

得ないだろう。妥協のための嘘、たてまえと 許される筈だが、嘘を言うのは難しい。 本音の使い分けも不和を避けるのに必要なら どちらも本音を出し合ったら平和などあり

とこの句がとても大きく見える。 小さくゆれているのを、じっとみつめている そしておんなごころも……。グラスの中で ワイングラスの中で空が小さくなる

ストレスの一つは妻の奇麗好き

があり、落着けるのは確か。 ろう。でも適当にちらかっている方が安らぎ かり聞きたくないが、言う方も言いたくなか なしにしないでください。毎日おなじことば 吸殼を溜めないで下さい、新聞を広げっぱ

階段で女同士の無言劇

すれ違う瞬間の女同士の妙な自負心と軽蔑 あやめ

心は何故だろう。私もときどき自己嫌悪。 母の掌に戻せば解けるもつれ糸

もつれ糸を気短かに切ったりはせず、やさし く解いてゆく。いつでも懐かしい母の掌。 が第一条件。耐えることに慣れた母の掌は、 もつれ糸を解くのには、辛抱強く根気よく 五分五分と言われて闘志湧いてくる

四分六分ぐらいで優位だと思っていたのに

も忘れたくないと思う。 うかうかとしてはいられない。 も、力及ばぬと知ったら、潔く脱帽すること 追いつ追われつ、よきライバルへ湧く闘志

カセットテープみたいな愚痴を聞かされる

カセットテープは仕舞っておこう。 くりかえし。こんな嫌な女にならないように 肉となる牛にもセリフあるだろう 時間があり余って退屈して、おなじ愚痴の

とだろう。あの啼き声の悲しいセリフを聴い た遠い子供の頃から、人間の残酷さを思い、 死ににゆく牛の瞳のことばを幾度聴いたこ

影

倦怠期洗わぬ皿が置いてある

長いあいだ肉が食べられなかった。

くることを祈ろう。 ■も、満たされぬものがあって悲しい。 充満しているのは冬ばかり。早く早く春が 洗わぬ皿、が効いている。倦怠期も汚れた

60年新春おめでとう会

昭和60年1月15日・大成閣

板 尾 岳 人

を南へ会場の大成閣へと急ぐ、すでに中年・ 熟年・老年の諸氏が大広間狭しと今日の兼題 晴着姿の娘さんがめっきり減った心斎橋筋 勢いが胸中に音をたてて落ちてくるようだっ の男が消えていった。技と力の男「北の湖 た。奇しくも成人の日に勝負の世界から二人

うもん会会長両川洋々(海鳴へ怒濤の如し) 林由多香(風雪に耐えた大樹の如し)鳥取ふ くわが川柳塔社同人・鳥取県川柳協会会長小 ので何処の遠来の客かとよく見れば、まさし 顔があった。上り口に長靴が二足並んでいた 「牛」と「晴着」に取り組んで熱気が溢れて 顔・顔・顔その中にお二人の雪焼けの

が必要ではないだろうか。 力もいらないけれど川柳に対する闘志と根気 技と闘志の男「松尾雄治」私達川柳人は技も を再確認し将来に向けて望ましい川柳像を探 求分析する常に広い視野で進みたい。 川柳塔社の存在意義と新たなる役割・機能

三句目と四句目の入選作者に贈られた。 く。斉藤三十四氏作の「ループタイ」が入選 川柳塔社の牛歩の如くゆっくりと牛の選と続 でとう会ならではの句会風景であった。 ふさわしく晴れやかに晴着の選から、そして 料理が運ばれ酒、ビールも出てちょっと顔 時三〇分兼題の発表に入り、成人の日に おめ

笑顔で謙虚に隅のテーブルにどっかりと。 両氏のにこやかな顔が60年の初春に相応しく

東野大八先生の祝辞で川柳塔社の和の精神

と、小林由多香氏の挨拶、

両川洋々氏の川柳

に取り組む現況。それぞれ三氏の特徴ある内

現れて落ちにけり。という句の如く活気ある 誓う心が伝わるような雰囲気が "滝の上に水 容に一同耳を傾けて60年の川柳塔社の前進を

少女合唱団にかわり、新たに西宮北口少女合 が赤くなったところで今年はおなじみ和歌山

恥じる事ばかり小牛の瞳に出合う

エリートの牛で貴人の牛車ひく ゆっくりと生きよと牛になだめられ ビール飲む牛丁重に育てられ

さすがカラオケの王者らしいリズムに乗った 揮者黒川紫香氏のタクトも目に入らぬぐらい 唱団が誕生、替え唄の川柳塔節から始まり指 江正朗・芳子さん祝電ありがとう。 歌い振りでやんやの喝采。中原諷人さん、 笑氏の「プランディーグラス」で締めくくり、 むんむん最高潮。最後は今日の司会者河内天 ジに上がり自慢の唄を聞かせて会場は熱気で ームに乗り個人個人がのど自慢の如くステー ーモニーの見事な演出だった。カラオケブ

喜寿金婚 栞主幹へ鶴と亀

高 杉 鬼

遊

嘘のない姿でのっそり牛歩く 丑の刻キリリと胸が疼きます すきやきになるとは牛も知らなんだ よく見れば牛にも美男美女がいる 米びつを満して牛の初春のどか 大和路を辿れば牛車の音がする 松坂の牛はビールで年を越す ミサイルの噂は知らぬ牛のどか 飲んで寝て起きてのんでる牛の春 赤木和 雀踊子 よ志子 登志代 英壬子 緒 子的



安藤寿美子の皆さん

4

の眼

夜遊び

登志実 英壬子 泰 金正礼 智 太坊 子 子 左から洋々・栞 由多香 女 . d

父親が目を丸くして見る晴着

みつる

青年の

主張を聴いている晴着

赤木和

子

天の句

化

輪つけて晴着にしてもらう

智

子

近鉄の八尾から乗って来た晴

1 晴着着るために成人式がある 物騒な話を聞いている晴着 ええとこのばあさんらしい時 娘の晴着母の果たせぬ夢を着 成人の日へ縫い急ぐ娘の晴着 しとやかさ晴着とともに脱ぎすてる 正月がこんなに嬉し子の晴着 美しいマナーで光っている晴着 いつまでの親子と思う娘の晴着脱ぐ娘の第一声はああしん し地味だが母の晴着という誇り ンまだ片袖だけという晴着 声はああしんど せ あいき 東鬼金 笑由 多数 太女香 笛 登志実 生子

林吉田

笑女

はつ絵

(西宮市 (宝塚市

両氏より

金

封ご寄贈いただきました。

柳

塔

社

牛の瞳はやはり

聖者の瞳と思う

小屋のあたりは応接間の農家

農家では昔は牛を飼っていた ビフテキを食って鯨がかわい 強そうな牡牛女がひいて行く

か知らぬ女の花の種

カメラマン来てから乳が出ない

4:

こって牛手綱は妻が持っている 売られ行く牛へ少年草をやる 源氏の君と牛車に揺られ眼が覚める 牛買いに牛はやさしい瞳を向け 人間も牛も働かなくなった の目にはたらきも の光源氏を牛 の奥に聖者の影をみる 天の句 地の句 人の句 -が曳き 0 の嫁がくる 小 出 3 智 子 鬼 水 天 千寿子 みつ子 藻 智 選 客 笑 介子好 遊

門限へやっと馳け込む娘の晴

着

小正月過ぎて晴着のシミを抜き

正月だ晴着だ女喧しい

宇宙服これぞ男の晴着かな 難民のテレビ横目で着る晴着

肩の荷がまだまだ下りぬ娘の晴着

晴着着た妻なら腕を組んでやろ

枚の晴着と都はるみの名

介客

晴着買う金で大学やってある

後ろから見れば甲乙ない

そんなことどうでもええと牛が啼く

史

同志社をきっと勝たせてやる晴 晴着着るその日農婦の手を恥じる 人の句 地の句 藻

度しか着ない晴着は借るときめ かに晴着の母娘競い

洋

17

介

千正笑柳久重史月金あ藻水 客梢坊女伸子人好子太き

61

め艶

きすい

で落ち いわと ななつた ななつた

あ

火やら流艷

0

し鉢話れ

うの

で香

ta

主

めをのる

つ対聞少種の禄聞ぶつい艶

す

よう

す

妻む

で江

のをしの艶をも

まてはて

輪

島

0)

おおり、たしない。とばられたとびられる。これのではあれる。これのではあれる。これのではあれる。これのではあれる。これのではあれる。これのでは、こ

大病るき状よ

なさぐな方

がら顔

布名蒔よなのよ

空招幸陽黒艶定艶電艶歳艶応艶艶艶顔貫艶艶息い色落艶

於物ら

艷 花金

13

T

42

3

あにぼ

10

マた過屋

イ草去片

書が手

に透に

り艶け艶い艶え巾刺絵いい艶

男 選

「の艶にしにせのタ はい話題に耳は長 はい話題に耳は長 れは 妻 いの誘

然次の大学を表現である。 太楼 裏自亡旅黄艷能千袖艷艷格控艷生り 切画父好楊っ面年口めの子 き櫛ぽののにいあ戸目 た意 なのい舞艶ちたる ら女食 色 亡艶話に視 な父がにそるがないながに に を 抱 なガ すかが ٤ 昔盃 知 わラス 赤 0 たそうなしか 7 てる肌・ の艶残すでいる謀叛でいる謀叛 < 越 た 艷 りまわしの。またがある。 石 0 0 ぐるる壺 赤木和子 代仕男 兀 津美子恵子太め 々 坊 士 江

三里五島風 千覚兼虹四ち倫静冬天軒佳章カ然次 ろ正克たサワス ただだり 手助子し子 たたた夫 優 艷 雑 靴艷苦艷運 0) 兵 のつ労ぶ命 艶ぽ嚙きに あ 0) < る 13 出 みん逆 話しめ 4 声 to 3 のう 7 なるとなっ 蝶 0) 底女 明 れ 17 日 をの かい h 呼 0 を 座艷 覗 艷 1.K 黒 考りがかぶ 12 U え替出せき 来 か えるるん 3 1) か可芳静 高 彩 7 み住子歩明 1

ののりのののののでで

公ンをか園に

めて

0

鳩

かい しな独公余口失出

> 閉 っ溜

> > 7

文れな園韻マ業は公

の園を病園を知りで

ま

7

実べ 思い

チ

す

ると聞きと老

・に老いの指 という故郷 という故郷 という故郷 というり聞かせ をする塾!

文正静妻悠武七正佳三ち成静義彩

面

髪種年消話の月

L

歴を

男史吐 ま

靴語座

3

る声が る声が

いすク

るを

座が白 座が白

猫が受

古切

白

磁

ま

主

はの

虹母

語顔となが減れ

史艶艶る艶

海

鳴

n

唄

を

乗

せ

た

喉

0

艷

34

朗

罠あ風

正不雄

がきらずでい

殺に孤街の雨

軸地

柱

をも

い机 ta

のを

艷 0 あ 袁 3 柱 老 舗 K あ 田 3 英 重 味

選

なわて

来サい見れい

赤カ芳静悠狸和ズマル自村

平敏子子也水山之雲和よ人子美女子工子步泉村 — 62 −

る塾帰り とかにして とかにして

げハ

貨パの

るルい

ト陽 日

H 3 ルた

ロー寒

集 多半 U 忙日 だは ら園

の公に

公園にる

きダに

10 行老

ってあるき考える

重久里八虹 人 人 人 人 人 人 人 人 人

辞

人表ボ

未必

3

規不風

を音点を持 3

<

60

た チも独

昔

\$ ĭ を

七

Ш

٤ 0

ありました。そのならかったからなったからのででしがった。

たるいる

幸 面

路

あ公

る関

余の

公園

慕 涙

地は

を棄

買 ててて

闍

裕

公 袁 7 落 武 者 2 b から 焚 火 す 3

坊

見動

7

公 園 を 探 天せ地 ば 離 職 0 父 逢 う īE.

優

書 乗 溝

がいりと

て子に従う公園 な す 公 粛 で に彩 聖 書 がな 抱 1

雄

17

な女

1

垣

根

低

<

大

7

常

見

朋 山

~

依

晚寿枯

明美梢

11

7

成文

選

なななな 1) 越 かれ

大大ギ大商姑大大大大大も反大子生大大大大大大大大大大 ヤ胆魂と胆胆胆胆胆し旗胆を涯胆胆胆胆胆胆胆胆胆 ににのとななはにしたか持な守をななにに ルー 男脱歯 一言にい此女 しもある泣 で飲めを ュ座 イで席 1+ た子 1 ŧ 返 7 ぼり 咲 寝 るろ 1 顔 凡志寿只 太津美士郎

公冬公公公公公公公公公公公公公公公 の園園園園園園園園園

なン老

で人生出出して

め引が

身見

3

い昼

う泣人

3

3

1

あ う

3 3

憩

が実

ある

はにでののののとのに

チたチに でが明僧

生埋へわ

婦章 あやはじめ 本 花 近 どんたく とんたく かん 子 へめ 於 子 の か と の 本 花 近 く

月心昔べ日ベ孤

観

を変え

のン

が

拗

ね

7

+

ま変

ポる一神さ せ を恐 n ぬス夜揺 コを 7 の勝 IJ 犯恋る

にロボッ 女が素が うっ 親手に がり後がな かり後がな かり後がな か と 暴走な 寒上み コリー ではく 族いいるる 与玉文あや ひ 恵平めで

歯

佳牙

小を子言→ く短か く短か < きす 3 三佳軒保 冬枯 大 言言緻 葉 意 外

本

音

ぬる大て大び貰 目胆帰 10 胆越 胆したい は肥 た 夏る廻 # 置 を大り た手着胆られた 大 大 胆 阳

用日 用日 田日 7 木 大 人胆になる 着こな 距せいれい法 離 3 3 秀 重 子人

酷大大大大大大大若大大大大大 さ生 ポら でがいにいせき 1 描 ズ胆 でるざ い 絵 カ た に 丨 ま んたに 晒 を 加の顔がなってすっ 誇 張 肝錦こにいの女る つ着ななぶは引し す み女 < 柿 芳きは素克勝は里 子えめ石子美絵風

子母脱絵脱 to で L E もたエデ か故口 け郷の ぬに役顔揃 玉るす n

大白大蟷大 胆を胆鹹胆 な白へのに 方 い密 程 切な大式 る算胆を 大盤に解 胆出す 見来 直て かさい拍散 もれた手り 一米一雄 尚朝止々

北 ズ 牡 丹 10 自 負 かい あ 1) 高 子

胆 酒 を 味 方 K IE

朗

朋 な な 男 女 0) かい 术 抱 4 11 .4 1 7 る 鳴る 非 1 灯 銭 公

和步数室

題 名残り

本田恵二朗

年とればとるほどつのるその名残り その名残り年とるほどに出ると言う 八太朗 (わくら葉の名残りの声を風が消 (名残り惜しい車涙で追いかける) (名残り惜しい人の車を追う涙 「テープ飛ぶ波止場に名残り重く置く 曲り角惜しむ名残りの影を追う 名残り惜し去り行く人の車見送る 波止場には名残りつきないテープ飛ぶ 名残り惜し後影追う曲り角 看病に一夜明かした名残り月 戦中派飢えた名残りを胃にきざみ 枚の枯葉の名残り風が知る

n

子

ドラの音に名残りブッツリテーブ切れ 親ばなれ名残り惜しむは親ばかり 飛行雲名残り惜しそうに尾を曳いて 発車ベル名残り切裂くように鳴り ī L

、ドラの音に名残りのテープちょん切られ 枯葉一つ名残り惜しむようにてっぺんに 売られゆく小牛名残りか鳴きつづけ 柳五郎

> 人推薦を了承 津、岸野あやめ、

塩田新一郎、

以上十名の同

S

てっぺんの枯葉がすすり泣く名残り 足の傷あの戦場を偲ばせる 酒尽きて話は尽きず戦友会

同

郷

戦場の名残りを秘めた足の傷

周

(定年の名残りせめても机拭く 名調子で名残りを惜しむバスガイド 名残りつきぬ男は背中向けたまま 定年のせめてもの名残り机拭く 兼治郎 [1]

青春の名残りナツメロくちずさむ

初恋は名残り惜しいの一語かな

ī

退院日名残り看護婦へだけ惜しみ

同

移り香を夢見るように抱きしめる

名残りの香日記に記し夢を見る

īi

ナツメロは過ぎた青春名残り惜し

法

安

名残り惜しそうに口先で握手する

口先は名残り惜しげに握手する 口だけは名残り惜しいと握手する クラス会名残りはつきず若返り

やる気満々を停年にちょん切られ

クラス会名残り惜しんだ返り咲き

つや子

名残り多き旅情ほのぼの嚙みしめる)

名残りある旅で情緒が深くなり 同窓会名残りは果てずご前さま

まだやる気あるのに停年名残り惜し

īi

初雪へ名残りの柿が震えてる

初雪に名残りの柿が二ツ三ツ

同

プラットホーム名残り切裂く発車ベル

昇

111 ·柳塔社常任理事会(2月1日

千代女

初恋の名残りを胸の隅に秘め

出席者=栞・薫風・紫香・水客・太茂津・敏 柳宏子・鬼遊・雀踊子・重人・天笑・岳人・

凡九郎・笛生・智子・史好

議事並に報告事項

玉井豊太、山川克子、柿花紀美女、 ▽寺田裕美・神平狂虎、 9・29へ向け始動を開始 十三名)、兼題並びに選者も別稿の如く決定 川紫香・正本水客。実行委員―地方も含め三 阿部柳太・高橋操子。相談役 薫風。福委員長―野村太茂津・西田柳宏子・ 川柳大会の準備委員会が発足 ▽栞主幹の喜寿・金婚・句碑建立五周年記念 後藤正子、 (委員長—橘高 大坂形水・里 丸山より

司

月

■3月の常任理事会は1日(金

ナースへだけ名残りを惜しむ退院日 紅うすく女の名残り秘めてひく 紅をひく女名残りを胸に秘め 点となる尾灯見つめる未練花 芳 [ii]

水

敗戦の名残りとダブル飢餓の国

克

子

可

ふるさとの名残りを乗せて発車ベル

夫

64

- ごあいさつ—

とへ心からお礼申します。なお阿萬萬的とへ心からお礼申します。 なお阿萬萬的とへ心からがいました。長い間血の通い合ったおつき合いを頂きました。長い間血の通い合ったおつき合いを頂きましたことへ心から感難しますと共に一層のご精進をなさっておつき合いを頂きましたことへ心から感難しますと共に一層のご精進をなさっておつき合いを頂きましたことへ心から感難しますと共に一層のご精進をなさっておつき合いを頂きましたことへ心からお礼申します。なお阿萬萬的とへ心からお礼申します。なお阿萬萬的とへ心からお礼申します。なお阿萬萬的とないがあります。

本田恵二朗

お名残りを踏みしめて嫁く高島田 同お名残りを踏みしめて嫁く高島田 同いるとなく酔って名残り酒を酌む みつる いまのの名残りのこして年明ける 小 愛数々の名残りに今朝は靴磨く 明 吉窓際の名残りに今朝は靴磨く 明 吉窓際の名残りに今朝は靴磨く 明 吉窓際の名残りにつきぬ師の教え 同の心今ひと息という名残り惜し 開 表現の果せぬままにくる名残り 勝 美句の心今ひと息という名残り 勝 美句の心今ひと息という名残り 勝 美句の心今ひと息という名残り 勝 美名残り惜し下津井港の便り舟

節

子

同

[ii]

空港で惜しむ名残りの呆気なくを港で惜しむ名残りの呆気なくをある。と抱いてる名残り雪梅の枝ふんわり包む名残り雪梅の枝ふんわり包む名残り雪からない。

[11]

さんの温かいお人柄と独特の指導力とに

ご期待下さいますようにお願い致します

『さようなら名残りつきない十六年』

手に温い名残りのこした発車ベル) 手にぬくみ名残りを残す発車ベル 同学にぬくみ名残りを残す発車ベル 同空港で惜しむ名残りの呆気なく 同

あや子 同同 [ii] [ii] 透明な指に名残りの人が棲み 車窓に頬寄せ合い名残り惜しみ合い) 逢えた日の余韻名残りの中に炎え 先生の遺墨名残りの声を持つ ご先祖の名残りが続く尾骶骨 真冬日の光ひとすじ師の名残 光り見てゆくも名残りの人遠し 胸一杯里の名残りを持ち帰る 再会の名残りつきない立話 焼香の列長々と名残り雪 道ひとつ名残りを明日へつなぎ止め 陸に居た名残りか鯨汐を吹き 新幹線お名残り惜しい窓叩 色添える春の名残りの梅一輪 焼香を待つ人の列名残り雪 ふるさとへ名残り留めてUターン

光 〒598 ハガキに5句以内 (5月号発表) 「空」 3月10日締切

題

泉佐野市中庄一〇八一一九九

金一封拝受致しました河野君子さん(大阪市)より

柳塔社

Ш

- 65 -

[ii]

武水

同同

同

同

山頭火とポーと啄木(2)

草刈堕駄

三は読んでいる。でも既にそのあらかたは忘 とは縁がうすかった。それでも「二銭銅貨」 るところである。僕はどうしてか乱歩の小説 ポーをもじったものであることは広く人の知 日本推理作家協会、 誌「宝石」が経営離に陥った際、 提供して江戸川乱歩賞を制定したり、 さは今もって鮮やかである。 れているが、パノラマ島奇譚の幻想的な美し アラン・ポーの生涯の何んと悲惨なことか。 「人間椅子」「パノラマ島奇譚」その他二、 この赫々たる乱歩の名声に比べ、エドガー し人事不省の状態で発見され、 乱歩は昭和54年還暦祝賀会の席上、 川乱歩のペンネームはエドガーアラン・ 本に於て創作探偵小説の基礎を確立した たが瀕死の重態であった。倒れていた場 は1849年9月末、ボルチモアで泥 61年紫綬褒賞を受賞した。 初代理事長である。 病院に収容 自ら編集経 現在は 探偵雑 基金を

する素人探偵、

ルのシャーロック・ホームズでもある。小説

乱歩の明智小五郎であり、コナン・ドイ

シ・オーギュスト・デュパン

黄金虫」は現代では珍しくないが、

それを実地にあてはめてキ

て行くもので、彼はこの作品で賞金百ドルをャプテン・クックの財宝の隠し場所を推理し

に口走るだけで事情は何一つ聞きとれず 明である。一度意識は回復したが、幻影相手 は二歳の時死別。ポーのことをエドガーアラ ひどい精薄で慈善養老院で死んでいる。母と で叔母の家で死にかかっていた。妹ロザリは 兄のヘンリ・ポーは肺を患い、しかもアル中 まもなく家出、その後杳として行方不明 れが孤独薄倖な詩人の最後の言葉となった。 憐れな魂をお助け下さい』と叫び、そしてこ いて昻奮状態になり、 れたのではないかとの推測もあるが真偽は不 所が選挙場であったのでサクラ投票に利用さ その他ゆるぎなき構成である。また常に登場 れ一分の隙もない。「モルグ街の殺人事件」 ポーの作品は周到緻密な計算によって構築さ の養子となったからだが入籍はされていない。 ン・ポーと呼ぶのは、煙草輸出入商アラン家 に生れた。父は能なしのアル中でポーの生後 ポー ポーは貧しい旅役者の二男としてボストン 病的な飲酒癖と著しい嘘言癖にも拘らず 四〇歳のときである。(河出書房版参考) は正に呪われた家系と言わざるを得な 7日早朝、神様、

じた黄金の国)であった。
じた黄金の国)であった。

ことはありません。酒浸りだったことは一度 に「今まで一度だって私は飲んだくれだった く知っていた。1841年医師に宛てた手紙 であろう。ポーは狂的な飲酒癖や神経性抑圧 き、姪のバアージニア・クレム (13歳) と結 説以上に高く評価されている。ポー 中野好夫が漂渺たる神韻と評した彼の詩は小 こと、どこまで信じていいか疑わしいが、 もふっつり禁酒して四年になります。もっと その後で寝込んでしまうような有様です。で 乱酔してしまうことがある、でもそんな時は なかったのです。つまりそれで時々すっかり ような昻奮、 他の私の友達などにとって日常茶飯事である だってないのです。 の飲酒の悪癖が呪われたものであることをよ から性的不能者であったらしい。ポーは自分 て、その叔母の中に母の面影を求めていたの 婚している。ポーが求めたものは叔母であ れほど哀しい文章はない。 すが、それとて神経病的発作をまぎらすため もその間一度だけ禁酒を破った時期がありま に林檎酒を飲んだだけです。」嘘言癖のポーの ポーの推理小説は既に定評がある。 緊張にも、どうしても堪え切れ ただ私の感じ易い心は、 弁解の悲痛さであ 26歳のと

66

柳 展

集録·板尾岳人

夫、歩く=保木 金森雨学、井戸=石森騎久 宿題·兄=水粉千翁、船 子何でも答えます

古川一高句集「貨車」発刊 ★やまと番傘35周年 在宅選のため葉書に2句締

日·60年4月21日(I) AM 10時

花―田頭良子・丘―杉野睦 所・大和高田・経済会館 ―上田千路・伸びる―久保 高を語る―両川洋々 ・巡る―本庄東兵・善人

12時・会費二千円 恵美子・各題2句・締切り 神―中田たつお・噂―森中 ★川柳展望10周年大会 (第

田寿界・傘=住田英比古・

所・まびき会館・岡山駅下 H 4 ·60年6月23日(HAM 10時 回火の木賞発表

高薫風、牛―黒田高司、 時実新子、宿題「白」は

府豊能郡豊能町ときわ台3 切り3月31日・投句先大阪 ★岐阜川柳社川柳大会・野 -4-17川柳展望事務局

冗談・繁栄・牛・愛・裏話 題―ふくらむ・人間味・書・ 工会議所(二階大ホール) 所·岐阜市神田町·岐阜商 H · 60年3月31日(I) AM 10時 はオジイさんになる。オジ

審査員=佐藤正敏・河口 弘·寺尾俊平·大野風柳 雑詠・五句(未発表作品 ★第16回川上三太郎賞

三太郎賞一名、 発表 = 柳都7月号・ 準三太郎賞

独談30分(中尾藻介)·新

投句締切4月20日着便·投 新潟県川柳大会席上で表彰

し・詩朗読(丸山弓削平)

(司会は 大会 句料千四 箱15号都柳川柳社 ★60年度川柳高知春季川 投句先‖新潟県新津局私書

細川不凍(在宅選)、弓=橘 所・高知市 日·60年3月10日M10時半 柳本店 ハリマヤ町すし

宿題 = 父・流れ・手紙 主催—高知川柳社 結局・弱点・片手

とそればっかりである。私 ている。なんしろ私はテレ 症なのでどうしたらよいか らかたついた。題名に困っ ■私の句集の句の整理もあ ▽お便り△

口北羊7回忌供養

イにである。 岡山 寺尾俊平)

■私はグリコ事件の一容疑

事前投句(祈る)

使用の物と同一機種だっ たタイプライターが、 者?として警察の調べを受 ける破目になった。購入し

表彰―一次二次審査を経て のである。

建設基金

い。家の中から人間のにお 「ひとりになってさみし 马 浜野奇童

柳 れる」母を亡くして。 いが消えていった気がする。

サス(五年目)の指導員で 悲鳴ですが今年で仕事も来 仕事が多忙でうれしい

ような気がします。 会へ年一回20年間出席した

援を賜わり会員一同深く感 たところ色々と御配慮御支 が川柳大会を開催致しまし ■このたび私どもの川柳社

人恋しさから川柳はつくら (摂津 森中恵美子)

■私七人の孫 (女子)

白百合川柳社

[1]

謝致して居ります。

■一月は工業統計農業セン

本社句会を探しましたが見 まれ年末から上阪しました。

年は少なくしたいと思って います。35年頃より本社句 空間へ一人置かれている鼓 当らず八日帰郷しました。

59年度わかあゆ川柳会賞

松本はるみ

横地雅風

橋

(木次 藤井明 若い人達が続々と入会活気 の壺 動 ふつふつと血潮がたぎる春 準賞

藤原

あふれる新春句会でした。 小砂白汀

★藤岡長洋氏 (藤岡花梢さ

故 小 西 無鬼句碑 建 立川 柳大会

場所 とき 篠 昭 和60年5月 Ш 町 王子山観音 19 H 境内 H 除幕

句 幼 稚園 の列と帰っ た日の 和

3

応募は一69~5兵庫県多紀郡篠山町福住三二四 口千円 お一人一口限り)

Ш п

. [] 柳大会の詳 細次号

新 同 紹 介

神流 寺 平 狂 虎津推薦 田心 柳宏子・登志代推薦 裕

美

日付朝日新聞より

応援が大変です」と2月7 勝戦まで勝ち進むのでもう しが甲子園へ出ると必ず優

支える人たちとしてPL学 んの御長男・医師) PLを

園野球部地元後援会長

日・3月10日 (日) 夕6時 ■菜の花句会

所·八尾神社内西鄉会館 兼題=柳・遍路・蒔く・カ ラー

日·3月11日(月) M1時 ■西宮北口川柳会

兼題=園芸・淡い・自由吟 所·西宫中央公民館

日・3月14日(木)夕6時 ■南海電鉄川柳例会

回忌句会

兼題=代行・届・新 本社地下食堂 所·南海会館内南海電鉄㈱

■もくせい川柳会

▽句会案内△

丸表

山 菜・薫風・紫香推薦

ょ

津

亜鈍・薫風・あいき・英壬子 あ や 推薦

8

■駒つなぎ句会

申·名前

弘生・右近・三十四推薦 新

塩

田/

柿

花

紀

女

一十一月子推薦

Щŝ

川常

子

-凡九郎·武雄推薦

玉:

一太茂津・寿子推薦

福

井

桂

香

萬的·英子推薦

後:

藤

正

子

紫香・幸推薦

郎

兼題=ゆびきり・右左・内 所・東大阪社会教育センタ 日・3月23日 (土) 夕6時 ■東大阪川柳同好会 -2F布施駅北へ5分

■富柳会

兼題=苦が手・迷う・ゆと 所·寺田町高松会館 日 · 3月25日 (月) 夕6時

り・溺れる

兼題=他人·欲·人柄 所·中央公民館別館和室 日·3月28日 (木) PM1時

所・堺勤労会館和室二階 兼題=輪・家柄・薄い・影 兼題―姉・切る・自由吟 所·豐中市立中央公民館 兼題=八・木・天・高い・ 日·3月21日(祝) PM1時 ■堺川柳会・八木摩天郎七 所・寺田町・高松会館 日・3月19日 (火) 夕6時 ■南大阪川柳会 日・3月18日 (月) 13時半

本 月

センター メンズファッシ 一月七日(木)午後六時 M F C 3

き返された由お気の毒でした。 に吸込まれ一同耳を傾ける 高杉鬼遊氏の登場。歯切れのよい話し振り 句会は初めての会場で二、三の人が引

大衆からみた川柳、川柳家からみた川柳の相厳しい批判に対し客観的に持論を述べ、一般 るものがあると。 の間から覗く鬼の顔の作品には現代世相を見 にとり憑かれた鬼の作品展へと進む。板と板 えることを期待すべきこと。続いて鬼の魅力 大衆は川柳を覚え、興味を持ち川柳人口が増 違点を理解すべきで、 NHKの川柳天国全国放映への各地からの ぬるま湯的な川柳から

初めて脇取りをしてくれました。今月の月間 広がっていった。フレッシュに藤村亜成氏が の地であると考えながら甘い小豆が口一杯に な友達であり、出入橋は岩田美代さんの出生 配られた。きんつば屋の御主人と薫風氏は幼 新同人山片紀雄氏より出入橋のきんつば

> 代子·小雅子·文秋·美房·作二郎·洋子· 悦郎・薫風・弥生・頂留子・楓楽・花村・美 あいき・〆女・三十四・蕉露・形水・萬的 子・宏安・鬼遊・喜風・洋敏・泰子・白兎・ 柳宏子・英子・正坊・笛生・紫香・天笑・月 幸・三男・太茂津・重人・景子・只士・池田 雀踊子・柳伸・元紀・寿子・一二三・亜成 山久・幸生・吸江・久子・冬葉・寿美・晴風 年代・眉水・水客・岳人・春蘭・以兆・栞・ 狸村・勝美・柳影・射月芳・春江・武庫坊・ 絵・いわゑ・みつ子・満津子・道子・凡九郎 寿美子・章久・隆二・白水・一郎・敏 出席者―与呂志・千代三・白渓子・紀雄

藤 村 女 選

古傷をかくす女傑の面かぶる 政客を叱る女傑の太い声 さすが女傑ささいな噂吹き飛ばす 卑弥呼から男の影が消えている 遺言状を書いて女傑の眼がきれい 寡婦の意地通して守る社長室 女傑の面つけてさびしい女の夜 女傑でもこんなやさしい人がいる 間では女傑女傑と母を呼ぶ

> 武庫坊 元

> > 八起き目に妻は女傑だなと思う 強盗を論す女傑の母思う ダンプカーに父ちゃん乗せてゆく女傑 女傑のペン相手構わず斬りまくる

名物で通り女傑の居る市場

競り市の女傑テレビに出る化粧 その日からおんなを捨てて来た女傑 涙もろい女傑の好きな浪花節

けったいな女傑は大屋政子です その昔泣き虫だったという女傑 おとなしい夫を持っている女傑

女傑より可愛い妻でいたかっ

ひとりになると女傑もやっぱり女です

雀踊子

年 寿

美 代

男達女傑の過去を知りたがる

天正形

灯を消して女傑おんなになりたがる 主婦の座と社長の椅子を使い分け 年下の男を持っている女傑 友達に男がたんと居る女傑 孫を抱く女傑は別の顔を持ち 血の色に涙を持たぬ総婦長 女市議つぎは市長に打って出る 人さまが女傑と決めた荷を背負い

形

郎

正吸はつ絵代

回顧録余白に女傑の鈴を聞 市議会に出馬の噂ある女傑 ほほえみに孤独を隠している女傑 大阪弁で通す母です女傑です

女傑だと言われる人のやさしい目 艶っぽい女傑鏡が笑いだす 女傑にも泣きどころあり子守唄

いわる

みつ子

楽

笛 年白

生代

仕事の鬼やさしい面もある女傑 女傑でも手古にあわない孫曽孫 ルンルンの大屋政子の女傑振 只

あいき 雀踊子 武庫坊

風

眉

水

- 69

美

水 房

ネックレス 西 出 楓 楽 選

メルヘンへ月の雫のネックレ

ス

的

借りに来た方がダイヤのペンダント 嘘つけぬ女が迷うネックレス 値札までぶらさげてるよなネックレス 遍歴のあとをつないだネックレス ネックレス褒めて器量は口にせず ネックレス変えて夕日を背に出かけ シンプルな衿に生きてるネックレス 意味もなく渡す筈ないネックレス 地下足袋の男にゆれてるネックレ ループタイいわば男のネックレス 会葬で真珠の大きさくらべてる 札束の魅力に揺らぐネックレス ネックレス女の見栄が目立ち過ぎ 偽物でよかった落したネックレス その上にペットに金のネックレス 堂々とすれば偽ものとは見えず キリストも知らずクルスの首飾り 見られたい見られたくないネックレス ネックレスお前が弾むことはない ネックレス島に帰らぬわけがある ネックレス着けると服が喋り ネックレス外してという女がある **愛情を評価しているネックレス** 流行の帽子がほしいネックレス ネックレスゆれて女が迷いだす 重宝な嘘と知ってるネックレス 満津子 与呂志 満津子 武庫坊 満津子 あいき はつ絵 只 千代三 鬼 房 以春隆 白渓子 章 隆 文 兆 秋 江 男

俗っぽい顔で和尚が札数え

ネツ 冗談のわかるメッキのネックレス ネックレスよりも指輪を待ってます ネックレスゆれる女の無言劇 ネックレス春の雑誌を読んでいる ネックレスふた言み言いなされる ネックレス女おんなに裁かれる ネックレスすこし媚薬をつめてある ネックレスだけが知っているドラマ 中流を意識しているネックレス クレス胸元意識して拡げ クレス今日は淑女になってみる 作一郎 はつ絵 白渓子 正晴 坊

河 内 月 子 選

兼題

俗に言う内弁慶の夫でした 所詮俗人間で御座います 凡俗に悟りの道が遠すぎる 俗人の暮らしを神もうらやまれ 近代化ですと俗化をいいふくめ 秋の虫尼僧は俗の世を偲び おふくろをふと想い出すめしの文字 射月芳 凡九郎 頂留子 どんたく

俗っぽいとこが気楽な町に住み 俗名で拝むと愚痴になってくる 俗人に徹しきれないからこまる 俗っぽいはなしに向いた右の耳 あいき 冬 重 俗人です酒も女も大好きで 俗人の中流意識捨てきれず 俗人に戻った父の冬帽子 俗学に鉛筆の芯固すぎる 俗人はきれいな顔に騙される マスコミの笛に俗人すぐ踊 リケード除けば俗な顔ばかり 寸したジョーク判らず貯めて

俗物でよし人情は忘れない

目惚れの首に重たいネックレス

俗説を信じて花の種を蒔く

俗っぽい言葉に飢える冬の街

日本川柳人名鑑刊行について昭和60年度

〈参加要項

参加用紙に所定の事項を記入。顔写真必 ■参加費 用紙はご請求下されば送ります。 五千円 (名鑑一冊送付

切 昭和60年3月末日 申込みと同時に払込み

■申込先 〒542大阪市南区谷町7-1-昭和6年9月末日予定 新谷町第二ビル206

39

■ 発 締

本 Щ 柳 協 会 振替口座

大阪7-3575

俗っぽい和尚で法話面白 っぽく生きて汚れてきた名刺

只 香 1:

楽

雀踊子 子

いる 三吸柳四江影 電話(06)768-2622

日本川柳協会事業部

俗向きをゴチャゴチャ置いて儲けてる 俗世の中で安心して暮らす 俗説のまま語り部として生きる お寺さんの裏です俗なくらしです 俗物に徹して悔いを一つ持つ 俗っぽいたとえで納得させてくれ 冬の旅俗な訛りがあたたかい 風俗に馴染んで心とけてくる 舌一枚使って泳ぐ俗世間 俗人になれぬ人形で風に舞う 現代の風俗やろかすぐに脱ぎ 辻説法俗っぽいことも言うてみせ つまらない事が大事な俗世間 っぽい話が好きな宿の下駄 かしい事は言わないおじいさん 作形 水 重 強

柳宏子 満津子 射月芳 いわる 物の無い時代の月は澄んでいた 思い出がきれいで過去を断ち切れ 失恋の傷にも綺麗な花言葉 綺麗ごとで荒波くぐるふしあわ 婚前に言うた綺麗は忘れたの 切口上の綺麗な言葉聞いている サムライを綺麗に騙すつけぼくろ ちぐはぐが一寸気になるきれい好き 手毬まだ綺麗なままで人を恋う 駅前の広さ自転車除かれる 綺麗好きされどお風呂は嫌いです 愛憎のるつぼ綺麗な眸に埋めて 小綺麗に暮らすおんなが猫と住 綺麗ごと言うておれない火の車 綺麗ごと言わぬ屋台のコップ酒 ++

2 ぬ 生遊

三十四 はつ絵 江

敏

俗っぽいはなしへ天女降りてくる

飯 田 悦 郎

美代子

席

自慢

射月芳

温い 憧れ

題

雑草

投句八百円(作品集呈・3月15 2題 各題2句

千五百円(作品集·軽食呈 締切11時30分

日消印まで小為替希望

投句先 懇親会

一六八九一〇四

会費二千円

鳥取県気高郡鹿野町鹿野

中原諷人方

病む母に綺麗な嘘は喋られず きれいごとばかりで神話作られる

> 千代三 武庫坊

まぎわまで綺麗に生きる日記帳 綺麗な女へ綺麗な女の噂せず

da

きれいな色で憎い早さの砂時計 綺麗事並べて寒い人になる 身を飾ることはしないが綺麗好き

綺麗事並べ世話役頼まれる 絵葉書に綺麗な過去の恋がある 遺言も書いてきれいにしておこう

花を売る綺麗な声に逢う京都

欲捨てた暮し綺麗な陽が昇る その野心きれいごとでは遂げられ 月青く綺麗な刻にする二人 残り火を綺麗に燃して終りたい 引退を綺麗にしたい波を待つ 深追いはしないきれいなまま他人 きれいごと並べて本音胸に秘め

はつ絵

お多福の面に綺麗なぼたん雪

花時計綺麗な人を待たせない

千鳥足綺麗な嘘がはげてくる

身綺麗にすれば囀る群雀 鏡にも綺麗に写す果物屋 綺麗事道頓堀の灯で別れ

綺麗だナ額の汗が陽をはじく

柳宏子

第8回鳥取県川柳大会実行委員

鳥取

県川柳作家協会

第8 鳥取 П 場川 柳大会

鹿野町国民宿舎 昭和60年3月24日 山紫苑 9時開場

日

国鉄浜村駅よりバス十分) 電話0857(84)2211

黒川

Ш 森中恵美子選 大伴破智郎選 快哉選 止水選

続く

綺麗になる女の笑顔に隙がな 耐える 塩

悦

郎

チンコだって耐える苦労はいるんだよ

的

暴飲暴食胃は今夜も耐えてます 雑音に耐えねばならぬ耳洗う

3

耐えるだけ耐えた女に陽が当る 瓢簞の傷が父には耐えられぬ 蒙雪に耐えて南天赤が萌ゆ

北風に耐えて花芽を育ててる 耐えてきた鮒へ二月の川になる 豆の痛さぐらいは耐える鬼の春 脇役で一生耐えた芸の虫

これも愛耐えて下さい塩の味 耐えて来た話はしない帯の芯 風雪に耐えジョンガラの撥捌き

耐えているのは地球かも知れません 耐えること知らず流行風邪もひく

忍耐をモットーにした姑の櫛

凡九郎

天邪鬼ああいつまでも耐えている

水虫のかゆさに耐える紀元節

春近し蛙もみみずも耐えている

高

風

選

社内給食を社長の横で食べ

土地の名の定食にする旅かばん 定食に銚子が付いた旅の贅

景笛

呑んべえに定食の灯が気に入らず

勘忍に耐える男の喉仏

小雅子 満津子

定食も一本飲むと税がつく お代りの出来る定食学生街 定食にサラリーマンの詩がある 日替わりの定食がある地下喫茶 逢いに来た母へは別な和定食 定食で済ます気はない交際費 定食をサービス券で食べてくる 定食ですませる仲になって来た 定食のあと珈琲をせかされる 和定食妻の機嫌に合わせとく 定食に菜の花漬けが添えてある

形弘只紫耕重天

子子生水生士香花人笑房郎雀

下積みに耐えて礎石の持つ誇り 妻の座に耐えた丸味が美しい 天王寺村で耐えてる冬のペン

大字も小字も白く雪に耐え **霜柱耐えてる音と気付かせず** 耐えている男は背中で哭いてい

耐えるのも限度お灸には弱い

耐えている妻に甘えていませんか 耐えてきて女にある日疑問湧く

はつ絵

浮ぶ瀬の保証はないが耐えている 耐えているこころに潜む鬼の面

打ち寄せる波に耐えてる蟹の爪

生的的

定食で単身赴任の誕生日 B定食食べて野心をあたためる ウインドの定食Aはすましてる

傷一つ私の十字架として耐える 風化にも耐え石仏の丸い影 冷凍の刑に耐えてる魚たち 雪しんしん辞書の深さに耐えてい 年をケースで耐えた雛飾る いる

太茂津

ライバルはB定食をたべている

太茂津

定食の哀しみを知る父の靴

つぎ次と気になるほどのディナー

定食の階級制が気に入らん

はんなりと応えて耐えて喪に服す

むかしむかし耐えろと言われ死にました

えて居た反動で翔ぶ竹とんぼ

花 紀

村 雄

柴藤で定食美人秘書を連れ

カツ定に旧い早稲田の味がする

定食で足りず素うどん横におき 定食の海老が着ぶくれしています 定食を頼みおしゃべりはずみ出し 定食になれ孤独にもなれてくる みつ子 太茂津 坊

ジャンジャン町で仙人定食たべてはる ほかほか定食で心の飢えは満たせない

お子様ランチが丁度ですねん老夫婦

玉三郎見たほとぼりの和定食

定食や鰯一匹黒こげに 定食が歩いて来ますお昼です 定食へふと煮こごりが欲しくなる

(清記

72

社員定食難民に似て並ばされ 定食も団地サイズを知ってい 定食をとって続ける社の話

V

る

ひとり食べる定食窓の方へ向 定食をいつもの席で食べている 3

昼食堂洋定食を箸で食べ

水 兀

作品は雅号も含めて20字まで。 締切毎月末。 必ず原稿用紙使用のこと。 整理·板尾岳人

妻の座を守る賢さを娘は習 前うしろモデルに位置を変えさせる センス決る位置にブローチ輝い 打吹川柳会 弘朗報 高道

この位置に決めて鍬入れ今日の式 現在の私の位置は歩の資格 金賞の菊見て欲しい鉢の位置 取り直し一 老いの位置今の農法捨てさせる 位置だけが望みの綱かサラリーマン いつの間に嫁と姑の位置かわり 番慎重に元の位置 川舎柳悠康佳紫孝

老いの位置牛の歩幅で余生よむ 家具の位置変えて新らし春を待ち 父の椅子単身赴任で空いたまま その位置もやがて神経太くなる

みをき

文 八太朗

知らぬ間に打たれた測量杭の位置 ミヤ子 風 岳子女映

実力が位置づけをする相撲界 見る位置で猛く優しく伯耆富士 炬燵にも上座があって父の席

石の位置決める庭師の小半日

植村客遊子報

新築の匂いもあらた初春の部屋 お年玉孫の年だけ額も増え 派手な名前気になり出して女老 人妻のそんな噂を女する こころにもない政治家の新春の 言で絆が細くなってゆく 世辞 Vi

家が建つ窓辺の夢が消えて行く 父に似ずこの悪筆はだれの子か うば捨の駅で楢山思い出す 泣かされて自信がついてくる勝負 秒針を止めておきたい今朝の冷え 三十年越えて夫婦の味を知り 近づけば栄光の椅子背を向ける おけさ節佐渡で踊りの輪に解け 七転び八起き人生生き伸びる 杯に落成の苦労こめて飲む 悪徳を積んだ鏡を閻魔みせ カラオケヘテンポ狂わす酒の酔い 人形を抱いて長女は母でいる

輝

積年の錆搔き落す遍路笠 アパートの窓それぞれの年の暮れ 暮れなずむ冬はやっぱり人恋し 照明に面影消えてアンコール 投資家を集めるきれいな言葉吐 調教の鞭にことばを聞き分ける 岸和田川柳会 植山

> 寿美子 希久志

予定などたてず気ままな老後です おそくともよし着実に牛の足 生返事夫は逃げ道考える 生返事だったがきっちり届く金 合掌の心に宿る菩薩の眼

り団

夢みたいとうとう喜寿になりました 出発の道に瑞祥雪の舞い 停電に点字読むよな手探りで 妻曰く墓地のローンは嫌ですと 大型の時世に紙幣小型化 出向と体裁のいい島流し

飢餓の民涙の雨も渇き果て 小心な男がしてる後始末 病葉の落ちて紅葉と知る谷間 トナムに父の墓標を持つハーフ 川柳高知 め注連の稲穂を見逃さず

武助報

はつ子

みつ子

٤

サワ子 みね子

待ちわびる耳へ灯のつく足の音 引っ越しが処分をさせる不要品 足音が師走の風をつれてくる 元日へ揃えてせまい台所 バカにした易を信じる不倖せ 点滴の音もかすかに夜のわびし 健康な胃へ羊かんの厚さかな 脱主婦の夢もかなわず終い風呂

ゆづる

31 野萌吉恵舟枝子鳥生

病室の窓からのぞく暮れの月紅葉に魅せられ予定変えた駅 野良犬が長い影ひく年の暮れ 定年のとっても長い日が暮れる 退職後の予定にしとく の中を発 時刻表

U

川柳塔唐津支部

操 白 勝 光 晴

湯殿からつるべ落しの陽を拝む 表紙絵の美人をさがす冬の街

正敏報

伊江坊

祝う日ぞ潮の満ち引き確かめる 女傑みな若いうちから寡婦でした

正朴弘 敏竜行

松風報

晴着続々今日古寺に釜かかる ダービーで優勝したい牛の夢 ネクタイを外すと酒が美味くなる 豚のしっぽ笑いと哀れさ感じさす 縁側でお茶をよばれた話好き 相槌は打てぬ味方も敵もある

鉄

素うどんに入ってた葱が歯に残り 葱きざむ音もひと日の幸に生き 豚の鼻しみじみ見れば人恋し 養豚の背なへ冬の陽丸う差す

恋に勝ち二つの椀の葱刻む 葱坊主明日への夢あり背をのばす やりくりの暮し見てきたフライパン

ル

虎酔吟

司

凡九郎

三十四 敏

介

与呂志

それからを迷い続ける葱坊主

花子報

重

富美子 日枝子

男手で土鍋無難なカユが出来 インスタントばかりで鍋が錆びて

寄せ鍋の湯気も恩師を囲む会 ぼたん鍋囲炉裡が包う雪便り 鍋やきの鼻へつんとくる七味 まだ一人足りないままに鍋かこむ 塾帰り鍋やきうどん母が待つ 晩酌もそえて企む鍋料理

× 花代子 杜 女的

和子報 与呂志

独酌を愛し老妻を愛し 別れても愛のほてりに迷う影 塗り替える彩がもうない十二月 亡き夫と夢で逢います語ります 新札にまだなじめない市場篭 酒とろり女は男をたよるべし

渓水報 すみれ テルミ 那智子 まさ子 武狂 幸佳白朱 功 覗かれぬ鍵を少女は一つ持つ 恋人の胸の内まで覗きたい 覗き見を諭すが如き月明り 見送りも悲喜こもごもの孤児帰国 丑年は決して軽々しゃべらない 大吉を引きたい欲は持っている 欲を積むたびに自分を見失い 欲張りの手帳へ詰めたスケジュー 里帰り欲の袋は忘れない 平凡な人生だけど欲がある 美しい顔から覗く夜叉の面 天国を覗く瞳を拭いてみる 覗いてる方が真赤な顔をする 覗くのはよそう買う気にさせられる 見送りへ少年大志燃えて立つ 川柳塔きゃら木

手作りの楽しさ肩を凝らしても

手作りを今更恋しがる文化 青空が好き手作りの竹トンボ

手作りへ姑を立てた嫁の知恵

新婚の帰りを夫婦箸が待ち

川柳しんぐう

夫婦箸耐えて来ました長い道 割勘の下戸の美事な箸さばき 昼酒に喜怒哀楽をかみしめる まだ馬鹿になれぬ私を笑う妻 日の丸がここでは映えるお立台

見送りがパントマイムのガラス越 狐児帰る陰で見送る親もいる

しげお

へ真向う靴の

牛が背に七福神をのろのろと 人間へ牛はたっぷり恩をうり よく見ると何と可愛い牛の瞳よ 除夜の鐘出番の牛も〆をつけ 平和な世闘牛なんて似合わない 牛よ牛今年もどうぞよろしくね 十牛の悟りを得んと初詣

寒くてもゲートボールに行く元気

(小六)ひろし

郎

商人の寒い訳ではないもみ手 寒空にそっと握った手の温み

し物紙屑籠に手が伸びる

外よりも寒く感じるすきま風

のり状のかゆも美味しい回復期

校長も寒いか朝礼早くすみ

外人が日本の味をのりで知る 騒ぎから抜けて妻ののり茶漬 太陽のお蔭シーツにのりが立ち 手作りの仮装で受ける隠し芸

岩海苔が厳しい冬の彩になる

ゆったりと牛の背で吹く春の笛 牛の背でゆったり旅を続けよう 丑年にこだわりすぎた嫁きおくれ 言い負けてこつこつねばる若い牛 は疲れたのに牛小屋の戸があかぬ 春へ牛の歩みが早くなる

見送りのテープ再会約し切れ

喜酔報

よしほ

逃げられて紙屑となる借用書 わたしには紙屑父の宝物 無人駅紙屑ちゃんと箱にあり 紙屑の方に本音が書いてある

定年を見送る席で罪を消す

軽い冗談のなかで好きになってゆ

白渓子

もつ 匿名の手紙母には見せられず 頼りない父が落ち着いてる救い 新春へどっかり落ち着く重ね餅 ことしの絵未完のままで歳を越す ひといろの夢から醒めて葱きざむ 出直しの背中に母の影を見る きかせたい親ほど来ないPTA 息白き人駅頭にかたまりて 釣天狗妻にみやげの干魚 老境にいてなお夢は捨てられず 赤ちゃんの笑顔で戻る夫婦仲 それ以上飲むと怪獣になる夫 モーニング落ち着きなさい金屛風 満願の日を越す母の深い愛乗り越えた半生聞かす置こたつ 亡母の影なぞる心に雪が降る 言い訳はポッケのチョコは任 寒風に紅葉はらはら夢も散る 八十路近く目醒し胸に霜の 内々の話に葬儀屋座を外し 小春日の中で夢食う貘を追い 月の夜について来る影佗しくて カレンター 初詣で花緒のきつい下駄で出る 部下達の不満が聞ける酒の席 太閣と同じ浪速のゆめに生き 度さめた続きを見たい夢 女文字から角が出る 柳ささやま 先ず連休を数えてる のおそい せとく 河原みのる報 春 正本作昭一哲 蔭 人棒秀子屯朗 米ゆう也 とみ子 和正 み和雅末麻繁志ふ の る美美一雄男津み はるる 金之助 百合子 和 伴藤 美恵子 п 於 子 闡 子

ジョー

正月の予定にたっぷり寝る時間 初孫の厚着薄着でもめており これ見よとばかり働くショベ 検問の巡査ねぎらう千鳥足 老い二人二段ベッドも捨てる破 地下足袋で常連ぶった屋台 赤札を春夏秋冬妻は着る ギリギリの境に松茸 停年を境に背が丸うなり 国境を越えたきずなを結ぶ 川柳ねや 、がわ報 頭上げ 孤児 ル カ H 田 博泉報

千鳥足

火の用心について

42

がを着

敬

赤札をたぐればひとの指がある

千鳥足マンボのリズムに乗ってい 厚着せぬ鍛練をして風邪ひかし 湯豆腐の団らん温い窓ガラス 好きな娘が嫁いだ夜の千鳥足 赤札に悔いの残った無駄づかい カーを抜いて素知らぬ顔で いる いる

風呂に入り今日一日をしめ 明日でも良かった事でもめている 千鳥足かまへん父ちゃん帰っ 遠慮なく方言出てる千鳥足 人間味忘れ偏差値唯歩く 哀楽を見た赤札の人だかり どの顔で会えば許してくれる ぶくれた腰へカイロがまだ欲し くくる てネ

冬

てまり

まさ乃 かすみ 勝 あやめ まさお

十二月山頭火をば羨まず 柳塔まつえ新春句会

ライバルの計報北風強く吹き 広いので座るところがないお寺 趣味を持つ祖父に付いてるペンネー 牛乳風呂餓えてる国をふと思う 信号の赤を知ってる千鳥足 恒松

赤札の付いたソファーに掛けてみる 着ぶくれて雪のラグビー見て 新札のみな薄情に見えてくる 歳の瀬も迫り包丁 愛故に生かされて活く身のゆ 研がされる 41 とり ます 覚然坊 あいき 柳宏子 鬼麗静小鼓亜

遊水步路城鈍

叮紅報

佳句 地 10 選 前月号から

対岸 笑いたい時に笑って叱られ 近 くしゃ 日溜りにちんまり生きている字引 もう親に背を向けているベビーカー 0 T みを残して帰るもらい風呂 福 駅 を 通 1) す 3 る 吸 IF.

> 敏 好

胸のバラそれほど偉くなったかな ごの中身は栗に決ってる て心 夜はきれい 旅 は西 0 傷 か が ら陽 な街に 深 < が な 昇 な 4) る る シケ 鬼 年 3 遊代 江梢女

亜也子

妥

方

博晴

買わぬ気で来た目に赤札おどっ

吉之助 英王子

茸 向 か 音 L

諦めを重ねて老いを着ぶくれる 千鳥足今日は天下をとっている

背のびおろした千鳥足

赤札がつくとは知らぬ釦づけ

孫五人皺くちゃにする三ヶ日 ドーランの下でピエロの皺が泣く灯に群れる虫の中にも脱落者 最終の一人へ駅の灯が温い 灯が揺れる寄せ返す波偲ぶ女 湯どうふが囲む夕餉の灯の円か 好調を占う四股のいい響き 名鐘の響き余韻に聞きほれる 薄灯りすかして短詩の覚え書き 善意の灯見えぬ所で燃え続け 玄関の灯り帰らぬ夫を待つ 積年の労苦二人に灯りさす 先灯りたのしい夢をためておく 失職が響き積木がゆれてくる 武者凧の響きを消した冬の天 世話好きな女の声がよく響く 耳底に軍靴の響きまだ残る 建設の響きに全村甦える 暴走族地響き立てて追いこした 故里を踏む靴音に老母がいる 残り火へ踏み絵がこわい過去の 深酒の五体へ響きつらい朝 若人は響く雪崩に身を落とす 病葉を踏んで戻らぬ愛を知る 師の影を踏んで非行のはぐれ鳥 踏みだした一歩を意地が歩かせる 真心を踏みにじられた白 一人立ち暗夜行路に灯が欲しい 線をまだ踏み切れぬ淡い仲 疵

満正為 秀芳敏南老鶴舞愚鳳貢妻翠美静友芳み幸 根一児ブ江朗郎 子枝雄風華丸吉童人範子星治江子子之

> それぞれの運を預かる大鳥居 朱の鳥居成人の娘に艶を添え 九段坂鳥居の奥に待つ倅 お正月ゆっくり鳥居の数くぐる お稲荷さんは派手好み朱の鳥居 母の手に余る苦労 の皺のばし老夫は陽を拝む のない顔のどこかに棘がある 皺の数

> > 孤呂二 きみえ

里がえり念じて鮭の子を放つ 念押されとたんによぎる謀叛風 女ゆえ折れて哀しい念を持つ

信念に生きた獄死を笑えるか

具雄由昭文

々郎二子

三ヶ日過ぎると鳥居まばらなり

念仏踊郷土に昔のままの夜

十字路の霧から念が深くなる

念のため箇条書して式次第

念のため練っとく二の策三の策

運命と思う私の一人旅 青春の最後となった旅日記 道連れがあなたで旅は楽しくて 寒い顔したらあかんと寒椿 今年こそキリンさがして旅に出る

ふんぎりがつかぬまんまの一人旅座布団を枕にジュース酔ったふり 初鏡笑顔が好きな福の神 雪の夜が旅の情を深くする 床の間で何考えてる福の神 白に染み赤にも染まるエトランゼ 旅で得た妻の故国に根を下し - 鏡に折られて寒い鼻柱

章美子房

父ちゃんの信仰お神酒をさげるだけ わたくしに勝つ一念の釘を打つ 神棚にお神酒かかさぬ過疎の母 お神酒飲み子獅子の舞いの足乱れ お神酒なら頂く母のおちょぼ口 二男報 和武正克勇信 子雄己子太子虎

孫あやす笑顔は世界一

哀愁を帯びた笑顔に騙され

卯の花句会

神様もお酒の好きなお国柄

川柳わかやま

雑念の五体を嗤う影法師

泰 千**子** 叮正 多瑞 巡 代**報** 子 紅江子枝 歩

山柳岳富維花美久久太人一子梢緒 先方の意見も聞かず踊り出し 初風呂へああこの先は神任せ 先頭のひとりが持っている野心 先の先じっと読んでる隅の石みんな去って風が集まる指の先 先頭を行くのは案山子かも知れぬ 先の先よんで足元すくわれる 約束の指の先から飢えてくる 念入りに夢あみなおす針を選り 念仏の横で小猫が丸う寝る

子の笑顔心の縺れ解けてくる 年寄りのなんともいえぬいい笑顔 ふところの寒さ笑顔で切りぬける 魂胆が笑顔の蔭で見え隠れ 日本一の笑顔を母が持っている ゆきずりの笑顔旅路が美しい 耐えている痛み笑顔がいじらしい その先はいつものとこへ行く二人 夕日背に夫より先に樹を降りる

正桂芳稚公柳宏子香朗代子子 照白忠 光子雄 三天雀き正桂芳稚 枝 踊 子彦子み子香朗代 登志代 良 信道寿紫萬太正秀康雅光輝三千 茂 秋夫子香的津博雄勝子代子代

— 76 −

顔見世ので あの人の妻の視線が背なを刺す生き延びて険しい坂を誰が背に 無駄な絵を集めピエロの十二月 追伸に本音がのぞく年の暮 どうしてる唯それだけの電話待つ 除夜の鐘聞いてる何もせずにいる どの寺も思い思いの除夜の鐘 ぽち袋孫の名を書く除夜の筆 除夜ひとり春着の衿を替えて 煩悩が彷徨う除夜の東山 大晦日そばや笑顔でしめくくる 出稼ぎが帰り家族が揃う除夜 妻険し猫も夫もまた出かけ ホラ貝が険しい山の峰で鳴る 険しさへ凜と咲いてる山の花 人生の険しさ知らぬ人と添い 魂胆がなければ平気でいられたに 顔見世の余韻を冷ます橋の風 顔見世に酔うた頬打つ加茂の風 顔見世のほてり粉雪の街へ出る 顔見世に逸話の多い成駒屋 襲名の親子縁起の鏡わる カチョンのカメラにみんな集められ かの足へ岩山雪になる 天声人語だけで暮れ 噂にふける舞妓たち i る 河瀬 松川芳 子 于 は 志子 花代子 美代子 もも子 武庫坊 白渓子 され鬼鼓子的遊城 眉節 盛笑》 恵美子 とおる 步 水 7 不覚にもうまい造花に媚びる蝶 少年の旗はあしたの為に振る 鎮守の森にとり残されたわらべ唄 月天心息子と帰る千鳥足 祈ってる肩先少しふるわせて 無神論せっぱ詰まれば神来まし 牛歩よし本卦がえりを祝う膳 通天閣に登れば明日が見えますか 悔いひとつ 紺つむぎ女盛りの細い肩 犬好きは犬に挨拶して帰り あしたから来ない会社を振り返る 仏門にはいった女のロマン聞く 良い本に触れてやさしい顔になる 産土にごむさたわびる狛の雪 親一人子一人風に立ち向う ぬかずけば母の病のことばかり 太刀打ちができず息子の意にまかす 親の親またその親が子を案じ 同じこと祈ってきました初詣 目の出る日きっとあるよとにごり 母の背の丸みへ祈りが深くなる 母親を無茶につかうな俺の嫁 ネクタイをゆるめ不足をのぞかせる 大吉は去年と同じだった筈 六道の辻で振舞う父の 忘年会妻子眷属まで忘 娘して見てはおれないメロドラマ 尼崎いくしま川柳会 枚買って女に待たされる 明日へ重く影を引く 11 角野かず子報 中西兼治郎 酒 登為良宏楓光綾大いつ 志 実子江子楽子子仙を かず子 みつ子 兼治郎 美智子 年晴 鬼 静康 子江 秋香升子郎 夕焼けの色に染まって畑を打 募金箱左右見廻しそっと入れ 気をつけよその声耳に溝へ落ち 物溢れ不足するのは人ごころ 年賀状出したとこからこないも うまいことまんまと乗ったおとし穴 誰に渡すでもない名刺持っている よい便りだけは母にも読んでやり 明日からは核家族となる米を研 仲のよい夫婦に水をさしたがる 肩の荷をやっと下ろした良い返事 セーターに母の香りも編みこまれ ジャンパーに一升かくして来る悪友 行革に関係ないよな募金箱 万灯の中の一つに亡母宿る 宅急便里の香りと味を入れ 赤提灯チューハイ吞んで気焰あげ 天網を踏み荒らしつつ得意顔 人の道貫く親に子が染まり おこる人ないのが不足寡婦ぐらし 小さな町でうまい話を拾う旅 お隣に模範亭王がいて困る 固定給をよく知っているちびた靴 受付が迫ってあせる年質状 賽銭を頭に受けて初詣 お歳暮がわが家の前を通り過ぎ 親馬鹿の目には期待の娘に育ち 川柳ひらい

みか常歌定牧 ちす 子み子子人郎 貞宏保幸す 郁

77

ときお

正幸治郎

玉はじ芽

照路報

シゲ子

真佐緒

美代志

トモ子

一三和

見栄はってしんどいことになってくる どの顔も見栄があるから若く見え 忠告は真っ平御免マイウエイ ゴマを擦るぐらいなら窓際にいケロイドの叫び真っ平核の空 役なんか真っ平暇もカネもな 藍染めに生き初恋の人を捨て ちょぼちょぼの見栄はり合うて仲がよい サラ金は真っ平実家へ泣きに去に 真っ平と思うた人と結ばれる とっときのジャスミン浮気するかもね オレンジを食べて来たねと唇放す 古傷が癒えたら染まる君の彩 髪赤く染めた花子がまい戻り ぎりぎりに来て影だけを置い 迫力の阿弥陀如来は母に似 母さんの指先土と草の香ざ 菊香る日和に和服の乙女溶け 母と行く乳の香残る保育園 抱負など後ろ見てから言い給え 募金箱僅かながらも汗の金 いささかの募金も出来て年もくれ 七色に女を染めて消える虹 そして冬私の夢も冬ごもり 華やかにいい日旅立ち菊香る つ平と思う矢先がつきささる の香をふりまきふりまき千鳥足 せの香りを包む厨の灯 南大阪川柳会 の香りが染みる荷が届き 満ち足りた日 のしまい て去ぬ 風 滋雀報 久 柳 宏子 智慧子 喜美子 公 照 真備雄 柳五郎 青博 裕 幸辰 アヒル 千恵子 やすえ 草 胤 爱 ともる 秋 7 風 銅

> 結んでも尚結びたい尉と姥 結ばれて金銀婚という歴史

見栄やがて薄い中身に気付き出す 見栄張ったばかりに嘘が嘘を生み 見栄張ってみるか私も更年期見栄張って貧しい心覗かれる 美しき故に結べぬ男運 男手の結び上手に妻は病む 大吉も凶も仲良く梅の枝 人と人結ぶ世話やき路地にい 共白髪一寸ゆるめに糸結ぶ 目算と打算ひそかに手を結び 風船の糸に少女が夢結 お歳暮は見栄を上のせした嵩で 見栄張ったときから財布寒くなる い心覗かれる 3

やさしい思いやりが二人を結びつけ 結び目をきりっと見せて芸が冴え 三枚目の笑顔も作る名士です 綾妙 弘千冬善 代 生三葉信 頂留子 弘、 白秋庸 里珠子雄

田舎名士らくだのシャツが袖に見え 名士殿は米つきバッタの兵を持つ ママゴトに名士の席がちゃんと出来 スケジュール一杯詰まっている名士 素晴らしい名士の嘘を聞いている を忘れたある日おもしろい 章晴雅勝円柳 重 智 子久風風美女伸

> 丑三つの 1)

ラッパ吹く闘士いつしか名士録

モットーは父の生き方だと思う

足音を消しても蟬におしっこを 話題変え長居の腰を上げさせる ガスボンベ円に揺られて浮き沈 知らぬ人に香を焚く

庸寿 芙隆 滋佑 美女二雀

デザイナー泣かせる腰が折れてこ 物腰がやわらかで美人で人の妻 ガスボンベ囲んで秋の山を食べ 遊びにも連れていかれるガスボ 便利だが謀反も抱いてるガスボンベ ンベ

ハワイ川柳ウイロー社 市岡 をの時は翔んで見せようガスボンベ 腰入れた行革あちこち怪我をさせ ガスボンべわめきだしたい闇の底 神様に申し訳ない腰曲り 肩車嬉しく待ってるガスボンベ 振りむかずその足音は遠ざかり ともかくも商人らしい腰でおり 足音で鍵もあけよう灯もともそ 暁舟報 白歳は清鈴美輝民 る 汀栄み泉江栄水子 智重美 等 子 子 世千悦秀似美良穂 英

農家族牛は家宝と大事にし 友寄れば牛鍋つついて吞みかわし

九十六丑歳夢が溢れて居 人は言う善光寺参り牛 ガンも牛と縁ある仕事 鐘を合図に初詣り 香拝陽紅秀一蒼 夢 女山子渓山牛生 女賀

汗と泥儲ける金は知れている 牛の恋雷さまが落ちるよう 七回も丑歳迎えた我が命 移民達牛馬のように酷使され 牛なればステーク荷役と身を尽す 東大阪川柳同好会 斉藤三十

·四報 美

ガスボンベ危険ですからご用心 小砂 モットーはいつも他人に気をつかい

白汀報 鎮 凡九郎 雀踊子

明

今は今昔は昔というモットー モットーに生きた孤独な影法師

なまじっか技持ち雑役夫にもなれず耐えがたき叱責にも耐え技みがき 一円の価値を知っている儲けボロ儲けと於勝族にはない笑いが口儲けした話聞くあほらし 出会いから始まる旅に夢かける 執念の技逆転の金メダル 技ありを取ると泣いてしまいそう 技よりも心が大事と言う師範 黙々と働き他人に儲けさせ 儲けにはならぬ仕事で返す義理 クラス会儲け頭はオチコボレ 不況風儲け話にひっかかり 温室にだまされ梅に香りなく 梅見酒心通わす友といる 寒月の冴えを見上げる千鳥足 初雪をはだしで駆ける豆選手 勇気だせ友の叱咤に腰上げる 雪女山のこだまを呼んでくる 雷動に抗する勇気むずかしく ぎりぎりの技が極った勝名乗り 寒風も吹雪も蹴って行く夫 ボットに儲けを委す大企業 浜は指の動きで儲け の香が胸の奥底なごませる の実のうすくれないに進む食 下は得意の技で世界一 儲けした話聞くあほらしさ 吉川柳会 取る もつ П 渡辺 **善**句報 頂留子 喜劇 良白鎮綾覚 然 京屯彦珠坊 右滋公雀喜美春弘 近啓一子風子蘭生 寿秋と昭 朗人子生 昭松喜美 生女子 次碧小康 水生 子朗 男 マドンナの指にほころぶ梅の梅の枝志あり天をさす 雪女愛の台詞へ眼が炎える 別嬪の雪女なら戸を開ける 雪女同じ歩幅でついてくる 雪女女房ほどではないだろう モナリ 新券にしわがボツボツ増えてきた新学期部屋中歩くランドセル 気象庁慌てて寒い冬に塗る 子報官へバイカル湖から果し 始めからだますつもりの赤頭 寒き日の傷口癒えぬ女坂 始めから揉める議題が多過ぎる 注意する勇気非行の芽を止 向き変えたとたん笑顔に変えている 新生児一人が泣けばみんな泣き 父酔えば遠い軍歌がむせび泣く 思い出は思い出として米をとぐ 飯盒を見ると悪夢がよみがえる はじまっている宇宙の大戦争 エスカルゴ喰べる勇気がまだ出来ぬ 子報官へバイカル湖から果し状てのひらに脳死と書いて寒に入る 忍の字ではじまる女の日記帖 打明ける勇気峠の風に逢う ひと言の勇気がなくて手を挙げる 孫叱る勇気だんだん遠くなり 々新た取り残されてしまいそう 輪活けて隙など見せぬ寡婦 もくせい川柳会 ザの絵に雪 梅がくれます春の夢 める 巾花 正坊報 独 菩 荒 石 ゆ 秋 御 瑞 花 り か 菜 子 女 前 枝 あ柳し満律車千 で 子風江春子楽秋 きく子 あ文 やみか雄 えとみ々 まさる 新人の息吹きで戦場で、新人の息吹きで戦場で、 退院が間に チャルメラが師走の夜をきれぎたの。強金も年季もかけてます ブナ林神代のロマン語り合う 餅肌と言われ女のつやつやと 故郷の大黒柱の艶を見る 夕映に富士山頂は銀の色 あの日からどこか淋し 誤解だというのに妻のう 神主の 公園へ別の仮面を見せに来る 亡母の齢になってやっぱり 新刊書ひらくはたちのときめきで 寅さんの港にいつもいるさくら 三ヶ日家風の折り目受け継 母の味たっぷり盛って五目 竹の艶出た花篭に菊を活け 孫の顔葉書に刷って年賀状 公園で日 公園の日溜り探す捨小猫 果てる迄夫唱婦随という姿 公園で別れた娘の赤い髪 高砂の老いを讃えて謡い初 おさがりの晴着よろこぶ孫無邪気 お正月屠蘇酌み交す人もなし 狙う肩に漲る張りと艶 城北川柳会 曜画家は四季を画 近に迫った顔 中が笑う

い笑い す笑 母の 80 顔い 神夏磯道子報 薫富春福正賀 風子子一坊代 炉

悟好山秀圭綾正新八た静星久静公達三寿千炉 一 だ 留 会 産 美世 郎古久月介珠之郎重し歩斗美子一郎和礼子斉 郎古久月介珠之郎重

福引へ女氷雨もいとわない ジャンプ狂火の輪くぐりをやってのけ 挨拶の背中で妻がくしゃみする 始めから馬鹿でなかった途中下車 人妻が陰にかくれているロビー 縁遠い娘で福引は当ててくる 如才ない挨拶ロビーの裾模様 プレーボール少年の瞳は輝けりジャンプしたところに丁度柿があり 気の張った挨拶受けて風邪をひき 始まりか終りか火山灰が降る 快い挨拶一日過ぎてゆく 福引に当ってギャンブル狂になり 硝子戸の中漱石に触れる冬 公園に親待つ子等が寄る日暮れ チーズケーキー 健康な艶がこぼれる海女の 格式と年輪床の艶に見る 影重くグリコ森永年を越す 初夢に思いがけない人が来て 渋柿が艶よく熟れて騙される 公園は犬が人間走らせる 霜柱命のもろさ想うなり 朝寒の公園ジョギング又楽 味噌汁が美味い 反核の声が公園かけ抜ける 億かけコアラの 世紀始まる迄は生きてやる 菜の花句会 磨きをかけた艶 ビーで憎い嫁のこと 口心がまるくなる と思う初仕事 が出来ました HI 鬼遊報 弥鬼糸みつる 生遊葉る 射月芳 三昭 満繁午茂 津 子子郎郎 右 テルミ 婦美子 芙久枝 Ш 弘ふ 達 章栞 郎 男 風 葉 したい 孫と居る老いの素顔をのぞかせる 捨て銭と思い乍らも易の門革新の改造顔ぶれ変るだけ ほっとけば線香花火で済む噂 終戦の鳴咽忘れぬカンナ燃ゆ 小咄が人生訓の味を盛り 孫達は梅か桜か咲くを待 ドラフト記事仲人口を思わせる 恋一つ知らず逝った子いとおし 孫産みに娘二人が相ついで 月給をべべ着たマダム取りに来る 見る角度菩薩にも見え夜叉に見え 信念の革新後の世に光り 蝸牛殼を脱ぎたい日の孤 行き届く挨拶されて口ごもる 空港の くそ度胸ぶっつけ本番やってのけ ふところの温みに民話目をさまし 山の向うが見たくてジャンプばかりする 鏡から女傑の今日が始まり 挨拶 福引の景品口上ほどでなり ライバルと並んで期するジャン 哀しみは哀しみとしておめでとう 人居も惚ける間のない忙しさ 一階から返事が先に下りてくる 一度目 打吹川柳会 が苦手で道の端歩く 事して死ぬのなら悔い 弱い女の市場篭 ロビーで行くの行かな のジャンプで花に手がとど から去らぬ喪服が二三人

60 0 弘朗報 文 規 柳宏子 洋 雀踊子 子映

ミヤ子 亮次 宗八川 康 大朗

43

編みかけのセーター

頂留子

くき

シマ子

が通らな 10

春うららセーター セーターは亡母にもらった子守唄 洒落たセーター振り返ったら振り向かれ 街角のペアーのセーター セーターで行ける程度のおつきあい セーターに若さをもらう七十路 姉ちゃんが編んだセーター 夫にも妻にも似合うセー セーターでぶらり出られるとこが好 むらくも会 の色が瞼に焼き付いて 色選っている ター 軽やかに だから着る 編む かれ 明朗報 五藤好妙 百子子子子 芳峰正は と 子雪朗め 節智 田年勝 鶴子代子 いくの

セーター

輝きを増し 新しい年も旅路の一里塚 寒中水泳元気溢れる水へ飛び 伝統のアイ染め文化に輝いて こんな時胸に輝く母の星 何もかも酔うて忘れる酒が好き 倖せは輝く母の道しるべ 前けいこしっかり積んで初舞 宝刀の輝き先祖 老いて尚元気に謡う寒修行 して春待つ鬼瓦 0 D 7 、ン秘め

みどり

華

前になり後にもなり夫婦坂輝いて見える二十歳の晴姿 和やかな笑顔年輪のしわ刻む 妙薬のどれにしようかコマーシャ 前向きに歩けば自信湧いて来る かに人生ゆうゆう前を向き かり見て走る子へ危ながり の牛ゆっくりと後を見ず 11 ゆ清蚊福 き 子 祥声子 はる代 百

チャマ静 スサコ子

喜美子

高佳吉梅

女朗朗

孝秀芳峰正

心にも信号つけて角がとれ SOS義母の手を借る袋帯 押ボタン信号抱いてる児に押させ 子等巣立ち鍋ちいさめに買いかえる 鍋の底磨いて平和な日が暮れる 温めて冷めて帰りを待つ土鍋 前を見て暮す対話に夢がある 初日の出その輝きへ希望わく 新しいカップル見送る大安日 北風も負けそう元気な園児たち 元旦へ新たに心入れかえて 新しい闘志を燃やす国技館 新しいスタートラインに立つ二人 新しい晴着揃うた二十歳 和やかな笑いが隣まで届き 生きているしるし賀状に託してる 努力して生きる力のエネルギー 人前で見せぬ涙はそっとふく 年ごとに輝く夫の顔を見る 若人の晴れて輝く成人式 すこやかに働き晩酌いける幸 就職が決り子の顔輝いて 和やかさ嫁と姑の笑い声 人前で唄う音痴 信号音空しく聞いて受話器置き 燗付けて独りの鍋に酔い始め こんなとこまで信号田舎道 見信号信じきれずに左右を見 い時代に生きる子を信じ 幸川柳教室 の玉の汗 < 樹氷の 精 千秀報 千香子 ふみ な つえ よし美 幸 孝 明 茂 喜代美 八重子 さくら ふさえ 林武翠吉竹 つゆ子 寿

声量が小さく正論反故にされ 美人ではないのに声まで悪くなり 庶民より目白の声に気をつかい 忘れたい傷へやんわり触れにくる 何をしに此処へ来たのか思案する 願いごと忘れられたか成就せず 忘れてはくれぬリストに載った傷 はて何か忘れていそう不安感 長しゃべり肝心なこと言い忘れ 信号を縫ってピーポーつっ走る 信号はどうあれ木の葉風まかせ 信号灯惑う心を照らされる 信号機無口ときどき無視される 千 枝 子 三千子 智水庵

かなめ

藏衛星野乃

鉛筆を鉛筆けずりが食べている くりすますつりいはでんきできれいだな ちえのかげおいかけたらにげた 台所母さんのぬくもり見つけたよ 自転車にのったりおりたり急な坂 みかんがりすっぱいとおもってもあまい みかんがりハサミでいっぱいとったよ しんかんせんおとうさんとのりました 川柳たけはら 三歳千 小六早 小五美 小四純 小一はるみ 小一あきみ 菁居報 幼昌 幼史 枝 昭昭代

敏

断りの言葉の裏にある期待 将来の主役だまって耐えている 兄ちゃんの方がほしがる離乳食 干し柿の一つ一つに秋宿る 自画像も五十の目付きになっている 日曜日孫見せにこい見せに来い 定年がないからいつまでも駄馬で サンタクロース信じきってる子の寝顔 おかげさま鐘が鳴る鳴る除夜の鐘 美しい嘘では通らぬ針の穴 孫ひざに抱いてひととき仏間の灯 余情とやいっぺんに幕降ろさない 吹きだまりここも木の葉のドラマ棲む お正月まりつきかるたたのし 小 貞博一笑節白淑敬鈍比 子子路子夫狐子子舟子 靖静洋房蘭 之 子水祐子幸

二級酒の仲間が初心を語り合い ペコちゃんの笑顔にかげりグリコ犯 バレンタイン今年は輸入チョコふえる 七転び八起き初心に立ち返る 井上柳五郎報 葵青柳幸照哲 五銅郎好路郎

九十坂ひとつ越えたり紅を引く 文明へ少し逆らい子を育て だから言ったじゃないの一月の下弦月 ネオンなどない島の灯が豊かなり 真実は見えない文字で書いて 満月の下で涙は似合わない

シ康観 デオ子杏

康観貞博

新年に向かって電車が走り出す

三小方

小五

モー

新年に僕の暦はまだ無色

反対したダムに渇水助けられ ・ゼスも男おとりの罠に負け

杖の人へ歯がゆさ堪えて手を添える がゆいほどに大器のマイペース 風峰洋

新しい世界が待ってるエイティーン ラストダッシュすべてに通じるなと思う 成績が下がるととがってくる言葉 公徳心すてられたごみ掃き集め 目で合図しても友達気付かない

中二希世子

小刀で鉛筆削れぬ歯がゆい手

がゆさに思わず叩く土俵際

長生きをしてほし夫の酒の量 じたばたしたって進学の娘が二人

令 菁 子 居

-81

やきいかの匂い吉兆流れ行く 平和なり祈願したのは趣味の寺 戎さん覚えてますかまた来たよ 犬思えらく今日のご主人甘い顔 正月は小言も少し甘くして 蜂蜜の甘さは知らぬ蜜蜂で 甘酒に酔うやさしさに包まれる思い出は甘いことだけ残ってる 期待する程でなかった新暦 妻はもう甘えもしないフルムーン 凜々しさと甘い相もつ如来さま 孫つれた娘に年玉をくれる母 甘えたい時に甘えるにくい人 甘い声手練手管は知りつつも チョコレート私の甘さ不安です 鬼が住む欲にいとまが告げられぬ 寝ていればとても優しい鬼の顔 鬼瓦たまには瞼閉じたかろう 恐妻家父子そろって鬼は外 お年玉やっても孫には鬼にされ 姑の無理な笑いが鬼に見え 姑のスランプ嫁はほくそ笑み 満開の桜スランプを知らず散り スランプの壁裏口に気がつかぬ ライバルのスランプ横目で通り過ぎ スランプを口に出したらプロは負け スランプを猫まで馬鹿にしてかかり サークル檸檬 のまだ見えていた宵戎 北 春城武庫坊報 美緒報 たけ志 みつ子 武庫坊 ミサオ 三四子 今日子 智恵子 森子 雅 美 健進哲博宏番桃吟 7 3 房 子 一平治友大茶風 平水昭 天佑の歩幅と牛は知っており 寒い日の電車陽射しに客が寄り 邪魔されず屋根裏に住む夫婦鳩 百匹のノルマ果した鵜の憩い ドアあけた時からテストされて 大和路の雀は塔の屋根が好き 不景気に気の毒がってる鬼もいる 手を振ってからの寒さを想いやる 寄り添うて寒さに耐えている暮らし 梅一輪寒さの中で春みつけ 屋根ばかりみていた部屋がビルの底 土壇場になったら鬼も恐くない ポケットのマッチで妬いて見る女 お雑煮は夫婦の味で年が明け みの虫が雨にも風にも逆らわず 雪だるま出来た頃には陽が当り 商魂が師走の街を追いかける 星が降る明日は幸せありそうな 六十路過ぎまだまだ女装えば 山道に憩うとミカン転げ落ち ビル街に頑固な屋根が残ってる 北風に白菜漬ける手の悲鳴 ラッシュから寒いホームへ吐き出され 宵戎森永犯が来ていそう 吉兆を手にしてからは笑みがもれ 寿恵広は小さくてよい戎さま 還暦の年に福有り宵えびす 賽銭が首にとびこむえべっさん 寅さんの映画で一家初笑い オーエスケー川柳会 大坂 いる 形水報 はつ絵 亜型 地子地 Ŧ てまり 昇 男 子子声屯 水夢 扇 泉 成 ボーナスが出ない赤旗立って川柳の選もテストの内ですか 福娘エビス顔した娘を選ぶ とけるほど疲れを癒す長い風呂 テストなどなんだ青い空澄み渡る 結婚を迫る女に罪はない 大棹の津軽の響き胸迫る 丹波牛肥えて運命を持たされる 振りむけば続いて来るのは夢ばかり 屠蘇気分うっかり続いて鬼が来る 夜逃げした続きは妻がおぼえてる 訂正印つづく老後の設計図 あいさつがまだまだ続く色直し 後に続く人を信じる人の知恵 人形も夢を見るかと孫が聞き パパの夢天まで届け肩 牛だって恋愛ぐらいしたかろう 秘やかな笑い車中の耳がたち 淀川の水量車窓から日々眺め牛の年元気であれば亡母の年 話好きミカン一盛掘ごたつ 山々の霧消えて行く二見の湯 水郷の民謡かえる防潮堤 人妻の笑み謎のまま持帰り 病院は白 夢で会う女はいつもうしろむき 蒙雪が続いて耐える事に馴れ 夢に見る故郷は何時も雪が降る かくに女の泪は強きもの 西宮北口川柳会 ナスが出ない赤旗立っている ナスが迫る諭吉の胸算用 石橋義 春江報

弘、

しげお

求 弘 登志代

てる 武庫坊 喜代子

満洲子

重胡吐寿

治樹村来美

花柄のコートで愛から逃げきれぬ雨コート雨の痛さを受けとめるコート脱ぐと女は急に細くなる ポックリト死ぬときコート邪魔になる別れ来てコートは脱がぬまま座る 古里や母亡き部屋に母の声児の背丈計る柱のきずが増え 紫のコートが似合う仕掛人 人買舟の女のコートあせている このコート脱ぐとき母になるだろう 姉妹でかわりばんこに着るコート コートの下にかくし持ってる離縁状 いたわりのコートへついて行くときめ ペアで買うコート跡目のない夫婦 着せかけるコート未練がまだ残り 言い勝って帰るコートの衿を立て 熟年のロマンスグレーにバー. LLの女が着痩せするコート 高下駄の音を聞きたい雨コート フルムーン背丈の伸びた寒椿 少しずつ記念が遠くなる帽子 結ばれた記念男は紅を買う カルダンのコートですマフラー英恵です コート着ると背中が丸くなってくる ートする妻が稼いだ品がふえ い気のしないお世辞は聞いておく に続くはしごが見当らぬ つ残されている寒さ 女が着痩せするコート 東はない雨コート バリー 礼眉 園千志か紀伊 すすす 子水歩秀津み雄郎 まさお 雀踊子 紫天佳春良柳郁 笑山正水 笑秋子征影栄 雨の いい返事まだ出来てない電話口風花や仏に逢いにゆくコート 故郷よ松よりありがたき雑木石臼の置かれしままや梅の庭 歌かるた姫は才媛美女ばかり 野良犬になって口笛信じない 万歩計森林浴をして帰る 正月は海外でしたという煙草 猪名川へのぼった鯨達者でな嫁が来て家事をきれいな詩にする 鵜呑みした言葉がのどにひっかかり 貧乏が好きではないが星が見え つじつまを合わすに冬日暮れやす 夢買いの男とならば風の街 七十五日経って結び目解けてくる お正月だから明るい鏡見る 天国へ続く道にも罠がある 掃除婦のマスク決して笑わな 正月だ許せと夫は出かけたり 初夢にせめて亡夫の夢を待つ 嘘でしょうひろがっている鼻の穴 人生の門出を飾る貸衣装 着飾るとウチも行くよと駄々をこね かされていると悟って老いを知る 枚舌使った自分が怖くなり 夜の男をゆるしそうになる 尼崎尾浜川柳会 かめに来た鬼の面 馴れてラジオを友にする つ植えている 肚 虫 春城武庫坊報 6 ^農恵鬼宏 美子遊子

み婦 薫春 つき 風 蘭

東一年正白堕

飢餓の国ゴキブリ

グラス持つポーズこの人あそび人つかれたと言う口実のコップ酒 銀行へかくし金持ち堂々と 銀行にカレンダー貰いに行ってくる 宝くじ夢でなかった人も居る 見ぬ夢を初春の日記に書いてみる 歩道橋騒いだほどに渡らない 逢いに行く歩幅を乱すつむじ風 手応えが確か彼女の手の温み アルバムに想い出語る借り衣裳 世界中観光地なり日本人 名物を先ず買うてみる汽車の窓 日めくりの厚さ今年の運不運 幸せの尺度が妻と食い違 米を蒸す匂いで明ける酒 飛行機に身構えている鬼瓦 女から傘を借りたが雨降らず 自販機のうどんに一つ抜けた味 満員の居酒屋で飲む一人酒 タレントが売場に立つとどっと売れ 銀行でお金の話などはせぬ エプロンでゆく銀行でたかが知れ 最敬礼されてはずかし預金額 目を閉じて夢を拡げる寝正月 行で世間ばなしはしない 柳ペン皿(前月追加分) ビーで孤独感をもつ ーナス自由にしてしまう だけが飢えしらず V の町 V 鈴木節子報 松風報保 よしつぐ 武宏 貞良佳 昭吉征秋 節藤田い年好勝妙 鶴く 子子子の代子子子 妙 松竹幸朱節岩和登

右歌

近

鬼宏和智

いわお治

み郎子香

十四郎

夢之助 寅之助

風萌泉坊子男興舟鳥風子吉風野

募 集●

課

題

吟 帖 抄 塔

(各題5句以内

新

井

Ŀ 宅

喜 不

酔 朽

選 選 選

★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。

重

1,

★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。 ★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。 子 北 Ш 越 Ш

五 月号発表 (3月15 H 一緒切

六

月号発表

4月15

締

切

栞

薫 紫 風 栞 選 選 選

水 JII

煙

柳

10句

此

染

(3句 10

橘 黑

高 111 尾

愛 水川 課 ★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。 結 飴 煙 柳 題 3: 帖 塔 吟 抄 (各題5句以内) (3句 (10句) 10句 西 橘 岩 黑 槇 井 尾 \mathbb{H} 高 尾 紫 緑 英 本 薫

3月の常任理事会は1日(金)

風

選 選 選

棒

選

良 詩

選 選

₹545 発行所

振替口座大阪8-三三二六八番 Ш (0次)太三九一 柳 塔

昭昭和和 年分 定 大阪市阿倍野区三明町二-一〇-一六 印発編 刷行集 +++ ウエムラ第2ビル202号室 所人兼 年年六 五 藤 中 百 月 月 円 原 島 百 百 一十五日印刷 童 蓬 送料50 (送料共 送料共 心 太 H 発行 円 郎

本社3月句会

会 席 題

題

当日発表

各題三句以内厳守

五百円

題

踏

む

高

遊 馬 4

選 選

手

野

村 杉 谷 西

太茂津 鬼 寿 弥

選

同封のこと。

沈

樫

宮

鉢

おはなし

숲 日

メンズファッションセンター3階

東区内本町

時

三月十

日

月

午後

公時

Ш

地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角 電06.941:1918 黒

香 選 ★投句は柳箋に一葉一題、 郵券200円

> JII 柳 塔 社

返 事 4月の兼題 混 麻 酔 る

4月の本社句会は8日(月)

第11

П

骨

山

内

静

水

選

4月

末日

締

切

3月末日

水

粉

千

翁

選

₹ 593

投句先

堺市堀上緑町二一 切

堺 可 111 内 九 柳 笑 会 方

夜 辺 市 JII 4)

第

10

> 柳 募 集

が家も雲井にま

を集め

ケ月経

つと自 ム雑祭

クス

押

編 集 後 12

なり、 版 鋭 を盛 to

ふんだんに出てくる。 スなので川柳と写作業をした。 カラ 待ち遠しい が同酒 柳 枚 董 れたわ いでは なれれば ばよい

農民が

あ

流行

略だが

本

よに

れば、

凡ゆる

#

巻 .

今流行の屋へ 引術秘伝 た。酒温泉 とは酒 あら ゆる企業 100 無 料 いったことで あ 50 排 ることを忘 加

何とぞご購読下 る。 Sw. が、健康 カゼスい ぜより をとるとあ

・ ☆谷垣史好さんが二月去 ・ 一中との知らせが入る。羽 ・ 一地の知らせが入る。羽 ・ 一地の知らせが入る。羽 一して安静 の結果 翌日 性が 対象に ・美を否 描 しているに違いてあるからは す にない 婦人を 日中の女

を待った。 好の諸氏と私は、 胸を 持つ、 の酔 軽症ら 撫 to. 似たりよっは、肺結核の おろ す いだろう。 ギリ + のは女 つ。かく美しくもへの登歌を惜しま 証 神話 生以来、 性自身だけ 背よ 女は、 1) to 意 1 ok

近道へ楽

7

3

//のマンション住まい。

公編 安堵

3

にもあ

たが、

晚年、

で、食い

転居

排

1

黒門市場

ドを

いるい

も南北さん

とは

藤原ご夫妻

本誌を印刷して下きってい二月号は食満南北だったが

2 124

発刊時には

集中する。二、三 その仕上げ

一ヶ月後の平づくりに

種と

解

粋

とある

公好

枷

しく女流に多くご

桃

大阪

案内書にも

利

用出来

を意味し、 足、一本欠けると倒 + 婚 七日には、 300 を 3 祈るば 史好 8 細 延主幹 さんの に組 まグ 化粧品を 性方は 米な女性たちを迷れ を、 + 如順 する 3 って欲 迷わす 数多く 10 F がみ n

て描か

れたという。

お声

心ない、

自ら絵筆

李

ままま。

る。一冊 その

原さん おれ

たとき、

速

追悼

壊を意

合十九枝夫 居だった。

齢だからよ

特別扱い

たりの 既往症

性に

女

いないと 民の中流 か四年前 かこの

欄

のだが、

南北さんは齢

李

女性專

+ ることか。

> 人とを区 業に

31

力

ンはヨ例

良心がゆるさならない。如何に あっても分に温 っては、戦後 配給に長 酒風 体 験し 杯のピー 過ぎた贅沢は に物が豊かに 所業にほかな のピールの た者にと 40 ついて、(金)と(ビ いる。 である。 持そ性物のが とか、あり、 察す その具体例を現在が、何でもいい仔細のファッションとか

(金)と(ビ)の比較

の職業に

解説

語に近いのではないか、と日の生活感覚からすれば死 流意 ゆるさな (金)(ビ)という 思う 書い 識は今も変っ のだが たのは、 以来、 き IF ある。 こで使わ という言葉に対し持 野春 カタ は、 X 50 というよ 私 水 れている されたと言 に変えたとい 全く新 りも単に漢 えば、 "貧乏 1011

大賞とやらを受賞し で生き 5 h k 慌て 派手な す が棺 れる。 想 や視点を変 を変えることによ された言葉にい 新しい価値

はやりだし、

流行語

1

所 d

印新便物思可

創刊大臣十三年 重巻六九四号

川卵苔

五百円(送料・五十円)

日刊 短 俳]]] 句 歌 柳 搜 選者 選者 選者 · 佐 欄 案

(掲載日)毎週火・金曜日 Œ 信

投稿規定〉

はがき

枚に三句(首)以内(川

歌と

(掲載日)

毎週月·木曜日

投稿先》

ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

大阪市北区中之島二

朝日新

自由課題・秀句には掲載紙贈呈

示すること)。投稿随時。

ームたっぷり ナ満点!! スタ

焼餃子 焼売



雑誌 05703-3